

本朝話人傳

野村無名庵

444
213



協榮出版社

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



特 216
68

傳 人 話 朝 本



庵 名 無 村 野



社 版 出 榮 協



本朝話人傳

野村無名庵

本朝話人傳

野村無名庵

卷頭に一言

1. 本朝話人傳

江戸が東京となつて更に大東京に擴がり、東京都と發展して、大東亞、否八紘一宇の中心地にならうといふ時の勢ひ、これに伴つて何事にも浮沈消長は免れがたく新聞雜誌或は單行本の速記物やラジオの放送によつて、讀むだけの講談聞くだけの講談は、大に普及發達いたしました。反對にその本元たる、演者を見たり聞いたりして味ふ定席の講談は却つて振はず、講談の席即ち講釋場は都内に唯の二三軒といふ、空前のさびれ方を示すに至りましたこと、當業者の遺憾も嘸かすと同情

されます。もつとも數の少なくなつたのは、講釋場ばかりでなく、色物はじめ其他の寄席といふ寄席が、その盛なりし昔から思ふと嘘のやうに少なくなつて居りますのは、これに代るべき大衆の娯樂場、とりわけて映畫館が、非常な勢ひで増加して來た影響を、先づその原因の第一に數へねばなりません。ところが昨今決戰態勢重大時局の關係から、映畫の方にも統制が行はれる一方、内容的にも轉換があり、それ等が動機で實演ものへ、一般の興味がふりむけられた結果、講談落語色物等寄席の演題も、再び時流に迎へられて興隆の兆を示して來たとのこと、これは我等同好者にとり

まことに喜ばしい現象であります。何にせよその以前は、神田の須田町を中心に、小柳、白梅、立花の三席が、目と鼻の近い所へ鼎立し、三軒ともそれ／＼繁昌をして土地の名物にもなつてゐた。それが白梅先づ失くなり小柳姿を消し、更に残つた立花も、數遍の代替り、三軒も一ツ所に榮えてゐたのが一軒になり、つまり神田の一局部だけでもこれだけ變化があつたといふ事になります。が、今申した三軒の中、小柳だけは講談席、而も由緒の頗る古い家で、表看板へ大々的に「正徳四年創業」と書き出し、これを何よりの自慢にしてゐました。勿論經營者は何代も變りましたらうがこの看板が眞實とすると、正徳から現代まで二百何十年、おまけや掛値があつて話半分として見ても百何十年といふ事になります。すい分古い家柄だと思ひますが、この小柳に、その創業の始めから、すつと傳はつたといふ釋臺がありました。釋

臺とは高座で演者が前に控へる机で、講談師が張扇や拍子木で叩き立て叩き立て、調子をとるながら辯舌を揮ふには、最も肝要な道具であります。これをそも／＼の創業から使つたとすると、古來數百數十人の大家小家、名人不名人、長老末輩、有名無名の講談師たちが、この釋臺を前にして毎日毎夜辯じ立てたことを考へると、恐ろしい位の感じもしましたが、ひどいもので釋臺もかうなると不思議な機能を現はしたといひます。何しろ何遍か削り直して、可なり薄くもなつてゐましたがそれでも机の表面に、ピシリ／＼と張扇の當るところは、誰が叩くにしても大てい場所がきまつてゐますから、そこだけが深く凹んで溝になつてゐました。そして天氣の悪くなるときは自然天然とこの釋臺に濕りが來まして、まるで汗をかけたやうになる。いくら拭いても又ジツトリとして來たさうで、その反對にこれが乾いて來ると、降り續

いた雨もきつと止んで、カラリとした快晴になるそれはモウ判で捺したやうだつたと席主がいつてゐました。つまりこの釋臺によつて氣象が豫測出來たわけで、斯うなると無心の机も何だか性ある化け物のやうにも思はれます。若しもこの釋臺が今まで傳はつて居りましたら、寫眞にも撮れませうし、實物を展覽會などへ出陳も出來ませうが、惜しいかな。大正十二年關東大震災の時に、神田區は一番最初に火の手に見舞はれ、小柳も勿論類焼、名物珍物の由緒古きこの釋臺も、灰になりましたのは返す／＼も惜しい事でありました。否、机ばかりではありません。この震災によつて、講談や落語に關する参考書畫や物品も、烏有に歸したものが少なからず、さらぬだに文献や記録に乏しき斯道の考證には、一層大きな障得となりました。が、幸にもこの震災の少し前から、關根默庵先生の苦心してお蒐めになつた材料及び、それに

よつて編纂せられた「講談落語今昔譚」と申す書物が辛うじて祝融の厄を免れましたこと、まだしもの社合せと申すべく、然しこれが原因で先生は病を得て間もなく永眠せられましたのは、全く斯道の事を記録する爲めに殉ぜられたとも云へるのであります。爾來いさゝかその御遺志をつぎにかけて集めました材料及、見聞の筆記により、兎に角この名人誌がまとまつた次第、努めて年代順に述べるつもりではありますが、讀物としての興味も考へねばなりませんから、記事の配置に陰陽の色どりをも配慮いたしましたので、順序の前後や脈絡の飛び／＼になりましたところもありませう。そこは及ぶ限り年代的の書添をしてあります。故、御熱心の研究家が、これによつて更に整理して下されば、講談落語年表といつたやうなものも自然に出來やうと存じます。そして小うるさくいろ／＼と、参考になりさうな事を書き入れました

のも、全く後世への記録資料を、提供したい微衷
であります故、お目ざわりの點は、豫め御寛容を
願ひまして、然らばこれより、そろ／＼本文へ入
る事といたします。

○神田白梅亭 大正末年廢業

○同 小柳亭 昭和十三年廢業

○同 立花亭 昭和十一年前席主大森氏の手より一龍
齋貞山へ譲り、更に他の手へ渡り、現在東寶の手
にて直營。

文耕と瑞龍 (一)

寶曆八年九月十六日の晩、日本橋榎正町の家主
安右衛門店小間物屋文藏方へ、多勢の聴衆が集ま
りました。これは例夜の通り、此處へ出演して快
辯を揮ふ馬場文耕の講釋を聞かう爲めでありま
す。まだこの時分には専門の、寄席といふ營業が
無かつた爲め、少し廣い普通の商家や住宅を借り
て、臨時に人寄せの場所に宛てたものと思はれま

す。これは今でも地方などにさういふ例もありま
すから、大體の想像はつきますが、馬場文耕は程
遠からぬ日本橋松島町に住居があり、こゝから通
つて出演した次第、この人本姓を中井、名を文右
衛門と申しまして生れは四國の伊豫であります。
初め通稱を左馬次と申しましたが、一旦僧侶に爲
つたのを中途で還俗し、江戸へ出て来て馬場文耕
と改めました。一旦坊さんになつた位だから佛學
は元よりの事、漢籍、易學の心得もあり、文筆も
達者で著した書物も澤山あります。元來馬術をよ
くしたところへ、文も出来るといふところから、
扱こそ馬場文耕といふ名を自選したのでありませ
うが、辯才もあるので本を書いてゐるだけでは物
足らず、多くの人を集めて講釋をやるやうになつ
た。これが寶曆七年の春で、場所は采女が原の野
天だつたといふ事。但しこの人が講談の元祖では
ありません。元祖はもつと以前にあります。

明治十五年の八月に、警視廳から講談の營業者

「軍書講談の起原を記して差出すやうに」
と達しましたところ、當業者から、

「人皇七十四代鳥羽天皇の御宇、保安年中、洛陽
一條の邊りに立つて、天下の治亂世の中の浮沈を
説き（中略）往來に立て講じ、人々これを聽かん
として山をなし」云々。

と仔細らしく書出したとありますが、何分にも
見て来たやうな嘘をつくのが本業の講釋師だ。は
つきりとあてにする譯には参りません。元來講
談とは近世の稱へ方で、講釋といつたのが本統で
あります。つまり、軍談や物語、記録の類を、講
義讀釋、分りいゝやうにといて聞かせるといふ意
味でございます。そも／＼の始めは慶長の頃、
赤松法印といふ人が、徳川家康公の御前で、源平
盛衰記、太平記等の類を度々進講し、續いて諸侯

にも召されて軍書を講じたのが濫觴であるとして
あります。これが正確のところらしい。それゆゑ
世間では、この事を太平記讀と申しまして、段々
その流れを汲んでそれに倣ふ者が出て来た。それ
が講釋師の元祖といふ事になります。右の赤松
法印に續いて、赤松青龍軒といふ人が元禄十三年
に、原昌元と名乗つて軍談を講じました。場所は
堺町の葎簀張りだといふこと、矢張り野天であり
ます。講談は始めが青天井の下から出發したらし
い。まことに解放的な演技であります。その系統
を引いて大道講釋が、つい近世まであつた譯で、
又この青龍軒と並んで、名和清左衛門といふ者も
現れ、これを町講釋の始めとしてあります。すつ
と後れて享保の頃には、神田白龍子といふ大家も
出で、同じ頃淺草寺境内に、靈全といふ坊さんが
奥山の銀杏の太木の下へ、葎簀張りの小屋を設け
多くの聴衆を喜ばせましたり、少し後には、滋野

瑞龍軒、成田壽仙、村上魚淵、扱は有名な深井志道軒等が出てまして、講談の仕事は次第に繁昌の一路を辿つたのであります。

こんな具合に各人各様、いろ／＼の特色を有つた記録讀みが、多勢現れたその中に、最も異彩を放ちましたのがこの馬場文耕で、前申した如く文武兩道何でも出来る多能多才の代りには、氣魄も鋭かつた人に相違なく、諸侯の邸へ出入して、いろ／＼な内情も分るところから、表面は軍書批判講といふ名目をつけ、實は諸家の家政を批判したり何かした。秘密といふと聞きたがるのが、人の缺點ではあるが共通性だから、この素つ破抜きが評判になつて、毎日毎夜聴衆は殖へるばかり、看板も最初、「大日本治亂記」と書いて出したところ、どうも穩やかでないと思はれました。これは止められるのが當り前で、亂の字がよろしくありません。そこで今度は「心學表裏話」と訂正

して出した。といふのはこの時分手島堵庵一派の心學が、大に行はれてゐた最中なので、それへ目をつけてこんな看板を下げたといふ譯、而も、表裏話といふからには、心學者の内幕や裏面の攻撃といふ意味も含まれてゐます。又これが聴衆の好奇心をそそるやうな事になりました。

文耕と瑞龍 (二)

果せるかな馬場文耕、かういふ看板を掲げて決して心學をほめません。こゝが文耕といふ人の奇警なところ、心學は今日から考へましても、佛道儒教いろ／＼な教へを折衷し、人の我意我執をすてさせやうといふ、精神修養には好適のまことによく出来た教へでありまして、ことにその道話の話し方は、軟かによく分り、充分に徹底するところ、話術としても至極すぐれたものであります。けれども世間には、又その悪口をいふ者もあつて

さういふ連中は文耕の心學攻撃が面白くてたまりません。我も／＼と殺到して痛快がつてゐた。文耕もます／＼張合がついて、古戦記や他の物語の中へ、心學の悪口を交せて盛んに罵ります。心學者連中これ聞いて納まりません。中にはたまりかねて、談判に押かけて来るものがある。文耕は平氣なもので、

「何を言はふと私の口で、私の思つた儘をしやべるんだ。大きにお世話ぢやアないか。打ちやつといて貰はふ。どうも私には心學に感服しかねるところがあるから、その思つた通りを述べた迄だ。お前さん方本當に心學が腹へ入つてゐるなら、文句なんぞはいへない筈だぜ」

「そりや又どういふ譯で」
「だつてさうぢやねえか。心學は我を忘れる、自分をなくせといふのが極意だらう。もつともそれは心學には限らねえ、何の學問でもトドのつまり

は、我といふものをなくなさうといふところに、最後の目安があるらしいが、その心學を本當にやつてゐるなら、何を言はれたつて腹なんざア立たない筈だ。決して逆らわず争はず、打たれたら私は構はないが、貴方のお手は痛みはしませんかと迄、悟れといふのが心學ぢやアねえか。乃公に何か言はれたつて、赤くなつて押して来るやうぢやア、まだ／＼本當の心學者とはいはれぬえ。修行を仕直して出直して來なツ」

とこんな具合、その上で得意の毒舌をあびせます。突込んだ方が、あべこべにやり込められるやうな事になる。傍聴してゐる他の聴衆は面白がつて、一層人氣が高くなるばかり、この喧嘩腰の變つた氣象が、やがて自分の累ひになりましたのは是非もない事でありましたが、文耕も酔興で毎夜講釋をしてゐた譯ではなく、これが營業なのでありますから、講釋場に行燈の看板をかけ、これへ

自分の名を大書し、その下へ、

「席料の儀は思召次第、無料お出はお断り申上候」

「はき物お心づけ被下度候」

などと書いた紙を下げました。これが寄席の行燈看板の始めとなつて居りますが、この樽正町の小間物屋へかゝつたのが、前にも申した如く寶曆八年九月十日の晩からで、即ち夜講であります。門口へ、

「武徳太平記、珍説森の筆、毎夜暮六つ時より、演舌者、馬文耕申上候」

と書いた行燈を出しました。この太平記の方は何でもありませんが、後席の森の筆が問題になつた。これが何だといふと、その頃、美濃國郡上八幡の城主三萬八千八百石、金森式部少輔のお家に騒動が起つて改易になりました。その金森家騒動の實説を、早速材料として講釋に用ひたからで、何しろまだこのお家騒動が世に知られたばかり、

「此方へも貰はう」

「私にも引かして……」

と人々争つて鬮を引き、この小本が飛ぶやうに賣れました。しやべるばかりでなく書いたものまで出したのだから、言論の取締の嚴重だつたその當時、これが官の忌避にふれない筈はありませぬ。捨て置きがたしとあつてこゝに前述の同月十六日、文耕を逮捕の爲め、數人の捕吏が文藏の席へ出張いたしました。

○文耕の著書 「江戸著聞集」「歌俳百人選」「百化物語」「武野俗談」「愚痴拾遺物語」「武士なまり」

「翁叙論」「盲千明一論」「そしり草」其他頗多し。

○太平記讀 元祿十五年の刊行に係る。元祿曾我物語卷の三に「やつす模様の旅姿、まづ大津屋彌六は太平記讀になりて、鹽谷判官龍馬進奏の巻を懐中すれば」云々とあり、又、譜録集には「昔あつて今無きもの、すた／＼坊主に太平記讀」云々。

○赤松青龍軒 播州三木の郷土にて、赤松圓心の末裔又同時代に、京都にも原永揚といふ者、矢張り記

公けの裁きも落着しなれば、事件も解決してゐないといふのに拘はらず、勝手の想像をして、秘密になつてゐる事柄を口演したのだから、これは今だつて問題になりますよ。そればかりか文耕は念入りにも、筆に任せてこの事件を書き綴り、「平假名森の筆」といふ小本に印刷いたし、

「サア／＼唯今拙者が辯じました金森家の一條、續きは明晩も申上げるが、お宿元へのお土産として、委細はこれに書いてありますよ。本來は今晩おゐの方々へ残らず進呈するといふのだが、如何せん残念ながら、部數に限りがあるから御一同へ残らずといふ譯に行かない。そこで怨みつこのないやう、鬮取りにしてお分けしやう。お求めの方は紙代判行代唯の三百文でよろしい」と觸れた。何が唯の三百文なのか、その頃三百文といへば相當のもので、ちつとも唯の事はないのですが、そこは群集心理だから、

録を讀みて行はる。

○名和清左衛門 京都の産、自ら南朝の忠臣名和長年の末裔と稱し、出願の筋ありて江戸へ出た時、滯留中費用に窮し、淺草見附脇の小高き所にて、人を集めて太平記の理盡抄を講じ、後に訴願の叶はざりしを恥ぢ歸洛せず、其儘江戸へ止り、日々軍書を舌耕して大に繁昌す。

○別の一説 赤松青龍軒と、名和清左衛門とは兄弟といひ、又他の説には、清左衛門が本姓を憚りて赤松と稱し、同一人なりとも傳ふ。

○太平記場 清左衛門は享保二年八月中歿し、其子清次郎家主を兼ね、講釋讀の業を續け、子孫百年近くも同所に住み、世人これを太平記場と稱せり。淺草見附の傍の高き所とは、見附土手の東の方に後藏前に移りし稻荷社の舊地、天臺宗にて高照山勝福寺といひ、馬喰町四丁目の鎮守なりし事古記に見えたりと、而して清左衛門の講じたる理盡抄とは、寛永の頃北國に法華法印日勝といふ僧、名和長年の遠縁より傳はれりとして、著作したるものなりとぞ。

○記念の石碑 「太平記場起原」の碑は安政五年の夏

席主竹原常右衛門が、宮城支魚に書を乞ふて建立後、薬研堀荒澤不動境内に移りしが、大正十二年六月三十日、東京講談組合一同は、この碑前に集まりて、講談祖先祭を催したり。

○神田伯龍子 専ら大名旗本の家へ招かれ軍書講談を讀み、大に行はれしが、見識ある人物にて、町家へは招かれても行かざりしとあり、伯龍子又白龍子とも記す。

○靈全 淺草奥山の銀杏の大樹の下に、葭簀張りの小屋を設け、一人前十六銅宛の座料を取りしが、能辯にてよく人を笑はせ、日々三百人餘も聽客來集常にここを場所とせる爲め、人呼んで銀杏和尚といひ、風來山人——平賀源内——の如きは其の戲著に「よごれ銀杏が辯舌には、蘇秦張儀も閉口すべし」と記せしが、而もいふ所皆佛道の本旨に適ひ、不知不識の内に人を教ふる所ありき。後の深井志道軒は、全く彼を學びしものなりと。

○滋野端龍軒 俗稱を喜内といひ、如龍又如翁と號し多く山の手邊の手習師匠の宅にて軍書を講ぜり。寛延三年秋「なぐさみ草」を板刻し、寶曆の初め諸方へ出席の砌、これを抽籤で分ちしと。

和二年三月七日、八十四歳を以て歿せしとぞ。父子ともに金剛院に葬る。「元無草」は彼の著者にて辭世には、

東よりぬつと生れた月日さへ、西へとんとん、我もとんくとあり、

遠近の人をたつきに呼子鳥、覺束なくも通るとし月
思ふことあるも嬉しき我身さへ、心の影の世につながれて

等皆その詠なり。平賀源内の風來山人は「風流志道軒傳」を編作し、本人父子を招待してその朗讀を聞かせしことなど、昔く世の知る所なり。

文耕と瑞龍 (三)

馬文耕を召捕の爲め、文藏方へ向つたのは南町奉行土屋越前守手附の同心某と、その手先とでありましたが、手先はそれと心づかれぬやう、普通の町人風をして居ります。いづれも聽衆の中へ

○成田壽仙 初めの名壽左衛門、名を改めて後に惣髮となり、太閤記以外は讀まざりしが、後に伊達、黒田等の家政を講ぜしを、官より止められて以來日蓮聖人の傳記を講じて大に行はる。

○村上魚淵 伊達評定を初めて講じたる人にて、その外、諸家の家政を材料とす。席料を定めず、高座の前に箱を置き、聽客より志を何程とても投入させ、後にそれを數へては、三分を席主に與へたりといふ。

○深井志道軒 名を榮山、號を無一堂といひ、以前は知足院の僧支榮とて、成滿院、護持院等の納所を勤め、遊蕩の爲め追放され、浮世を達觀して本所石原に住み、著述を業とする内、かの靈全を學びて、處も同じ淺草の境内に辻講釋を督む。而も學問に造詣深く、佛門に在つて悟りにも努めし事とて、説く所該博にて警句を連發し、滑稽の戲言を交へては人を絶倒せしめ、又、手に怪しき形の木塊を持ちて机を叩き立て、座に婦女子と僧侶の在るを見れば、口を極めてこれを罵り、座に堪へざらしめたといふ。まことに一世の奇人といふべく前座を勤めさせし一子三之助は夭折、志道軒も明

交つて聞いて居る中、文耕はいつもの如く高座へ現れ、充分に一席辯じました。その一席目が終つて、休息の爲めに文耕が、高座を下りたところを狙ひ、同心の目くばせに、手先の一人が立上つて「文耕、御用だ。神妙にしるい」

激しく聲をかけました。イヤ驚いたのは同席の聽衆で、すは何事ぞと目を見はりましたが、當の文耕はビクリともしません。靜かにふり返つてチロリと睨み、

「何、御用だと。さうか、分つた。然しマア靜かにしねえ。文耕はこれでも侍くづれた。逃げも隠れもしねえから、辨當を使ふまで待つてゐて呉んな」

顔色も變へないで、悠々と食事を始めました。その落つき拂つた不敵の態度に、捕手もムツとしたものと見え、
「この亂心者め」

罵つたところ、文耕はフ、ンと笑ひ、
「何の氣違えなものか、腹がへつたから飯を食ふのに不思議はあるめえ。お前たちこそ正氣ぢやねえぞ」

嘲り返して食事を終り、自若として縛に就きましたのは、取亂さぬ立派な態度と、ほめていゝやら悪いやら、思ふに幾らか慢心の氣味もありましたらうし、義憤を感じて講材とした金森事件に就て、力を入れたあまり興奮もしてゐたものと思はれます。小間物屋の席では大騒動、肝心の文耕が縛られて、引かれて行つたからにはモウ講釋どころではありません。皆な掛り合を恐れて逃げ返る始末、その文耕は奉行所へ引かれてからも、取調の度毎に恐れ入るところか、

「憚りながら申上る。全體この度の金森家事件に就て、幕府のお捌きには私の計らひ多く、甚だその意を得ぬことばかり、以ての外と心得ましたの

で、この事件の顛末を講ずるにあたり、自分の意見も述べましたるまで、その何れが是なるかは、天の判断に待つ他はござるまい」

と理屈を並べ、あべこべに役人を論じ込める始末、これではわざ／＼憎しみを買ふやうなものでこの爲めに大體は、遠島位の刑で済むべき罪でありましたのを、無残にも同年十二月二十五日、松平右近將監差圖、土屋越前守様の申渡しにより、町中引廻しの上、淺草に於て死罪獄門といふ重刑に處せられる事になりました。それも本人ばかりでなく、家主世話人貸本屋など、關係者がそれぞれ相當の處分を受けたのですから、今日から考へますと、すい分思ひ切つた極刑を課せられたものと思はれます。

つまりこれは馬文耕自身が、破廉耻な罪を犯したのではありませんが、書いたりしゃべつたりした事がいけなかつたので、今日でも言論の取締は

勿論行はれて居りますが、舊幕の頃は一層それが

厳しかつた爲め、これに引かゝつて筆禍と舌禍とを、兼併せて罪になつた次第、全く題材に餘程注意せぬと講演の出来なかつた時代であります。これと同じやうな事件がこの後に又一つあつたといふのは、前に名の出ました滋野瑞龍軒、この人の子に二代目の瑞龍といふ者があり、一説には佐藤某の子で、元は醫師が本業であつたのを、瑞龍の養子になつたのだとも申し、又一説には養子でなく初代の實子で通稱甚藏、初めの名を隨宗と稱したとしてあります。中途から姓を赤松と改めましたが、この赤松瑞龍の住居は日本橋吳服町平七店で、諸侯方へも出入し、町方の席へは夜講ばかりへ出で、その講釋ぶりも巧かつたと見えて、いつも大入を取つてゐたと申すこと、記録によると文化十三年九月一日夜より、高砂町壽亭に於て義士傳を講じ云々と出て居ります。

「時は元祿十五年十二月十四日……」

と來れば、誰しもア、義士の討入か、と早くも合點をする位、知らぬものなき赤穂義士元祿の快舉が、何よりも講演の讀物として絶好の題材であります事は、今更申すまでもありませんが、有名になればなる程、眞實の事件へおまけがつき飾りがつき、本傳外傳銘々傳と、上は大石内藏助より下は寺坂吉右衛門に至るまで、四十七士の誰彼へいろいろ／＼な他の美談逸話を集めて來て結びつけたのもありますので、もう此時分には、義士傳も可なり誇張の加はつた、興味中心の面白いものに出來てゐた事でありませう。

「それ今夜から瑞龍が義士傳を讀む」と評判が立つて一層入りがふえます。瑞龍もこんなものばかり演つてゐたら無難でありましたらうが、これも讀み切つて新たに氣を變へ、同月十八日の夜講から、同じ壽亭で新らしい讀物を始め

ました。これが當つて尙大入になつたが、その爲めに又官のお咎めを蒙り、赤松瑞龍はからずも、細目の苦しみを受けるといふ事に相成りました。

○金森騒動 芝金杉の將監橋向ふに上屋敷のありし美濃國郡上八幡の城主三萬八千八百石金森式部少輔は、金森五郎八以來の名家なりしが、國政を家臣に任せて顧みざりし爲め、老臣根尾甚左衛門、彌川仁兵衛、邊渡佐伸等、私腹を肥して苛政を行ひ公邊の裁許を受くべき事件をも専横に取計らひ、神官杉山左近を放逐し吉田白川兩家の支配争ひに依估の裁斷を下すなど、横暴至らざるなく、遂に領内西氣良村の農民等、江戸屋敷へ強訴するに至りしを、老中本多伯耆守、若年寄本多長門守、大目附曲淵豊後守、勘定奉行大橋近江守、代官青木次郎九郎等に請託して、事を隠滅せんとせしこと發覺し、金森家は改易となり、式部少輔は寶曆八年九月二十六日南部大膳大夫へ預けられ事件に連座せる本多伯耆守以下前記の諸役いづれも御役御免、通塞、所領沒收等の處分を受け、その累を及ぼすところ極めて廣かりし爲め、天下の耳目を聳動せしむるに至れる、可なりの大事件なり。

瑞龍と龍山

高砂町の壽亭で赤松瑞龍の講釋、文化十三年九月十八日からの讀物がといふと、これは看板に、「中山瑞龍傳」と出し、中山物語を讀んだのでありました。中山物語と題だけを聞くと、何か上古時代の閑雅な物語のやうに思はれますが、どういたしましてその内容のやかましい事、即ち勤皇の精神烈火の如き、硬骨の公卿中山大納言季親卿が寛政五年二月勅使として江戸に下り、幕府の横暴非禮をめちや／＼に痛責して將軍始め閣老以下一同を震え上らせ、平伏して罪を謝せしめた上、朝廷よりの御要求を恐れ入つて奉仕させたいふ、血湧き肉躍る痛快な讀物であります故、事柄が事柄だけに、少々むづかしい點はありますけれども日本人としてこれを聞けば、誰しもいゝ心持にならざるを得ません。然し徳川幕府にとりましては

有名な白河樂翁公の松平定信程な智者でさえ、道理の前には勝たれない、問答をして中山大納言に取つて押へられギユウ／＼言つた、散々の失態をあかすみへ出されますと、まことに具合が悪くて幕府の威信にも關はります。そこで京都の人の手になつたこの中山物語の原本も、頒布をさし止めて享保年中に絶版としましたが、禁ぜられたものは見たいのが人情、苦心をして原本などを手に入れ、それからそれへ又貸をして、そつと讀んでゐたものもあつた位、勿論そんなものでも見つければ、すぐに焼捨を命ぜられたり、科料をとられたりしてゐたのでありますが、赤松瑞龍どこからこれを手に入れたものか、この中山物語を材料にして點取にいたし、この臺本によつて講釋をしましたので、サア評判にもなれば聽衆も争つて押かけた譯ではあります、その多くの聽衆の中に、隠密の役人が、交つてゐたからたまりません。とう

／＼捕縛となりましたのが、同月二十三日、即ち中山問答を開講してから七日目の出来事でありました。直ちに入牢を命ぜられ、掛り北町奉行岩瀬加賀守の手によつて取調べられました、何しろ絶版になつた程の原本を種にして讀んだ講談だから、よくないには極つてゐます。容易ならぬ罪科とあつて、重ければ馬文耕の先例同様死罪になるか、軽くとも遠島は免れまいといふ事に相成り、實に瑞龍の危ふさは、風前の燈火の如き立場となりましたところ、この瑞龍におたみといふ、當時十二三の娘がありまして、少女ながら健氣にも、坂本町の成田不動尊へ日参り夜参り、頭上から冷水を浴びまして、

「南無大日大聖不動明王、私の命はどうなりましたとも決して構ひませぬ故、どうぞ代りにお父さんの、お命の助かりますやう、お救ひを願ひます」と祈誓をこめ。又町役人のところへ参りまして

は、
「どうか私を代りに牢へ入れて、年とつたお父さんをお助けなすつて下さいまし」

ど哀願に及びました。この少女の詠みまじりの

が、
「罪あらばこの身に代へていとふまじ、助け給はれ父の咎めを」

といふ和歌でありました。父を思ふ一心が歌にも行ひにも現れて居ります。この至誠が人を動かさぬ筈もなく、そのいちらしい有様には、見る人同情の涙を絞らぬものとして無い位、何人も不びんに思ひましたものと見え、赤松瑞龍は江戸拂ひといふ。軽い處刑で事済みになりましたのは、孝子の一心天に通じたものと思はれます。席亭の主人傳藏や、五人組月番嘉左衛門も、巻添を食つて五貫文づきの科料に處せられ、この一件十月十八日落着となりましたが、孝女おたきはこの事によつて

その名を知られ、後にある大家から望まれて嫁に参り、父瑞龍もその家から扶養を受けて、半生を安らかに送りました、これ皆孝行の徳でありませう。

ついでながら此瑞龍に、赤松龍山といふ弟子がありまして、以前は徳川の旗本だつたと申しますが、本名が詳かに傳つて居りません。その龍山がある時、信州へ善光寺参詣に行きましたその不在中、吉原で妓樓をしてゐた叔父が妻女へ不都合な行ひをしたといふので大に怨み、碓氷峠の山中でその叔父を手にかけたのであります。講談の中でこそ、そんな場面はいくらもありますが、自分で實演しては困ります。大膽にも赤松龍山、これ程の罪を犯しながら、平然として席へ出てゐた。恰度その翌年、江戸神田白壁町の席(一説には遠州濱松の席ともいふ)で、いつもの通り夜講をしてゐる中、何と思つたか龍山が、前席の太閤記山崎

合戦を終り、後席へかゝらうといふ時に、目禮をして座中を見渡し、

「私もこれ迄永らくの間、皆様の御ひるきを頂き有がたく御禮申上ます。然しながら古人の言にも人の運命迫る時は、動ぜずしてよく修めよ。何事も天の然らしむる處なれば、終りを量るものこそ人中の人とも賞すべし。すべて覺悟は常にありと申します。今晚御來客の内、私に御用の筋ありて、御出役の衆四五人相見えます。さればこれが今生のお暇乞にも相成りませうと存じますれば、お名残惜しうはござりますが、今晚を以て讀納めといたし、これより後席一くさりにて御免を蒙ります」

と妙な事をいひ出したので、聴衆一同何の事やらと怪訝に思ひましたが、龍山それより山崎合戦のつゞき、山路將監討死の條まで、(一説には味方が原合戦ともいふ)滔々と述べ終つたところ、

果して客の中から捕方が四五人、バラ／＼と高座へ近づきましたのを、龍山ニツコと笑つて後ろの刀架にかけてあつた大小を投出し、自若として繩にかゝつたとしてあります。かくて吟味の上死刑に處せられましたが、これは文政二年八月十三日即ち瑞龍の事件より、三年後のことでありました。

立川焉馬 (一)

本編に題して、講談落語名人誌と名乗りました以上、講談の方ばかり申述べましては片よりますそこで項を別にして落語の方も、交互にお話を進めますが、何といつても落語道で肝要な先人は、中興の祖と仰がれて居ります立川談州樓烏亭焉馬であります。中興と申しますからには、無論その前に始祖がある、そのそも／＼の始めはといふとこれがあまり判然いたしません。元來、落語とは

何ぞやといふ事になりますと、思ふにこれは後世の稱呼で、最初は單に、はなし、又は、落し噺と稱へたものと考へられます。落しといひ、オチといひ、或はサゲといふ、この落の字は、落首のそれから來たといふ説もありますが、要するに、頓才的な洒落や奇抜な變化を以て局を結び、人を笑はせる滑稽な談話のこと、これが即ち落語でございます。初めは小話、一口噺の簡單なものから次第に發達して長編ともなり、種類によつて、素話、仕方噺、音曲噺、芝居噺、其他の區別をも生じたのであります。そして先づ大體の初めといふ事になりますと、講談がその源を慶長時代の赤松法印に發したのと同様、落語もやはり、慶長元和の頃を年の盛りとした安樂庵策傳を、その初祖と見ることが、最も當を得てゐるやうに思はれます。何しろ豊太閤が天下平定の大業を遂げ、四海一度び靜穩に歸し、所謂桃山時代の文化が昇平の華を

結んだ頃でありますから、風流も遊樂も、一時に興隆したものに相違ありません。もつともその昔源大納言隆國卿が、毎年五六月の頃、避暑の爲めに宇治の平等院へ籠り、ごく平民的に打とけた態度で、從來の人を誰彼となく、呼集めては様々の物語をさせ、これを一々草子に誌されたのが「宇治大納言物語」で、その後、「今昔物語」、「宇治拾遺物語」等も出ましたのを、落語の始めとなす説もあり、吉田兼好法師の「つれづれ草」も、これの一つに數へる論者さへありますが、どうもちと遠過ぎるお話で、矢張り今申した安樂庵策傳の著した「醒醉笑」あたりを落語の沿源と認めねばなりません。策傳は太閤の御前で、小さな桑の見臺を据え、これ等の本をのせて、お話を申上げたといふ事、有名な會呂利新左衛門もこれに倣つて、同じくおどけ話を太閤へ申上げたといふので「本朝話者系圖」には、その會呂利の名も擧げて

あります。ところでこれより後、延寶天和の頃には、京都に辻話の元祖、露の五郎兵衛といふ頓作輕口の巧者が現れ、同じ頃大阪に米澤彦八といふ者が出て大阪落語の祖となりました。この二人を京都大阪の落語の初祖とすれば、江戸にもそれがなくてはなりません。これぞ鹿野武左衛門で、座敷仕方咄といふのを始め、又この人に倣ひまして、横山町の休慶、中橋大鋸町の伽羅小左衛門、同四郎齋等も仕方話を演じたとしてあります。これ等が江戸落語の初期時代で、その頃數十年の間一向振はなかつた落語が、前に申した立川焉馬の出るに及んで、再び盛大になりました。以來ずつと今日に至つたのでありますから、この焉馬こそは重要な劃期的人物といふ事になる。もつともこの時代、即ち天明寛政享和文化文政の頃は江戸文學の爛熟期で、天下泰平年久しく、武事を推奨した二代三代の頃と違ひ、五代將軍の文學勃興時代

から、江戸は次第に趣味享樂の都となり、安永の初めから、草双紙や洒落本の刊行を見るに至り、多田の爺、夢中山人、鹽屋艶二、風鈴山人、朱樂管江、田螺金魚、梅暮里谷峨、志水燕十、戀川春町、唐來三和、振露亭、宿屋飯盛、山東京傳、爲永春水、十返舎一九、式亭三馬、さては太田蜀山等の名家大家相ついで出で、これ等の多くは大てい變名で、多くは大名のお留守居とか、御家人や藏前の札差、文人、學者といふやうな連中、それがこんな變名をつけて、嬉しがつてゐたのですから、一般に洒落た世の中で、八犬傳の著者曲亭馬琴のやうな、物堅い先生まで、正徳馬鹿輔といふ狂名で、狂文を草し、落語も作つた位の時勢でしたから、歌舞伎と花街と、江戸の繁華を集めた二大歡樂境を中心に、花やかな遊樂生活が、一般を支配してゐた潮流に促され、粹士も通客も、續

々輩出した筈であります。焉馬がこの時代に出て来て、風流に長じ滑稽に富み、一代の寵兒となつたのも、決して偶然ではありますまい。そして天明の四年四月二十五日、柳橋の河内屋に、寶合せの會があり、その席上、萬象亭竹杖爲輕が、自作の「寶合せの記」三卷を披瀝し、焉馬も、自作した「花のお江戸太平樂」の巻物を披講しましたがその跡で短い落語を二つ三つ演じ、來客一同に腹を抱へさせました。これがそも、焉馬といふ人の落語を公演した最初でありまして、天明四年四月二十五日は、落語道の記念日と申せませう。

○安樂庵策傳 京都吉田に住し、本姓は平林、通稱を平太夫と呼び、後に誓願寺中竹林院の住僧となり醒翁と號し、茶事を金森宗和に學び、常に諸侯の門に出入し殊に豊太閤に愛せらる。性頗る頓才に富み、笑話に巧みなりしたため、諸方に召されては座興を助けたるより、此事大に世に行はる。文筆にも長じ、板倉侯の爲め、己れの演ずる落語を輯

録して八卷の書物とし「醒醉笑」と名づけて刊行これぞ落語本上本の始めにして、元和九癸亥年に稿を起し、萬治二年これを版に附せり。又即席の落語にも長ぜしたため、同じ頃滑稽の妙を以て鳴れる曾呂利新左衛門と同席しては、新左が狂歌を作る毎に、策傳は直ちにこれへ一席の笑話を附し、互ひに打笑せしといふ。「曾呂利狂歌話」も亦安樂庵の筆に成れりとあり、晩年に至り筆となれる爲め、筆談を以て應答せしが、寛永十九年正月八日行年八十九を以て歿す。

○露の五郎兵衛 辻斬の元祖にして、輕口頓作の巧者なり。祇園、眞葛ヶ原、四條河原又は北野の邊に芝居を張り辻斬を催して世にもてはやさる。後に薙髮して露休と號し、又、露の字を二つに分け、略して雨洛とも呼びぬ。その落語を書物にして傳へたるもの四五種あり。元祿四年版の「露のはなし」五册、同十一年版の「露の新話」、寶永二年版の「露休置土産」五册、正徳二年版の「露休はなし」五册等にて、露休置土産には「露とのみ消えし法師が言の葉は人の耳にもおきみやげかな」とあり、元祿十六年五月九日歿、行年六十一歳な

○米澤彦八 生得輕口話に妙を得たるため生玉を定場として辻咄をなし、元祿の末より正徳年間にかけて大に行はる。その著せる輕口話の冊子「御前男」の序に「此頃京都へ上りけるに、都の若き衆、何と彦八、難波に新しい事はないが承はらん。されば夕べ、淀川にて水が物を申しました。何と何と水が物いふ不思議にあらず、こちらの都には、露が咄をする」とあり、歿年不詳。

○鹿野武左衛門 江戸長谷川町に住ひ、塗師職を業とし、座敷仕方咄の達者を以て聞ゆ。貞亨の頃、勤むる人ありしたため、中橋廣小路に建張の小屋をかけ、野天の辻話ゆえ、晴天八日間興行、木戸錢は當時六文なりしと、「武左衛門のゐるは賑はし涼み臺」これもその頃の句なり。貞亨二年「鹿野武左衛門口傳咄」を刊行、後、元祿六年「鹿の巻筆」五册を出せしに、折柄同年四月下旬、江戸にソロリコロリと呼ぶ悪疫流行、死者忽ち一萬餘人の多きに達せしところ、此症を防ぐには、南天の實と梅干とを煎じて服すれば即効ある事、而もこの事は某所の飼馬が、人語を發して告げ教へたる事等

をまことしやかに流言せるものあり。不安に脅えし市民等は争つてこの教に従ひしが、遂には其方書を小冊子として出版せるものさゝありしにぞ、果は地方へ迄も賣弘まり、南天の實と梅干の値は從來の二十倍三十倍に騰貴する始末となれるを以て官にても捨置かれず、同年六月十八日、町奉行能勢出雲守より、その迷信なること、流言者を嚴重に制裁すべき事の觸書を配附するに至り、きびしく詮儀の結果、この流言の犯人は神田須田町八百屋惣右衛門、浪人筑紫團右衛門の兩名なること發覺、而もその根もなき流言は、武左衛門が「鹿の巻筆」中に輯録したる、甚五兵衛といふ下廻りの役者が、馬の後足となり、ひん／＼と嘶きながら舞臺中を廻れる笑話に示唆を得、梅干まぢなりの書物も、武左衛門が執筆せることまで告白せしにぞ、あはれや武左衛門も召捕られ、元祿七年三月十三日、浪人の團右衛門は、江戸中引廻しの上斬罪に處せられ、惣右衛門と武左衛門は、從犯の故を以て流罪となり、武左衛門は伊豆の大島に流され、板木元の彌吉は江戸追放、例の薬方書は勿論、「鹿の巻筆」の板木まで、燒却を命ぜられた

るが、武左衛門は配所にあること六年にして、元祿十二年四月、赦されて江戸へ歸りしも、多年の疲勞にて病を發し、同年八月五十一歳を一期として卒しぬ。

○立川焉馬 本姓中村氏、俗稱を和泉屋和助といひ、本所相生町に住み、本職は大工の棟梁にて、傍ら足袋木綿類を鬻ぐ。文學を好み俳諧をよくし、狂歌戯文にも堪能の聞えあり。烏亭焉馬又は談州樓と號し、狂名を本業の大工に因んで鑿釘言墨曲尺(ノミノテウナゴンスミカネ)と呼び、其外桃栗山人、柿發齋等の號をも用ひた。而して太平樂之卷物、落語六義、その外の著書多く、大部の「歌舞伎年代記」を編み、劇界の重要記録を残したる功勞も、よく人の知る處なり。

○寶合せ 其頃市谷左内坂の名主に、鳥田左内といふ人あり、酒を好み、面白き人物にて、酒上熟寢(サケノウエウタタネ)と號せしが、安永二年三月初めて寶合せの戲をなし、狂文を草せしを始めとし爾來各所に催されたる遊びなり。

○太平樂の卷物 焉馬の自筆にて上下二卷あり。丈六寸ばかりの卷物にて、外箱は最初の持主たりし

淺草藏前の札差坂倉屋治兵衛の好みにや、烏桐の印籠蓋へ、抱一上人の筆にて「太平樂之卷物」と六字を記しあり。蓋の裏には其一の筆にて、助六が蛇の目の傘を肩にして後ろ向きの立姿を描ける稀代の逸品なりしといふ。而して卷物の本文は、別に板本としても傳へらる。

立川焉馬 (二)

さて天明の六年四月のこと、前に申した寶合せの會で好評を博したことから、ます／＼乗氣になりました立川焉馬は、初めて落語の會を主催することになり、萬事は四方の赤良が參謀になりました、この催しのチラシまで書きました。四方の赤良とは申す迄もなく蜀山人太田直次郎先生のこと、この位また萬能に達し何でも出來た通人は珍らしい。これ等が本當の先生であります。四方の赤良とは狂歌の方に用ゐる戲號、走り書で四方山人と書いたのを、人が間違へて蜀山人と讀んだ

太田先生横手を打つて、

「ウム、蜀山人とは、それも面白からう」

とその儘別號に用ひたのだと申します。その位しやれた先生の事だから、チラシの書き方も面白

い。
「このたび、向島の武藏屋に、昔はなしの會が權三りやす」

といふ文章、武藏屋權三郎といふのは、その頃有名の料亭であります。だから武藏屋に昔はなしの會が權三りやすと、引かけたその洒落は分つてゐますが、受取つた人が妙な顔をして、

「權三りやすは分つたが、肝腎の日取りが書いてないぢやないか」

「粗々つかしいなア。落話の會だからとて、日を書き落すのはひどいよ」

いつてゐるところへ、顔を出したのが、當時數寄屋河岸に居りました鹿都邊眞顔で、

「分つてるよ、それは二十一日だよ」

「どこに書いてある」

「ちやんとそこにあるではないか。昔はなしの會がござります。昔といふ字を分ければ廿一日となるだらう」

「ア、成程、これは趣向だな。然しそんな當推量をして、大きに違つてゐた日にははる／＼向島まで無駄足だぜ」

「何しろマア出かけて見やう」

と當日行つて見ましたら、果して會場の前に轎なんぞを立て、盛んな會であつたと申します。催主の焉馬や、四方赤良は申すに及ばず、朱樂管江鹿都邊眞顔、大屋裏住、竹杖爲輕、津無理志賀多宿屋飯盛等、狂歌の大家達や、戯作者等が百餘人も集まり、立川焉馬が判者となつて、昔話を披講いたしました。これがそも／＼落語の會の最初であります。當日は床に、桃太郎寶遊ひの掛軸をか

け、お神酒と黍團子を供へるなど、いろ／＼凝つた趣向があつたさうで、盛況も想像されますが、その翌年は、前年の秋に江戸中大洪水のありました爲め、世間へ遠慮で一回休み、越えて天明八年正月二十五日、向兩國尾土町の、京屋に於て第二回を催し、この時は五代目の市川團十郎も出席いたし、

我國のはなしに咲ける梅の花 白猿

と詠じましたのに對し、

香を聞きに来る春のもろ人 焉馬

とつけました。續いて寛政元年二月一日には柳橋大のし樓で第三回、同二年と三年は前の京屋で開會、翌年からは毎年正月二十一日を例會と定め「来る正月昔咄の開口につき一席づゝ披講云々」と書いたチラシを配り、この會を咄初めと稱しました。(桃太郎の軸はこの時にかけたといふ説もあります)。ところが、寛政六年になりますと

開催いたしました。蜀山人はこの時に、

萬年の龜井戸なればおはなしの七十八と聞くは
うそかへ

といふ狂歌を詠みました。うそかへは御案内の如く、龜戸天神の有名な神事でありませす。越えて文政五年六月二日、焉馬は高齡を以て大往生を遂げましたから、知るも知らぬも惜まざるなく、この葬式の立派だつた事、江戸の諸名家狂歌連戯作者の輩を始め、落語家講釋師は勿論のこと、七代目三升始め俳優が十七人も施主に立ち、三座の俳優出方關係者悉く會葬、それを見物するもの沿道に堵を築き相生町から表町の菩提所最勝寺まで、路は人を以て埋められ、怪我人の出来る騒ぎであつたと申すこと、本所深川の木工左官三百餘名も同業だから會葬し、見送りの總勢一千五百餘人に達したとしてあります。焉馬は寛保三年に生れ、行年時に八十歳、最勝寺に葬つて、法號を三樂院

幕府から萬事簡素にといふ取締令が出た。有名な所謂御改革のあつた時だから、この連中も、咄初めといふのを憚りまして、宇治拾遺物語披講といふ名をつけて例會を尾上町の柏屋吉五郎方で開きました。こゝに又落語と宇治拾遺物語との關係が考へられる譯であります。この外、狂歌雅號披露とか何とか、名目をつけてやつてゐましたところ、同九年十月になつて北町奉行小田切土佐守から、斷然禁止の嚴命が出ました。これが爲め折角盛りかけた落語もちよいと出端を挫かれましたが、その中享和三年になつて焉馬は正月七日、例の京屋に於て六十の賀筵を開きましたところ、交遊廣く、文名を知られた人の事だから、四方からの祝文山をなし、餘興もあつて非常な盛會、これより十餘年の後、取締も緩和されたので、落語の會は又も興隆して參り、文政三年正月二十八日、焉馬は龜井戸の藤屋樓上に、一世一代の落語會を

壽徳焉馬居士と申します。まことに落語中興の祖先たる烏亭焉馬の終焉は、花々しいものでありました。

○武藏屋 有名な中田屋一名葛西太郎に次ぐ料理店なるも、この頃既に中田屋は衰微して武藏屋が盛り他には、大黒屋、丸屋等が知られるなり。

○二度目の賀筵 文化十一年一月、焉馬は七十二歳の高齡に達せしにつき、親友、門人等又も賀筵を開く準備をなせしところ、其筋より「寛政九年十月中和助事焉馬尾上町料理茶屋吉五郎方借受新作落咄度々催し候に付北町奉行小田切土佐守殿より御沙汰有之向後左様の事故す間敷、又料理茶屋亭貸申す間敷旨御請證文差上候處近來新作の落し咄致し候者多く相成心得違之者も有之候に付以後落断立會不致様神田造酒右衛門殿より名主へ申合候との嚴命到達、俄に會場と定めし柏屋を變更し同月十七日に本所五つ目天恩山雁渡寺にて催す事とし、家根船荷足船四五艘を一つ目に繋ぎ、柏屋へ入来る客を、船にて五つ目へ送りし由。

○禁令の解除 文化十二年更に重ねて、落語禁止の嚴令出たるも、流行の風潮は大勢を動かし、文化十

三年には「北町役所御年寄方孫田六郎右衛門殿御口達、近頃諸方にて落晰相催し候者多く有之候右はたわけ笑ひ俗におどけたる晰は不宜候に付可成昔物語忠孝の道を述べ候様其方共より申諭し可成御内達に付此段御達し申候。二月六日、年番肝煎との達しあり、即ち制限つきの解除と見るべく、これにより落語の會は再び興隆を來すに至れるなり。

森川馬谷 (一)

時代は享保と思はれますが、尾張の浪人で、森川庄左衛門といふ人物、江戸へ出て來まして馬喰町の四丁目に浪宅を構へましたが、浪人の事ゆえこれといふ生業もなく、この裏屋の表に粟島といふ質屋があつたので、初めの中はその伴へ譚などを教へてゐましたが、家族八人ぐらし可なりが多勢だから、生活も樂ではありません。何かいゝ仕事はないかと思つてゐると、その頃淺草見附の

脇に、開きの講釋場がありました。何しろ兩國廣小路の盛り場で、晝の中は群集雜沓する。それを見込んで大道講釋、いつも一杯に聴衆が入つてゐますが、夜になるとあいて居りました。これが前にも申上げた名和清左衛門が元祿年間に往來の人を集め、太平記を披講した場所の遺跡であります元より假小屋でありますから、清左衛門亡き後は見る影もなくめちや／＼になり、僅に晝間だけヒラキの講釋に使はれてゐたのでありますが、これを見た庄左衛門が、名和清左衛門や、赤松青龍軒の昔を思ひ出して、

「名和といふ人も浪人だつたとの事、そしてこゝで太平記を講じた。自分も同じ浪人だから、一つ故人に倣つて見やう。何も悪い事をするのではない、外見をいとつてゐる場合でない。遊んでゐるよりはました」

と考へまして、思ひ立つたが吉日とその晩から

さすがに被り笠で面體を隠し、手丸提灯を携へて此場所へ出張しました。何しろ夜は使はずにあいてゐるのだから、誰も咎めるものもない。そこでよき所へ提灯をさげ。左の手へ太平記その他歴史の書物をのせ、右の手に扇子をもち、拍子を取つて叩きながら、朗々と面白く講述した。元より人通りの繁い廣小路だから、一人立ち二人立ち、忽ちの間に多勢が群がり立つて聴聞しましたが、聲は美しい調子は立つ、物知りで講談も面白いから聴衆はいづれも感服いたし、お冥加として志の座料をそれ／＼差出しました。そこは昔の人で物堅いから、無代で聞き逃げをするやうな風の悪い者ばかりは居りません。庄左衛門も思ひの外の收入があつたので大に喜び、その頃の四ツ、只今の十二時少し前まで読み、町嚙に一同へ禮を述べて又明晩と歸りましたが、一日／＼と次第に聴衆がふえる。所の地主だの家主その他近所の有福な連

中が、近所ではあり、立つてゐてはくたびれるので、自分の家から各自縁臺だの床几だの、腰かけを持つて來て熱心に傾聴し、面白い／＼と大さうな評判、その中にある晩のこと、濟んぢまらてから有志の面々が、

「實に先生の御講義恐れ入りました。どうぞ毎晩續けてお願い申します。然しそれにしてもこの儘ではあんまりひどい。どうでしやう手を入れて板でも張り、薄べりを敷いて皆が座れるやうに用意し、高座をこしらえて先生はその上で口演なされたら、先生もきく方も樂だらうと思ひますが如何でせう。先生が御承知なら、我々が取計らひます」

と相談した。庄左衛門も喜んで、

「それば誠に忝ない。何分よろしくお任せいたします」

といふ事になり、これから有志が金を出し合つ

て大工を入れ、羽目や床板を張つて家根も柿茸でふき、雨天でも差聞えのない席場が出来上りました。かうなると聴衆はふえるばかり、それからそれへと語り傳へ聞き傳へ、諸方から集まつて参りますので、日のくれにはスグ満員になる程の景氣これが各自に多少づゝ志を包んで差出すのですから、庄左衛門一晚の収入はなか／＼の額に上る。聴衆の中には勧める者もありまして、

「先生どうです。何とか名をつけて出したらいいでせう。先生を知つてゐる我々はいゝが、知らない者は、唯浅草見附の傍で講釋をやつてる先生とばかりぢやア、何だかたよりないやうではありませんか。それ故何とか、先生の名なり號なり行燈へでも書いて、看板に出してはどうでせう」

と言つた。庄左衛門も道理と思ひ、「それでは何と名をつけたものだらう」と考へましたが、ちよつとした思ひつきが成功

して、案外の成績になり、毎夜／＼澤山の収入がある。お蔭で一家八人が樂々と、今日を送る事が出来る。これはまことに幸福な次第、そこで馬喰町に住んで、八人の口を養ふといふ因みにより、馬谷といふ假號を考へ森川馬谷と名乗る事になつた。これが即ち初代の馬谷で、馬は馬喰町の馬、谷は八人の口を一字につめたものでございます。いづれも由来を聞いて感心し、

「さすがは學問のあるお武家の考へ、違つたものだ」と褒めました。これから馬谷といふ、今なら藝名だが、これをつるし行燈へ大字に認めて席場の入口へ掲げたから、一層人の目につくやうになりました。……と以上は筆者が先代馬琴小金井三次郎翁から聴取つた筆記であります。この馬谷の事はまだ續きます。

森川馬谷。(二)

横山町、鏝店、橋町、米澤町、馬喰町、この附近一帯の人々が集まつて、聴聞をいたします中にも、馬喰町には有名な、郡代屋敷がありましたから、郡代伊奈半左衛門の家來など、武士も多勢聴衆の中へ交り喜んで聞いたもので、何分にも時間ながい事だから、聴客の方でも煙草も吸ひたくなる、咽喉も乾くといふ譯、そこで又有志が相談して中には大工さんもゐるから茶釜の臺などを拵え、大きな茶釜を買つて湯を沸かし、茶袋へ入れた茶を投り込んで煮出す。茶呑茶碗も三四十備へ一席づゝの合間には、その周圍へ来て休息するといふやうな具合、毎夜濟んだあとも留守番の爺さんを置いて掃除をさせるなど、段々本行になつて来て、盛るに従ひ手狭を感じ、改築といふ事になつた。そこで今までの假普請を取崩して新に本建

築にかゝる。今度は總て本式に設備もとのひ立派な席が出来ました。元來この邊を鏝店と稱へまして、席の兩隣には揚弓場がありましたから、それに狭められて間口は三間しかなかつたが、中へ入りますと左右へ撞木に擴がり充分の餘裕がある。その正面へ高座が出来、うしろの突當りは見附の土手ですから、夏なんぞの涼しいこと、實にいゝ席でした。こゝが其昔名和赤松等の人々の太平記を披講したあとだといふので、世にこれを太平記場と稱へるやうになつたのでございます。とこれまでが初代馬谷についての馬琴翁の談話筆記であります。關根默庵先生の講談落語今昔譚によると、馬谷は町醫森川玄昌の次男、滋野瑞龍軒には弟に當り、俗稱は傳吉といひ、初めは馬文耕の門に在つたが、後に獨立して一派を立てた現今も昔からの儘を踏襲してゐる講談席の看板や配りびらの書き方は、この馬谷がその始祖である

云々としてあります。斯うなると迷ひますな。

一、馬琴翁の話では、尾張の浪人で森川庄左衛門といふ名だといひ、

二、關根氏の調では江戸の町醫の倅で森川傳吉といふ名であつたといふ。

三、同一人を二様に誤り傳へたものか。

四、それとも庄左衛門と傳吉は別人か。

といふ疑ひが起ります。別人だとすれば、庄左衛門が初代で、傳吉はそのあとをついだ二代目の馬谷かといふ事も考へられますが、さうなるとこの初代の庄左衛門なる人の、生年も歿年も一切分つてゐないのです。傳吉の方には明らかに分つて寛政三年正月八日、行年七十八歳で歿し、淺草松葉町淨土宗清常山涼源寺に葬り、法號を松譽榮順居士といつた、とまでハッキリして居ります。而して、關根先生のお調べによると、
「馬谷は、天明五六年の頃から、讀物を、初、中

東庵京山の許で、馬谷自筆の扇面を見たが、それには、

一聲も二ふしものどの呼吸にて、伊勢の故事記にあいの山かも。……づるけなし馬谷書。

と認めてあつたと、その筆記にしろされてある馬谷は例年正月の初席に、

大岡仁政談。伊達大評定。理世安民記。

と三つの講題を看板に並書した。即ちこの三種の讀物を、初中後三段に分けて講するのであるが三題の題字を合せると、大伊理となる。大伊理は大入で、その縁喜を祝つたものであらうが、後に初代典山なども、この例に倣つたといふし

としてある。この大伊理の思ひつきなど、前の馬谷の名の由来と同様、まことに面白くこの邊同一人かとも思はれますが、ちよいちよい席をぬいて信用を缺き、するけなしと斷り書を出したなどは人が違ふやうにも考へられる、暫らく記して後

後の三段に分け、軍書もの、お家騒動、世話ものと區別し、尙、前席一人を使ふ例を開いた。彼は文學もあり、一家の見識を備へてゐたが、氣性至つて活達、また壯時は酒色に耽溺して、時々持席を休んだので、彼の技藝を喜んで集る聴衆も、自然と愛憎をつかし、不入りになるところから、終には看板の下へ「づるけなし」と書いて貼出したといふ。而して馬谷が常にいふには、講釋は斯様に文飾を添え、俗に直して講ぜねば、各々方も退屈して面白くござるまい。よつて萬々承知の上でいろ／＼戲言も交へて申上るもの、正史の事實は、何と申す書物には云々、何某の記録にはこれ／＼と出て居りますと、一々引證して斷つたと傳へる。つまり、頭腦がよくて而も物事に頓着せぬ人物であつたらう。川柳點にいふ、講釋師見て来たやうな嘘をつき、蓋しこれも亦馬谷に始まるものと思ふ。著者（默庵氏）の家父只誠、かつて山の叱正を待つといたしませう。

○馬谷の代々 この森川馬谷を初代として二代三代四代の馬谷が相ついで出で、又その枝流をも生じた二代目馬谷は初代の門人で、初めの名を馬章といひ、これはヒラ場讀みの上手で、山崎大合戦を讀む時など、特に別びらをまいたといふ。文化七年實子に三代目を譲り、自分は淺草天王町に惠比壽屋といふ待合茶屋を出し、其後柳橋の船宿吉田屋の入舞となつたが、文政の頃歿したとあり、その子馬遊が三代目馬谷をついたがこれは早世。四代目は東流齋馬琴の弟子で琴梅といひ神田佐久間町で家主をしてゐた。文久三年四代目馬谷を相續、その後廢業して日本橋川瀬石町に古着屋を營んでゐたが、明治十九年八月十日六十一で歿つたといふ。

三笑亭可樂 (一)

斯道中興の祖と仰がれる立川談州樓烏亭焉馬が落語全盛の源となりましたものの、この焉馬は今日で申せば落語作家でありまして、口演を營業と

する本職の高座人ではありません。こゝにこれを本業にして寄席出演の元祖になつた人があります。これは日本橋馬喰町に住んで居りました権を拵へる職人で、京屋又三郎といふ江戸つ子、矢張りさういふ天才が備はつてゐたものと見えまして幼少の時分から、頓智頓才が發達し、ちよつとした洒落なんぞをいつた。末恐ろしい小兒があつたもので、而もその洒落が、大人も舌を巻く位アクぬけて鮮やかなものだつたといふから驚きます。そんな風だから、本を讀んだり物を書く事も好きで、稗史小説に目をさらし、自然と見聞も廣く物知りになつて、文筆もよくしたと申します。そこへ前申し上げた如く、立川焉馬を中心の落語が勃興して來ましたから、かういふ事の好きな又三郎何のががしませう。方々の會へ出かけまして、飛入りに演らせて貰ふ。これは勿論自作であります好きこそ物の上手なれで、なかり巧者だからヤ

ンヤと喝采、かうなると當人ます／＼熱は上るばかりです。ところへ寛政十年六月に、大阪から岡本萬作といふものが上つて來た。これはその前にも、寛政三年の二月に一度出て來まして、橋町二丁目の駕籠屋の二階を席場に宛て、夜興行をした事がありますが、萬作は輕口頓才に妙を得た巧者でありましたから市中の評判極めてよく、二度目にこの十年六月出て來たときは、神田豊島町薬店で、頓作輕口噺の看板を揚げ、辻々には繪入のピラを出して客を呼んだ。これが咄の寄席の始めであると申します。果せるかな非常の盛況、又三郎これを見まして、

「何も江戸つ子が上方の藝人に儲けられてゐる事はないよ。乃公たちも一つ、向ふを張つて演つて見やうぢやないか」

といふ事になつた、これが又三郎二十三の時です。しかし一人では出來ないから、同好の友だち

を誘ふと、

「よし、そいつは面白からう」

と賛成したものが三人ほど出來ました。同勢四人です。何か藝名がなくてはいけないといふので又三郎は山生亭花樂と名乗り、あとは立川金升、春夏亭草露、梅亭飄我、などといふ面々、この中立川金升は、その後間もなく廢業しましたが、草露は後に亭號を春秋亭と改めました。この人は櫛屋の乙次郎略して櫛乙といつて、花樂の櫛又さんとは同業であります。飄我は後に、芝の切通しの軍書讀み鈍口といふ人の養子になり、伊東燕慶と號して有名な太平記讀みになりましたが、これは皆後のお話であります。而して花樂を眞打にこの面々が、同年六月下谷柳町稻荷社境内の寄席へ、看板をかけて出演した。珍らしいから面白がつて客は相當に來ましたがそこは素人の悲しさ忽ち種が盡きてしまつた。仕方がないから又同じものを

やる。これではお客も面白くないから入りが減ります。とても岡本萬作の向ふを張るところの騒ぎぢやありません。とう／＼五日目に看板をおろしてしまつた。他の連中は、

「だから乃公はいやだといつたんだ」

などと苦情をいふものも出て來る始末、然し花樂はこの經驗によつて大分自信もつきました上、何しろこれが大好きな道なのですから、どうかしてこれを本業にし、この道で立とうといふ志を起しました。そこで同年九月二十八日、目黒の不動尊へ參詣して所願成就を祈り、その足で家へ歸るとバタ／＼片づけて肝心の櫛を造る本業の道具から、傳來の家財まで皆賣飛しちまつて金子に代えこれを路用にして江戸を出立、藝道修業の旅に出ましたのは、思ひ切りのいゝ人もあつたもので、先づ初めに辿りついたのが武州の越ヶ谷です。こゝで十月一日から木戸錢十二文づゝを取つて開演

したところ、大さう當つて大入を占め、先づこの分では幸先がいよと喜びましたが、興行は水ものどこへ行つても當るとは限りません。いつも柳の下に鱈はゐないとやら、こゝを打上げて松戸へ行くと、越ヶ谷に引かへてちつとも來ない。考へて見れば無理ありません。近頃でこそラジオのお蔭で全國にその趣味が普及され、地方の邊鄙へ行つても落語を知らないものは少なくなりませんが、つい近年までは、地方によると、ハア落語とは何だね。怪訝な顔で質問するところなんぞもありました。こういふもので話して見ると、アレマア對手もねえに受答へをして、ハ、一人狂えかと笑つた。狂人と間違へられては始末に悪いことなところさへあつたのですから、況んや百何十年も前に、江戸以外の土地で、落語などいつても分らないのは當り前でしたらう。客も來なければ興行をしてくれるところもない。路用が豊かに

あるではなし。サア花樂が進退谷まつて大に困つた。旅へ出て藝人に御難はつきものです。珍らしくもありませんが、するとこの松戸に山口又五郎といふ人がありました。苗字のあるところを見ると、帯刀御免の名主でもあつたかと思はれます。この又五郎さんが、此方も櫛屋の又さんと同じ名だから、同名相あはれむといふ洒落でもありますまいが、大に花樂に同情して、いろ／＼心配してくれ、この人の世話によつて、興行も出來れば入りも取れるやうになつた。すると山口氏が花樂に注意をいたしました。

三笑亭可樂 (二)

それはどんなことかと申しますと、山口又五郎が花樂に向つて、

「お前さんの藝名はどういふところから考へてこれをつけたのだね」

「どうといつて別に深い考へもありませんが、よくこの、山椒は小粒でヒリリと辛い、なんてことを申します。そこで亭號を山生亭、名を花樂としましたので」

「成程、私もそんな事だらうと思つたよ。面白くていゝ名だが、どうもこの字面がいけないね。山生亭花樂、何だか、生花か何かの師匠のやうに思はれる。それより他の字にとりかへてはどうだらう」

「ヘエ、何かいゝ字がありませんか」

「人を笑はせる落語なんだから、滑稽に縁のある方がいゝ。唐土に虎溪の三笑といふ故事もあるから、それに倣らて三笑亭としたらどうだね。花樂も可樂の方がよからう」

「ハア成程、こりやアどうも、有がとう存じました」

そこで早速、教はつた通りに改名した。即ち三

笑亭可樂、この人が初代であり、而も本業として寄席へ出た、江戸落語家の元祖であります。可樂はこの山口といふ人に、よい名をつけて貰つたりいろ／＼世話になりました、藝道の自信もつけば生活にも苦しまず上首尾で江戸へ歸ることが出來それよりこれがいよ／＼本業になつて諸方の寄席へ現れ評判をとります中に、追々門人も出來て盛大になり、寛政十二年可樂が主催で落語の會を開きました時など頗る盛會、この時の摺物は、深川親和の門人華溪といふ人が書畫を揮毫し、立川焉馬、櫻川慈悲成、三笑亭可樂、この三人の狂歌をのせてあり、

よい落しはなしの會の桃太郎、ちゞとばゞとに他から入來る。

といふのが焉馬の作でありました。更に文化元年六月下谷廣徳寺門前の孔雀茶屋で、落語の夜興行をいたしました。この時は唯、「はなし」と

書いた立看板を出したところ、

「腹がへつてるんだ。早くしてくれ」

と催促した客があつた。これはなめしと間違へたのだなどといふ笑話も傳はつて居りますが、この孔雀茶屋へかゝつた時に可樂が、聴衆から出題を求めましたら、「辨慶」「狐」「辻君」の三題が出ましたので、これを即席に頓作して一つの話にまとめ、其場で披露しましたので、一同手を拍つてその奇才に感心した。これが即ち三題漸の始めであります。その中に文化十一年の冬になりますと、淺草の奥山に謎ときをやる坊主が現れました。藪簀張の小屋を設けまして、こゝを常場所に曲獨樂をしながら齒みがきの藥を賣つてゐる松井源水と共同で出ましたが、これは十八九の盲坊主で、高座には机をひかえ、傍へ傘だとか下駄だとか、菓子などの景品を飾つてあります。どうするかと思ふと拍子木を打つて見物から

謎をかけさせ、即座にこれを解いて答へるといふ藝です。もし解くことの出来なかつた時は、これをお詫に差上げますといふので、これ等の景品を並べてあつた譯ですが、實に當意即妙うまく解いて鮮やかに答へ、如何にも早くて手際がいゝから一遍も景品を取られた事がなかつたさうで、聞くもの何れも、

「早いものだなア恐れ入つた。何と早く解けるのだらう、春の雪のやうだ」

といふところから、そこで號を春雪と名乗るやうになり、この謎坊主大さうな評判、その頃曳尾庵といふ狂歌師が、

かけわたす春の霞におちこちの雪さへとけて笑ふ山々。

と詠んだといふ程でありました。あまり評判が高いから、可樂もためしに奥山へこの春雪を聞きに行つたところ、成程早いには早い、ならば大

道の藝でも下がゝつた文句ばかり言つて品が悪すぎます。心ある者は皆な眉をひそめて苦々しがつてゐる様子が分つたから、可樂が、

「これではいけない、一つ乃公が謎解きの見本を示してやらう」

といふ意氣組、翌十二年正月二日から、芝神明社内の寄席へ出まして、いつもの落語の間へこの謎ときをはさんで中入にこれをやりました。いろ／＼な書物を読んで物を心得、懐ろが廣いから叶ひません。鮮やかでその上に品のいゝ事、到底春雪坊主なんぞとは比べものにならない。

「さすがは可樂だ、謎も日本一だ」

とこの大評判江戸中へ鳴り渡り、春雪坊主も僻易したと見えてその後間もなく現れなくなつちまつた。

「春の雪だけに解くのも早かつたが、消へるのも早かつたな」

と笑ひの種になりましたが、この謎ときをするので可樂の席は倍も入りがあつた。然し謎の爲めに客をふやしたと云はれては、落咄を興した甲斐がないといつて、斷然これをやめたといふ事、この邊にも可樂の精神が窺はれます。

○櫻川慈悲成 馬馬の門人には非るも、常に立川社中にありて別に一家をなし、馬馬と共に落語を中興したる人にて、通稱を大五郎といひ、宇田川町に住して彫物を職とし、櫻川杜芳の門人にて戯作をなし、最初は親の慈悲成と稱せしが、後に櫻川と改め、五代目白猿より、芝樂亭の號も譲らる。落語の實演はなさざりしも作話多く、門下よりは實演者も多く出で幫間となりしもあり、幫間にて櫻川を名乗る者の多きは、皆この人に流れの源を發せしものなりといふ。

○可樂の落語會 文化八年の春、可樂は再び落語の會を兩國柳橋の大のし八樓上に開きしが、此時の配り物は團扇を用ひ、表に喜多武清の筆になれる、大名が遊女と禿を相手に酒宴の圖を描き、裏には露の五郎兵衛と鹿野武左衛門の落語を抄録し、こ

れに可樂が添書せる趣味深き逸品なりしとぞ。
○謎合せ この事の専ら流行したるは、延寶の頃よりにて、而もその由来は可なり古く、慶長の頃幣陽に宗鐵居士といふもの謎百句を作りしとも傳へ、「其後いつの頃にやありけん。なぞ／＼何に、茶切庵丁長刀、納戸のかき金はづすが大事、といひし昔のふりを傳へて、寶永の頃御所謎の本上木せり云々」と蜀山人が「謎のことば」にも見え、此書には尙「唐土には後漢の世、我朝には小野篁」云々と記せるを見ても、由来きわめて古きものと思はる。而して明和七年に至り、湯島天満宮三月の開帳に際し、彌太坊主といふ非人、社地の往來に立ちて木魚を叩き、謎を解いては鳥目を乞ひたりとか。春雪の出たるはその後なりと。

桃林亭東玉 (二)

森川馬谷現れて以來、段々本格的の軌道へのつて興隆して参りました江戸の講談界には相ついで幾多の大家上手を出しましたが、その中でもヅバぬ

けて、名人の譽を得ましたのが桃林亭東玉であります。天明六年の生れで通稱を阿部桃次郎といひ若年の頃は禪宗の坊さんだつたのが、還俗して聖堂學問所の小使に住込み、それから獨立の講釋師になつて初めの名を塚田太琉と申しました。何分にも話術には天成の妙を得てゐて凄い程巧く、元來講釋は堅苦しいものとしてあつたのを、この太琉は女子供にも分り易いやう、小説物語に模して和けて講演しましたので、これが時世に適つて婦女子の聴衆も數多聞きに來るやうになつた。講釋が堅い讀口から、現今のやうに通俗に變つて來たのは、この人から始まつたのだと申します。後に名を改めて初めは桃林亭桃玉と號しましたが、まことに素行が修まらないといふのは、酒はそれ程でなかつたが至つての勝負好きで、年中それが爲めにビイ／＼して居ります。何しろ相當の年になつてからでも、これ程の大家でありながらその日

の米にまで差支へた事であつたといふのですから賭事の爲めに始終貧乏してゐたものらしい。然し食はずにはゐられない。

「倅や、ちよつと來な」

呼ばれて参りました二人の男の子、桃次郎の子だからといふので總領を桃太郎とつけ、その又あとへ男の子が出來たから今度は金太郎とつけた。

十軒店へ行つたやうな鹽梅、その桃太郎と金太郎に、
「お前たち御苦勞だがな、ちよいと平松町の小父さんとこへ行つて來な」

と申しましたのは、その頃平松町に小金井北梅といふ、これ亦當時の大家が居りましたからで、そこへ米を借りにやらうといふ考へ、小兒は毎度のことだから、

「お父ちゃん、又お米を借りに行くのかえ」
「アアさうだ。早く行きな」

「いやだ。いつも／＼キマリが悪いや」

「キマリの悪い奴があるか。お前が借りるんぢやアねえ、お父さんの使だ」

「尙いけねえや」

「仕様がねえな。よし／＼それぢやア乃公が、ちよいと手紙をつけてやらう」

端紙へサラ／＼と認めまして、
「サアこれを持つて行きな」

と出してやりました。二人の少年よんどころなく、北梅の所へ來て、

「小父さん今日は」

「オウよく來た、何だ／＼」

「あんまりよくも來ませんよ。ちよつとこれを見て下さい」

差出したから北梅が開いて見ると、
「一升の米あるならば貸し給へ」
としてあります。思はず吹出した北梅が、

「相變らずだなアお父さんは……然し人の事は言はれねえ。面目ねえが、小父さんとも同じくなんだ。ちよいと待ちな」

筆を染めてその下へ、
「我等も無くてままにならな」

とつけたといふ洒落た話が傳はつて居ります。年配になつてさへその位だ。況んや若い時分は尙亂暴です。江戸を飛出して旅を廻り、足を止めたのが常陸の水戸で、寄席の樂屋へ泊り込んで外出もしません。出られない譯で、先生こゝでも取られて裸になつてゐたのです。ところへ俄に水戸様のお屋敷からお召の使が來た。もつとも當人講釋は巧いのですから聽客は毎夜多勢來て大さうな評判、その中には御家中の侍も居ります。その人々が感心をして、御殿へ出てはその評判をするのが御隠居烈公齊昭様のお耳に入つて、扱こそ其者を召せといふ事になつた次第、席亭も喜んで早速こ

の事を取次ぐと、どこへも出られず夜具へくるまつて樂屋にクスぶつてゐた桃玉が、
「どうも折角だが乃公は窮屈な所が嫌ひだから斷つて貰ひ度い」

といふのを、そんな事をいはないと席主が勧める。當人も澁々起出しては見たが着物がありません。據なく寢卷の上へ樂屋にあつた赤合羽を引かけて、のこ／＼お家敷へ出て來たには御家來方も驚いて、

「何ほ何でもこの扮装ではひどい、拙者のお小屋まで參れ。衣類を貸して遣はさう」

「イエお思召は有がとうございますが、私は我儘もの、どうも借着といふやつは、心持が悪くていけません。土臺私は講釋をやる爲めに來ましたんで、服装を御覽に入れに參つたのではございませんから、これで悪かつたら御免を蒙ります」といふ挨拶、歸られては困るから、それではと

いふので御前へ案内をしたが、恰度夏の事で御隠居様は葭戸越しにお聴きになる。夕景ですから桃玉の左右へ燭臺を立てるのだが、アラが見へるといけないから、成だけ燈火を離してボロの目立たないやうにする。イヤもう御家來方は大へんな苦心であります。

桃林亭東玉 (二)

本人は澄ましたもので、それから滔々と讀み始めたが、實にどうも辯舌流るゝ如く、古今の名人でありますからその面白いこと、曲録にもたれてお聴きになつてゐた烈公様が、殊の外の御満足で一席が濟むと今一席をといふ御所望、餘程お氣に入つたものに違ひありません。二席の立て讀みが濟むと御隠居は思はずホツと息をおつき遊ばし、
「さすがは江戸の軍談師、天晴の者よ」
と御賞美になつたが、御家來方は赤合羽がお目

ざわりになりはしないかと、ヒヤ／＼ハラハラしてゐましたところ、豈はからんや御隠居様の仰しやるには、

「さて／＼講釋師などと申すものは、面白い風采をいたして居るものぢやの、余の面前へ出るといふので、今日は朱の被布を着て參つたのは珍らしい」

と仰しやつた。怪我の功名赤合羽が、御隠居には大さう立派なものに見えたのでせう。これには鐵面皮な桃玉も、いさゝか冷汗をかいたさうですが、御隠居は重ねて、

「あの者は何と申す」といふお尋ね、そこで近習から、桃林亭桃玉と御披露をする、

「ウム桃玉とは桃の玉か。然しまことに名譽の藝であるから、今日から文字を改め、東の玉と記して東玉と名乗れ」

といふ仰せ、當人もまことに面目を施して上々の首尾で御前を退り、これから東玉と改名したのですが、烈公様から藝名を頂いたのだから大したもの、これが御縁になつて其後兩三度お召しになり、澤山な頂戴物をしたから斯うなるとモウ赤合羽で御前へ出る必要もなく、スツカリ立派に服装も調つてやうやう江戸へ歸る事が出来ました。勿論この事が噂になつて一層の高評、その頃は晝席も一人の真打で一年乃至永いのは三年間も、同じ看板をあげて打續けてゐたのですから、藝も巧く材料も廣くなくては其の永い間保ちこたへる事が出来ない。力量のすぐれた人ばかりであつたことも想像されますが、扱その東玉が今度は一つ大阪へ行かうといふ事になつて、江戸お名残の讀切を催しました。讀切といふのは今なら講談大會といふやうな具合、名人大家が一堂に集まつて全部出演をする。座料も高い代りに顔揃ひで面白いから

聴衆もウンと来る勘定であります。數多の上手が代る代る登壇して得意の辯舌を揮つた最後に、いよ／＼真打の東玉が上る。この席は神田新石町の立花亭で、東玉の讀物は得意の得意とした文覺の荒行でありましたが、名人の藝といふものはえらいもので、東玉がこの荒行のところを讀んで、「那智のお山の峰々に、雪皚々とふりつもり、肌をつんざく山嵐は、五體の血汐も凍るばかり、瀧の飛沫に巖石の、氷柱は劍の林の如く……」とその場の光景を手取るやうに辯じてゐると時は七月の中旬で夏場のひる席だからごく暑い盛りです。聴衆一同皆んな暑がつて市場の若い衆なんぞは威勢がいゝから、大肌ぬぎで聴いてゐましたのが、段々と講釋に釣込まれ、次第に何となく寒さを覺へるやうになり、肌をぬいでゐた連中はそろ／＼と肌を入れるやら、中には蓑盆を膝へ抱へ込んであたる者さへある始末、一同暑いどころ

ではなくなつて身體を堅くして聴いてゐたところ、いよ／＼講談が進行して文覺が、「荒繩を以てギリ／＼と腹を巻つけ、必死の覺悟を極めたる事にして鈴を口へくわえ、合掌の儘身を躍らせ、ザンブとばかり瀧壺へ……」

飛込むといふ條になり、

「高さは四十九丈に餘り、幅は四十九間に至る、那智の大瀧物凄く、九天直下百雷の響をなし、ドツといふ水の音……」

とこゝ迄辯じて來ると、こは如何に、高座の一番前に座つてゐた一人の聴客が、ウーンといふと仰向けに引くり返り、口から泡を吹き出して氣を失ひました。サア満場總立ちの大騒ぎになつて、モウ講釋どころちやアありません。其儘中止して打出しましたが、席亭も驚いて急病人の手當をする樂屋からも皆出て來て介抱したので、やうやくに正氣づいたが、段々聞いて見ると、この人は性來

の水でんかんであつたといふ事、水頭痲といへば海とか川とか湖とか、大きな水溜を見ると病の發作するものですが、目の前に本物の水を見たのではなくとも、東玉の講談が眞に迫つて、恰も那智の大瀧が目前に現れたやうに思ひ、持病が起つてこの始末と分りました。以て如何にこの人の藝が神妙の境界に入つてゐたかが察せられます。話をしただけで人を氣絶させるなどといふのは大した藝術もあつたもので、これは後世に傳はつた有名な逸話であります。これより東玉の大阪行となりますが、この名人を繞つて、伯山伯圓腕くらべといふ物語、これは事實へ脚色を加へて申述べることにいたします。

○東玉の信條 東玉あるとき門人の東圓に教へていふやう「同業の中には、講釋師は藝人でないなど、身分も一格違ふやう自惚れてゐるものあれど、それは心得違ひなり。講釋師は學者にはあらず、されば樂屋を學屋とはいはぬなり。同じ樂屋ならば

落語家も講釋師も平等ならん。すべて講釋は面白くよむべし。誰は名人也上手也と譽められたら、追々客はへるものと思へ。表面には容儀を整へても、裏は飾り高ぶるべからず」と、また一家の見識を見るべく、東玉は文章もあり繪も畫き、風流の嗜みもあり。若き頃、ある婦人の爲め欺かれし時「美しき草にとげあり紅の花」と詠じ又、ある席主の妻の多辯を戒めて「風鈴もしやべり過ぎてはかしましい」と詠めりといふ。嘉永二年八月十九日六十四歳を以て歿し、本所柳島本經寺に葬る。法號を智光達道居士辭世に曰く「人間は友達どもが迎ひにて浄土の席を打つと答へよ」

東玉と伯圓 (一)

江戸軍談神田派の開祖、伯龍先生に三人の高弟がありまして、一番弟子を伯鶴、次を伯海、三人目を伯山と申します。この中の伯海といふ人は、南傳馬町一丁目の講談師、堀川嘉兵衛の伴で本名を源次郎、男前が好くて氣が利いてゐる上に、藝

もキビ／＼として齒切れがようございます。従つて三人の中一番人氣があり、師匠も可愛がつて居りましたが、所謂粹が身を食ふとやら、持つて生れた美貌が累ひして、どうも品行が修まりませんでした。見るに見かねて伯龍が厳しく意見を申しましたところ、年は若いし鼻息は荒い。「べら棒めえ。江戸ばかりに日は照らねえ。乃公だけの伎倆が有りやア、どこへ行つたつて立派に一人前の講釋師で通るんだ。面白くねえから上方へでも行つて見よう」

無分別にも遠走りをする事にさめた。すると豫て伯海の源次郎に、女の方から打込んで、深い仲になつてゐたお梅といふ、これは兩國の並び茶屋へ出てゐた女ですが、その頃の人気役者瀬川菊之丞に生寫しといふ所から、路考のお梅と呼ばれた程の美人です。このお梅が源次郎に、「お前さんが上方とやらへ行くなら、私も一緒に

連れて行つて下さい。私は一日でもお前さんと離れてはゐられないよ」

とせがんだ。

「冗談いつちやアいけねえ、上方までお前なんぞに行かれるものか」

「何のお前、行けない事があるものかね。私ア川崎といふ所まで、お参りに行つたことがあるよ。随分遠かつたが、上方は川崎よりもモツト先かえし」

「何を言やがる、それだからとても駄目だてえんだ。大阪までは百三十何里、幾日も幾日も、泊りを重ねる長旅だぜ。つい隣りみてえな川崎と一緒になるかえし」

「オヤマアいやだよ。そんな遠い所へ行つちまふのなら、尙の事私はお前を一人では手離せない。どんなつらい辛抱でもするから連れて行つておくれ」

お梅が泣いて頼みました。伯海の方でも出来ることなら別れ度くはない。充分に心残りのあつた場合ですから、それではといふので、酷い工面をしてお梅に店から暇を取らせ、手に手を取つて東海道を大阪へ参りましたのが、嘉永二年のことでありました。

夫婦とも初めての土地とて心細くは思つたが、同地の席主やら講釋師仲間の世話で取敢ず二階借をいたし、伯海は寄席へ出演しました。「藝人に上手も下手もなかりけり、行く先々の水に逢はねば」などと申すものの、矢張り巧いものは、どこで誰が聞いても巧いと思ふには相違ありません。最初の中はお馴染も薄くてやり難かつたが、段々叩き込んで来る中に、

「さすがに江戸前の講釋師、さつぱりとして結構やなア。大したもんや」

追々評判を取るやうになりました。ところが伯

海の源次郎、これがこの人の病と見え、段々とお尻が温まるに連れ、そろ／＼持前の道樂が始まりました。何だといふと、飲食に女狂に勝負事、所謂、飲む買ふ打つの三拍子が揃つてゐるのだから始末が悪い。サアそれからそれと遊び廻つて寄席も打こぬけば宅へも歸らないといふ、亂行が次第に募つて参りましたから、女房のお梅が心配いたしまして、

「講釋師も藝人であつて見れば、交際でお酒も飲まなくてはなるまいし、遊びにも行かなくてはなるまいから、私は決して嫉妬らしく止めやアしません。けれどもどうか勝負事だけは、御禁制を破ることもあり、願ひだから止めて下さいねえ」泣いて意見をしたのだが、伯海の源次郎、どうも思ひ切れないと見えて相變らず、賭場入りをしては借金だらけになつて居ります。それが爲めに仲間の受けも悪く、客の評判もよろしくない。本

人ます／＼自棄になつて、自墮落に身を持崩してゐると、ある日のこと伯海が搏突に負けてスツテンテンになり、茫やり歸つて来た住居、

「オイお梅、……今歸つたぜ。……何でえ。……夕方だつてえのに燈火もつけず、眞暗ぢやアねえか。第一陰氣くさくていけねえ。早くどうにかしる間抜けだなア。……オイ、居るのか居ねえのか、……何を押黙つてゐやアがるんだ」

ブツ／＼言ひながら行燈に探りよつて燈火をつけて見るとお梅の姿が見えませんか、

「何だ。居ねえのか、居なくちやア成程返事も出来なかつた筈だ。錢湯へでも行つたのかな、……階下の小母さん、女房はどこかへ行きましたか」

「ア、伯海さんでしたか、お歸りなさい、サアお梅さんはどこへ行きましたかねえ。お晝前から出たつきり歸らないんですよ。ア、さう／＼お出かけの時に、貴方がお歸りなすつたら、これを上げ

てくれと仰しやつて、此書状を置いて行きましたよ

階下の女房が何心なく、封書を一通差出しました。

東玉と伯圓 (二)

受取つた源次郎、ハテ何であらうと怪訝な顔をしたし、封押切つて見ればこは如何に、

「想ひ合つて夫婦になり、大阪三界まで一緒に流れては来たものの、とてもお前さんには末の見込みがない、愛想が盡きた故私は今から別れて江戸へ歸ります。どうぞ、これまでの縁と思つてくれ」

といふ意味が認めてあります。びつくりした神田伯海、あまりの突然だから不意を食つて、狼狽と同時に激しい憤りを感じ、

「畜生何てえ我儘女だ。自分の方から、是非連れて行つてくれとせかんだから、乃公は随分不義理

な思ひまでして、彼奴を自由な身體にしてやつたんだ。今更になつて、行末の見込みが無えとは何を云やがる。ようし、見込があるかねえか、これからの乃公をよく見てゐるツ」

腹立紛れに神田伯海、これからは道樂もやめ、熱心に高座へ身を入れ出しましたのは、所謂心機一轉と申しませうか。元來上手なことから勉強すれば客に受けます。受ければ席主も喜んで優遇する。看板の位置も進むといふのは當然の結果、

「伯海さんは客取りだ」

と仲間からも羨まれる位、本人も面白いからます／＼精を出し、押しも押されぬ一方の眞打になつて好評を博して居ります中、氣がついて見ると江戸を離れてからモウ足掛五年になりました。

「ア、師匠や家の者たち、朋輩の連中なんぞはどらしてゐるか、乃公を棄てて逃げやアがつたお梅

の奴、どうしやアがつたか」
などと考へますと、故郷忘れ難しとやら、サア俄かに江戸へ歸つて見たくてたまらなくなりまし
た。大阪の連中は惜しがつて引止めましたが、斯
うなつては歸心矢の如く、
「又出直して参りますから」

と振切るやうに、久々で江戸へ歸つて参りまし
たが、當今と違つて東海道を百三十里の旅行、隨
分昔は憶劫なことだつたらうと思はれます。それ
だけに懐かしさ嬉しさも深かつた筈で、やうやく
江戸へ着いて見ると、何しろ五年といふ年月が經
つて居りますから、其間には様々の推移があり、
様子も大分變つた中に、何よりも驚いたのは、師
匠の神田伯龍が、先年世を去つたといふ一件。

「エ、ツ、それ程のお年でもなかつたに、ア、乃
公は恩師の死も知らず、うか／＼と旅の空で自儘
をしてゐたのか。申譯が無い」

(あの不器用な伯山が、神田派の頭になつて大看
板たア、矢つ張り運だなア)

と思ひながら、その夜今川橋の染川といふこれ
は有名な講釋場ですが、前を通つて見ると下足が
鈴生りになつて、一杯の入りらしい。軒には伯山
の一枚看板が堂々と掲げられて居ります。思はず
腕を組んで見上げた伯海が、

「成程噂に聞いた通り、伯山はえらいものになつ
ちまつたなア。五年振りだ乃公が江戸へ歸つて來
たと知つたら驚くだらう。樂屋へ訪ねてやらうか
しら……」

と考へたが又思ひ直し、

「イヤ／＼、今更伯山に逢つたつてどうなるもの
ぢアない。伯山が師匠の死水を取つて、今の位置
になつた以上、そこへ師匠の死んだのも知らずに
江戸を不在にしてゐた乃公が面を出せば、兄弟子
ながら頭が上りやしねえ。又、あらためて江戸の

とさすがに胸を打たれ、早速仲間逢つて、
「して師匠のあととはどうなつたらう」
聞いて見ると、

「されば一弟子の伯鶴さんは、故郷の常陸へ歸つ
て師匠の名をつぎ、水戸伯龍と呼ばれてゐるとい
ふ事、その次のお前さんは上方へ行つたとばかり
くはしい様子は少しも知れず、そこで三番目の伯
山さんが、大先生の歿後を引受けて、神田一門の
總帥をしてゐます。それが爲めに弟子分は、八十
何人、今この江戸で神田伯山と來ては、一流の大
看板ですよ。お前さんが眞面目で江戸にゐなされ
ば、貴方があの人の位置になれたものを、惜しい
事をしましたねえ」

といふ返事、

(エツ、伯山が……ア、乃公もさうすればよかつ
たんだ)
と今になつて悔やんでも遅まきです。

席へ乃公が出るとすれば、いやでも伯山の下位へ
つかなくてはならぬ。そんな見つともねえ事が出
来るものか。ア、夢にまで憶れてゐた、江戸へ歸
れて、嬉しいと思つたも束の間、これは又上方へ
歸つて、彼地で家業をするの外はねえな」

物淋しくも思案をいたし、力なく此處を立去り
ましたが、何方を向いても面白くないことだらけ
ムシヤクシヤして堪りませんから十軒店まで來て
ヒヨイと見ると蕎麥屋があつたので、これへ飛込
み、

「天ぬきか何かで、一本熱燗につけておくれ」
隅へ陣取つて飲み始めました。

東玉と伯圓 (三)

然しお酒も氣分のものでありますから、心に憂
ひがあつてはいくら飲んでも、理に落ちて醉が發
しません。伯海は思はず太い息をつきまして、

「ア、考へて見れば乃公が莫迦だつたなア。僅かばかりの藝に自惚れて師匠に逆らひ遠つ走りをして我儘勝手に振舞つた報ひはテキ面、女には逃げられる。大恩受けた先生の、御臨終にも居合はせず弟子に先を越され、五年振りに歸つて來ても、今ちやア忘れられて馴染もねえから伯海さんかと聲をかけてくれる客もない。この間を無駄に過して、謂はゞ棒に振つたやうなものだ。こんなことなら歸つて來るんちやなかつたけ」

「獨り言に呟きながら、苦い顔をして盃を傾けて居りました。すると表の障子をあけて、

「今晚は……」

「オヤ、これは先生、入らつしやいまし、サアどうぞ、此方がすいて居ります」

「相變らず繁昌で結構だね」

「有がたう存じます、お誂へは！」

「ア、いつもの通り早いとこたのむよ」

「へえ畏まりました。あられ一はいい。お銚子つき！」

「へーい」

ニコ／＼しながら上つて來たそのお客が、隅にゐた伯海を見つけると、

「オウ、こりやア珍らしい、そこにゐるのは源ちやんちやアないか」

と聲をかけましたのは、これぞその當時日本一と云はれた講談の大家、桃林亭東玉と申しまして、ある夏の暑い盛りに、文覺上人那智の瀧の荒行を讀んでゐたら肌ぬぎになつてゐた聴客が寒さを感じて肌を入れ、兒草盆を引よせて抱へたばかりか、水でんかんの人が、話を聞いただけで大瀧の落下を目に見るやうに覺え、高座前で目を廻したといふ、殺人的の巧さを持つた技藝入神の名人であります。その大先輩に聲をかけられたのだから、場合が場合で伯海は感激いたし、

「アツ、東玉先生、どうもお久し振りでございますました」

「イヤ、本當に暫らくだつたな、いゝよ／＼、乃公の方からそこへ行かう。……オイ、出來たら此方へ持つて來ておくれ。此處で一緒に飲むから、……オツツツ、來た／＼。サア一つ行かう、マアいゝやな、受けておくれ」

「恐れ入ります」

「恐れ入らずにドン／＼やつておくれよ。然しよく歸つて來たなア。上方へ行つてたとか聞いたが大阪かえ」

「左様でございます。とう／＼足かけ五年も彼地へ腰を据ゑちまひました」

「さうかえ。イヤ大阪も藝をよく聞くとこらだよ。だが、何といつても江戸つ子には矢張り江戸がいゝなア。乃公もちよいと上方にゐた事があるが、どうも彼地の土にならうとまで思はなかつたな。」

何もお世辭だから乗込みの時には……富士筑波乗てて見に來た天保山……といふ句を摺物にしてなこれを土産に大阪入りしたら、大そう土地の人に喜ばれたが、その大阪にも飽きが來て、いよいよ江戸へ歸る段になつたから……唐人も見たがる富士の見えぬ國……と、悪口を書いて立つて來たあとで皆んな怒つたさうだよ。ハ、ハ、ハ、こりやア怒るのが當り前だ。あの時分の乃公も若かつたから、することは亂暴だつたわな」

「イエ、先生にさう仰しやられると、耳が痛うございます。若者の無分別とは私のこと、折角皆さんからお引立を受けながら、師匠に背いて家を飛出し、江戸へ寄り附かなかつたお蔭には、師匠の死に目にも逢ふことが出來ず、弟子の伯山にさへ、面目なくて逢へやアしません。身から出た錆、自業自得といひながら、先生私は恥をかきにも戻つたやうなものでございます」

「何だな源ちゃん、よしねえよ見つともねえ。お前いつの間にか泣き上戸になつたな。景気が悪いぢやアねえか確かりしな。世間の運不運だ仕方がねえやね。間が悪くて弟弟子に、お株を取られたのもその時の成行ぢやアねえか。藝人は藝だ。藝さへ巧けりやア看板なんぞはどうでもいゝんだ。お前ほどの腕を持つてゐれば、天下にこはいものはねえ筈、ア、乃公ア先からお前には目をつけてゐたんだよ。負けねえ氣になつてウンとふん張り伯山でも誰でも皆んな見返してやんねえ」

「先生、ア、よく言つて下さいました。お蔭で私は、力がついて参りました。この勢ひで上方へ歸り、モウ一息頑張ります」

「何をいふんだ。そりやアいけねえ。今更大阪へ歸つてどうするんだ。これでお前がスゴく上方

へ引返して見な。それぢやア戦争は負けぢやアねえか。此處まで乗り込んで置きながら、そんな意久地のねえ奴があるかえ。江戸に居な。江戸の席へ出な。江戸で新規まき直しに出世するんだ」
グイ／＼と酒を煽りながら、東玉は伯海を励ました。

東玉と伯圓 (四)

伯海の源次郎は自分の豫て崇拝する、名人の東玉に斯うまで言はれて見れば、その氣にもなりませんでしたものゝ、
「然し先生、大阪と違つて此江戸では、先生を始め名人上手、大看板の先輩方が、雲の如くに多勢おいでのところへ、私のやうな若輩が歸り新参で出たところで、昔のお馴染には忘れられておませうし、とてもそれは駄目でございます。第一、掛けてくれるお席亭もなからうと思ひます。それ

とも耻を忍び面をかぶつて、空板二つ目からやり直ませうか」

「オイ源ちゃん、氣の弱いことを言つちやアいけねえ、身の程知らずの天狗慢心は大禁物だが、正しい自信は強く持つてゐなくちやアいけねえぜ。お前の腕なら確かなものだ。乃公が太鼓判を押して請人にならうぢやアねえか、さうして申入前でも何でもスケて上げようから、其つもりでドシドシどこへでも賣込み、看板を上げて見なせえ、必ず乃公が尻を押すぜ」

「エエツ、せ、先生、そ、それは本當でございますか」
「本當だともよ、下らねえ駄目を押しなさんな。ウーイ、瘦せても枯れても、桃林亭東玉、憚りながら天下の御記録讀みだぞ、うそや冗談は言はねえから安心しな」
ハツキリと講合つてくれたから、この頼もしい

一言を聞いたときの、伯海の歡喜は如何ばかり、天へも上る心地がいたし、

「アツ、有がたう存じます、先生、こ、この御恩は忘れません」
感きばまつて男泣きに、聲をあげましたのも道理千萬。伯海はこゝに藝名も、桃林亭に做らつて松林亭、伯海を伯圓と改めまして、天下の名人東玉を後楯にたのみ、その儘江戸へふみ止まつて、奮闘することと相成りました。その東玉が口を添へ、

「大層な先生が現はれたぜ。乃公が前をスけるから、騙されると思つて一度打つて見な」
と賣込みますから、席主の方でも安心して應じるやうな次第、初めて松林亭伯圓といふ、看板を上げましたのが、芳町にありました釜金といふ講談席、その頃は講談大盛の時代でありましたから、江戸市中に全部で二百六十軒といふ講釋場

があつたさうで、況んや芳町のやうな繁華な場所一町内に三軒も四軒も同業があつた。釜金のすぐ向ふ側には、松川と云ふ大きな席がありまして、恰度ここに出演して居りましたのが、伊東燕凌といふ大看板、これは七代目市川團十郎が、歌舞伎十八番の「勸進帳」を劇作いたしました時、大體は能樂の安宅から取りましたが、その安宅にもない山伏問答の條は、この燕凌の講談に基き、その儘を取入れたのが、今日に傳はつてゐるのだと申します位、年中乗物で諸家諸大名のお屋敷へ招かれ、上等のお座敷ばかり勤めてゐる先生ゆゑ、従つて見識も高く、寄席へ出ても外の席よりは倍額の木戸を取り、

「伊東燕凌先生御出席……」

などと張出した位、イヤえらい威勢でありますから、煙に巻かれて入場者も多い。その松川の直ぐ向側へ、初お目見得の新人伯圓が出たんですか

ら、それは餘程骨が折れます。

「オイ、伯圓てえのは何だえ」

「あんまり聞かぬえ名だなア」

「見ずてんで飛込んで、ひどいヨ夕物だつた日にヤア恐れるからかう」

と二つ足をふむ客が多い。けれども中には、「いゝちやアねえか。たとへ眞打が食はせ者で拙かつたにせよ、前には名人の東玉がスケてゐるんだ。東玉だけ聞いたつて損はねえ。入つて見よう」

とこれは東玉だけの信用で入るのもあります。

その頃は講談席も、只今のやうに多勢は出ません。精々空板とも五人位のもの、その代り皆長講にタツプリやります。もつとも講談の本當の味は短くでは出ません。いよ／＼中入前に東玉が上ると、「さてお客さん、向ふの松川には、御承知の通り燕凌が出てゐますが、燕凌はいふ迄もなく大家で

す。年中駕籠に乗つて樂屋入り、といつて腰抜けでもなければ中風でもない。まさに二本の足で歩けるのだが、それでアンボツへ乗るのはこれは金があるからだ。但し金持だから藝も巧いとは限らない。藝と金とは別物だよお客さん、然し木戸も高いところを考へると矢張り藝は上手なんだらう。その高い木戸錢の半分が、乗物の代へ廻るんだか何だか、そこまでは東玉も知らない。知らないことは口へ出せないが、知つてる事は請合へますよ。當席の眞打初お目見得の松林亭伯圓、これは若年ではあります、講釋の巧いことは私が保証します。これを魚に譬へるとネ。燕凌は鯛でせうね。本場だか場違ひだか、見ただけでは分らない。伯圓は秋刀魚です。味は巧くとも下魚ですが、但しこの秋刀魚はハシリですよ。權助の惣菜には、チトなりかねる代物さね」と皮肉交りの口上を述べました。

東玉と伯圓 (五)

名人東玉にこの位、折紙をつけられれば聴衆も信用します。非常な期待を持つて眞打の伯圓を聞いて見ると、イヤ成程その巧いこと、年こそ若い者なもので、而も古今の能辯です。もつとも講釋師にしる落語家にしる、辯が悪くつては話術家にはなれませんが、その中にも伯圓は無類の快辯、かの赤穂義士傳の中、寺坂吉右衛門が但馬の出石へ注進に行き大石の妻女や母親子供並に妻女の父親や兄さんなどに向ひ、大石内藏助以下四十有餘名の義黨の面々、吉良上野介の邸へ討入の模様を物語るところなど、

「頃は元祿十五年極月中の十四日、軒の棟木に降つる、雪の明りは味方の松火、同一體の黒装束襟には白き布をつけ、表門には大將として、お頭大石内藏助様を始め、小野寺十内秀和殿、堀部彌

兵衛金丸殿……」

云々と、四十六人の名から扮装その戦器、討入の次第、働きの様子、首尾よく本懐引上げの顛末まで、息もつかせず滔々と美文に読み上げ、満場の聴衆一同を恍惚とさせながら、ポーンと鮮かに張扇を入れて、

「なんぼ吉右衛門でも斯うは喋べれなからう」

と笑はせる具合なんぞは、前代未聞と申すべき程でありましたから、イヤ一同の感心したことを喜んでこと。

「流石に名人東玉が請合つた程あつて、イヤ大したものが出て来やがつた。今に伯圓も東玉同様の日本一になるだらう」

と毎夜の大受け大喝采、忽ちこの評判が八方に聞えまして、釜金の席は満員を續けました。伯圓の喜びは譬ふるにもなく、

「有がたう存じます。これも先生のお蔭」

と禮を申しますのを、

「おれのお蔭といふ事が判つたら、恩に着せる譯ぢやアないが、乃公にスケの給金として、一日一兩拂つてはくれまいか」

と東玉が切出しました。當今の一圓とは違ひます。木戸は精々三十六文が普通の相場といふ時代に一兩の金は今日の五十圓にも匹敵したか知れませんが、第一それだけ持つて行かれては残りがないところか、足りなくなる恐れさへあります。

伯圓も驚いたが、

「いやならよしなよ、スケてやらねえばかりだ。それが口惜しいと思つたら、乃公をスケに頼ますとも、早く自分一人で客の呼べるやうになれッ」

と東玉が申しましたのは、どうやら冗談ではなく眞剣らしい。伯圓も江戸つ子だ。齒を食ひしばつてぢつとこらへ、

「先生、何でいやだなどと申しませう、私の看板

居へ訪ねて参りました東玉が、

「イヤ伯圓さん。恐れ入つたな。モウ今日では乃公がスケなくとも大丈夫になつた、否乃公みたいな年よりは、スケない方が邪魔でなくていい位のもの、モウ来月からどうか乃公を樂にしてはくれまいかな」

「飛んでもない事を仰しやいます」

「イヤさうでないよ。息抜きに私は休ませて貰ひ度い。それをお頼みに来たんだが、いゝだらうね」

「困りましたなア。私の今日ありますは一にも二にも先生のお蔭、その先生の仰しやることを、背くことは出来ませんが……」

「出来ませんなら背かすにいふ事を聞いておくれ。ところでモウ一つのお頼みといふのは、伯圓さん。お前さんも此處らで一つ、身を堅めてはどうかだらう。景氣のいゝのは、表面ばかり、今迄は私が上り高の殆んど全部を引さらつて来たやうな

だけでは、一人の客も呼べない新顔、どうかいつ迄もスケに出て頂き度う存じます、必らず一兩宛は差上げますから……」

と両手をついて頼みました。サアこの約束に基いて、いやでもそれだけは拂はなくてはなりません。伯圓も四苦八苦の苦しみをしたが、

「伯圓を見返す程の位置に漕ぎつける迄は、あらゆる艱難に勝たねばならぬ。何のくそ、これが長期の建設だ」

と頑張りました。この精神ではいやが上にも藝道上達せざるを得ません。果せるかな松林亭伯圓の聲望は隆々として旭の如く、

「伯圓は名人だ。伯圓を聞かなくては、講談の通は並べられねえ」

ワツと江戸つ子の支持を受け、飛ぶ鳥落す人氣とは相成りました。伯圓も自分ながら意外に思ふ位、恰度月末で休みの日にその伯圓の八丁堀の住

ものだから、お前さんの懐ろも、嘆苦しかつたらうとお察しする。それが爲め、無いが意見の總仕舞で、さすがのお前さんも、道樂が出来なかつたらしい。その堅いところを見込んでな、是非女房になり度いといふ女があるんだよ、何と私がお世話をするが、貰つてやつてはくれまいかな」と東玉が、笑ひながら縁談を持出しました。

伯山と伯圓

頭をかいた松林亭伯圓、「私に嬢アを持って仰しやるので……」「さうなんだよ。就ては江戸つ子は氣が早いや。善は急げと實は乃公がな、本人を連れて来て門口へ待たせてある、ちよいとどうか、顔だけでも見てやつておくれ。……オイ、花嫁さんや、ハ、ハ、初心らしく何もはにかむには當らない。サア、構はず此方へ入んなさいよ」

東玉に呼込まれてオツ／＼と、門口から入つて来た若い女、その顔見るより伯圓が、「アツ、お前はお梅……」と驚きますのを、

「オツトツト、マア何にも言ひなさんな。この女は斷つて置くが初縁ぢやアないよ。最初は神田伯海といふ、やくざに惚れて上方くんだりへ、驅落までして夫婦にはなつたが、亭主が道樂者のために、散々苦勞をしたのださうな。いかに意見してもその男が、肯き入れないところから、心を鬼にして愛想盡かしの手紙を突つけ、獨りで江戸へ歸つて来たものの、憎くて別れた仲ではない。どこ迄も自分はある人の女房、どうか夫が改心して眞面目に家業を勵んでくれますやう。腹を立つて他のお内儀さんを持ってばそれ迄のこと、決して恨みとは思はないが、折角人にすぐれた伎倆を持つてゐるのだから、品行を堅く慎しんで、立派な大

先生になつてくれますやうと、その日以来斷ち物までして、今日まで信心を續け、一日も怠らないといふ、亭主思ひの感心な貞女だ。そのお梅が不思議にも私の女房の實の妹と、その時知れたのも盡させぬ縁、どうかこの女の眞心を受けて女房に貰つてはくれまいか」

説明されて伯圓は、初めてお梅の眞情がわかり夢に夢見る心地であります。お梅は言葉もなく泣くばかり。伯圓は頭を下げ、「先生、何から何まで、一方ならぬ御心盡し、ア有がたう存じます。そんなこととも知りませんで、薄情な奴、不實な女と、今の今まで恨んでゐました。お梅、お前にも苦勞をかけて濟まなかつたな」許してくれと手に手を取つて、夫婦は嬉し涙にくれる。打うなづいた東玉が、「ハ、ハ、濟まなかつたと氣がついたら、これか

ら心配をかけぬやう、可愛がつて仕合せにくだらなさい。さアさう目出度く話がきまれば、お仲人は宵の内、お開きとしてこの品はな、お嫁さんからの持參金、結納代りに納めておくれ」差出しました紙包。

「オヤ、先生、この金子は……」「ハ、ハ、お前から貰つた一日一兩の給金が、たまりたまつて一百兩。驅出しの若い眞打に、貧乏させるのは殺生だと、氣のつかねえ乃公ぢやアないが、道樂者のお前に初めから、懐ろを樂にさせると、又それが害をして、折角の覺悟に油斷が起き、途中で挫けちやア何にもならねえ。そこで乃公が給金として根こそぎ取上げ、お梅の爲めに積んで置いたのだ。今あらためてお前へ結納、世帯を持つ足しにしておくれ。ハイ御免よ」サツサと歸つちまつた。呆然として暫くは、後見送つてゐた伯圓が、ワツとばかりに男泣き、金

子の包を頂戴き、感謝感激に五體を震はせて居りましたが、この徹底した親切を、身を以て行つた東玉は、唯に藝ばかりの名人ではなかつたと見えます。松林亭伯圓、お梅とあらためて新家庭を営み、東玉先生の芳情に報いずんば人でないと、ますます伎を研ぎましたから、その評判はいよいよ高くなるばかり、ところが此伯圓の出現によつて恐慌を來しましたのは、神田伯龍のあとをつぎ一門の長となつた神田伯山です。ひどいもので次第に客が落ちて來た。八十人も弟子を抱へて、氣が氣ではありません。伯圓も自分の好敵手ながら氣の毒に思ひまして東玉に、

「今度は伯山が私を恨んでおませうね」と申しましたところ、

「イヤそんな事はあるまい。可哀想にお前のお蔭で、一時は評判も人氣も落ちたが、それも却つて伯山のためには藥だらうよ。あの男には、又盛返

す時が來る」

と申しました。成程名人の豫想に違はず、一時否運に悩んだ伯山、

「能辯第一の伯圓を向ふへ廻し、これへマトモに打つかつては、到底此方に勝味は無い」

と散々工夫をこらした結果、とうとう巧みな對抗策を考へ出しました。それはどんな事をしたかと申しますと、伯圓の能辯に對し伯山の方は、ブツキラ棒にボツリ／＼、だらす事を考へたのでございませう。

「そんな莫迦な奴があるものか。だらしたら聽客は退屈して、尙々評判が悪くならう」

と仰せられませうが、さうでないといふのはこれが苦肉の計略で、最初の中はボツ／＼デレデレ時々は紙片を出して紙糞をこしらへ、それで耳の穴を掘つたりしながら、至極のんびりと口演したから、サア聽客はじれつたがるまいことか欠伸交

りでつまらなく聞いてゐる中に、中頃から段々に調子をととのへて來ます。前がだらしてあるだけに引立つて、

「オヤ／＼大分油が乗つて來たな」

うつら／＼としてゐた聽客も、坐り直して耳を立てるやうな鹽梅、その潮合を見はからつて、次第々々に活氣を加へ、スピードも早めてトン／＼トン／＼疊み込んで來るから聽客は、完全に引ずり込まれて緊張いたし、息をも吐かぬ面白さが、最高潮に達したところで、

「扱このあとがどうなりますか」

と餘情を残してポーンと切る。その讀終りの巧さが又無類だつたところから、自然と翌日を待つ様な事になり、充分に深い印象と感銘を與へましたので、

「ウーム、伯山は巧いなア」

と評判を取るやうになりましたのは、矢張り伯

山も一方の名人だつたに相違ありません。とりわけ大岡政談の天一坊の如きは、伯山得意中の大得意で、

「伯山は天一坊で土藏を建て……」

と川柳にまで詠まれました事は有名であります。伯圓がつく／＼恐れ入つて、

「東玉先生が、伯山はあの儘には亡びぬ。今にきつと盛返すと仰しやつたが、どうしてそんな事まで解つたらう」

と不審に思ふのあまり、質問したところ東玉が「何の、あの男は、師匠伯龍に對して一番忠實だつた。看病もすれば、死水も取り、生前も死後も師匠の面倒をよく見た上、門下を皆引受けて世話をした。骨も折れたらうが、その徳が皆あの男に報つて來たのだ。この徳行に對し、天が何で伯山を不仕合せにするものかし」と申しましたので、伯圓は一言もなく、

「ア、藝人は矢張り藝が巧いばかりぢやアいけ
ないんだ。徳を行つて人物が出来上つてこそ、其
の人の藝術も光りを増すのだなア」
と初めて覺つた申すこと。爾來兩名人が打とけ
て、水魚の交りをいたしたと申す迄もありませ
ん。先づは江戸末期の講談全盛時代に於ける、初
代東玉、同伯山、並に初代伯圓の三大家をめぐ
る名人くらへのお物語でございます。

可樂と良齋 (二)

さて又前へ戻つて可樂のお話、元來その頃は寄
席の看板やピラに、「おとし噺」と書くのが例に
なつて居りましたところ、人といふものは妙なこ
とを氣にするもので、

「どうもおとすといふ言葉が面白くないねえ。話
をおとすトタンにお客も落ちて、入りが少なく
つた日にやア目もあてられない、縁喜が悪いから

字を直さうぢやアないか」

と言ひ出す者もあつた。それは可樂の門人中で
も、有名になりました夢樂であります。成程とい
ふのでそれからは、看板もどうも文字を改め「昔
はなし」とするやうになりましたが、ある時この
看板が、時の公方のお目に止りました。即ち徳川
十一代將軍家齊公であります。不審に思召したも
のと見え、

「昔はなしとは如何なものぢや」

とお尋ねがあつた。そこでお傍の家臣から説明
を申上げると、

「ホ、ウそれは面白さうぢやの、一度その昔はな
しとやらを聞いて見たいものぢや」

仰せ出でがあつたから、そこで當事者へ御沙汰
になり、人選の結果、御前へ召されましたのが、
三笑亭可樂を始めとし、初代圓生、初代正藏の三
人、これがそも、落語を公方様のお聞きに達

した最初であります。まことに名譽のこと、圓生
も正藏も、後に申上げますが皆可樂の門弟であり
まして、可樂が當日の演題は「將棋の殿様」であ
つたと記録にあります。然し考へて見ますと、こ
の將棋の殿様といふ話は、大名氣質を諷刺したお
どけ話で、殿様の我儘が主題になつてゐるのです
から、殿様の元締ともいふべき將軍家がこれを聞
かされては、少々耳も痛く、くすぐつたかつたか
も知れませんが。何にしても當時、公方様をまとも
に見ると目がつぶれると迄、畏敬してゐた將軍か
ら、お召に預つて御前口演をしたとなれば、可樂
ばかりでなく、落語道の光榮でありますゆえ、大
さうな評判になつた事申す迄もなく、これを初め
にその後も屢々お召しになり、三笑亭可樂は日の
出の勢ひ、するとある時この可樂が、日本橋小田
原町の席へ出て居りますと、客席の一隅に、見す
ばらしい服装をした一人の男、他の客の陰へ身體

を隠すやうにして、熱心に可樂の噺を聞いて居り
ます。どう小さくなつてゐても、高座へ上れば、
高いところから見下すのですからぢきに見つか
ります。もつとも高座へ上つて藝をしながら、お客
の顔が分るやうになれば一人前で、初心のうち
はどういたしまして、カーツとなつて何もかも分
らず、どんな人がどの位來てゐたのやら、モヤ／＼
チラチラちつとも見えやアしません、そこは場
馴れと老巧であります。三笑亭可樂が噺をしなが
ら心中に、

(ハテどこかで見たやうな！)

と思つたも道理、此人こそ、十數年も以前に下
總の松戸で、いろ／＼世話になつた山口又五郎で
あることを、すぐに思ひ出しましたから、サアな
つかしくて堪りません。眞打の高座を勤め終つて
喝采の裡に、打出しとなるやすと樂屋から木戸
へ廻り、多勢の客に交つて歸らうとする山口氏へ

「もし、松戸の旦那ではございせんか」
 聲をかけて引止めました。又五郎面目なさうな
 顔をして、

「ヤレ見つかつたかえ。仕様がないな。かねで師
 匠の御盛んなことは、噂に聞いてア、いゝ鹽梅だ
 と喜んでゐたが、恰度今日席の前を通りかゝると
 看板が出てゐた、なつかしさの餘りとうゝ飛込
 み、十年ぶりの久々で師匠の話を書きました
 イヤお世辭ではないがあの頃とは大さうな違ひ、
 身體に自然の貫録が備はつて立派になりなすつた
 上、嘶の巧くなつたこと、ア、眞の名人だたと恐
 れ入りましたよ。然し多勢ある客の中で、よく私
 のゐるのが分つたもの、忘れずにゐてくれた事は
 又五郎嬉しく思ひますよ」

と手をとらんばかり、目には露さへ光つて居り
 ます。可樂も胸が一杯になり、

「飛んでもないこと、何で忘れていゝものでござ

いませう。三笑亭可樂といふ、自分の看板を見る

たびに、ア、これは松戸の旦那に教はつて、山生
 享花樂といふ先の文字を、今のこの字に直したの
 だ、あの時は御厄介になつたなア、自分が今の仕
 合せも、まつたくあの時の御恩だと、忘れたこと
 はございせん。通りがりにお入り下さる位な
 ら、何で樂屋へ訪ねて下さいません」

「イヤ乃公も、訪ねたいのは山々だが、以前と違
 つて又五郎も、いろゝ事情があつて今ではこの
 有様、尾羽打枯らした姿をして、師匠に逢ひたく
 はなかつたからだよ」

「それは旦那、あまり水臭いといふものでござい
 ます。何は兎もあれ、こゝではお話も出来ません
 どうぞ一先づ、私共へおゐり下さいませ」

遠慮する又五郎を、引づるやうにして我家へ伴
 ひ歸り、手厚く往年の恩を謝したといふ美談もあ
 ります。

可樂と良齋 (二)

この心がけなればこそ、三笑亭可樂は立川焉馬
 と相並んで、落語中興の功勞者と仰がれるに至つ
 たのでありませう。而して前に述べた夢樂を始め
 林家正藏、三遊亭圓生、翁家さん馬(勿論いづれ
 も初代)さては百眼の元祖三笑亭可上など、皆可
 樂の門人でありまして、この人々の門下から又幾
 多の大家小家を出して居ります。同じくこの可樂
 の弟子に、良助といふ人がありまして、これは、
 神田松田町の貸本商、梅澤勘平の俸としてありま
 すが、可樂の弟子になつて菅良助と名のり、寄席
 へ出てゐた頃の彼は「今戸の狐」といふ落語の、
 主人公になつて居ります。どうも落語とは申しな
 がら、これは恐らく、事實の話をその儘高座へ出
 したのではなからうかと思はれる程、當時の落語
 家生活を描寫してありますから、先刻御存知の方

々には御容赦を願つて、ざつと荒筋を申しませう
 なら、橋場の裏長屋に住んでゐた良助が、寄席へ
 出ても人氣は出ず、下廻りでは収入も少ないので
 それだけでは食へて行けません。そこで人に勧め
 られ、場所がらだけに例の今戸焼の、狐の彩色と
 いふ手内職を始めた。これが相當の小使錢になる
 然し如何に末輩でも藝人ですから、多少は世間へ
 の見栄もあるもので、他人に見られぬやう、入口の
 雨戸をピタリ閉め切り、家の中でコソコソやつて
 ゐたのを、誰知るまいと思ひきや、表の雨戸はし
 めても臺所の引窓には氣がつかかなかつた。開け放
 しの引窓から、この手内職を覗き込んだのが、向
 ふの家の妻君で、二階の物干へ上つて見下したか
 ら、良助の家の中も一ト目に見えたのです。この
 妻君は元小塚原に勤めをしてゐた上りですが、な
 かゝ世帯持ちのいゝ感心な女で、私にもその内
 職をやらせて下さいと良助に頼みました。見られ

たとあれば仕方がない。それでは世間には内分で
とこのおかみさまも狐の彩色を始めたところ、女
の手先は器用だから、問屋ではこの方が受けはい
ゝ位、良助も敗けまいと、相變らず人目を忍んで
狐の内職を勵んでゐたのは、困ればこそその氣の毒
なこと、同じ落語家でも、師匠の可樂の方はまる
で生活が違ひます。中橋に小綺麗な住居を構へ、
内弟子も三四人ゐます。この弟子たちが、毎夜寄
席の中入で、景物の籤を賣りました。昔の寄席で
は、下廻り連が必らずこの籤賣りをしたもので、
有名な寺門靜軒の著した江戸繁昌記にも、當時の
寄席の有様を記した項に、

「此時を名づけて中入と曰ふ。技人即ち物を懸け
て鬮を賣る。鬮數百本、初め數枚を連ねて値十數
錢、葉に照して貨を獻す」云々。

とある位ですが、客も鬮に當つたとて、そんな
景物なんぞ欲しがりやアしません。お前にやるよ

「何だ汝は、師匠を出せえ」

「マア貴方さう野暮に大きい聲を出すもんぢやア
ございせんよ。お靜かに願ひます」

「何も話せよ分りやア事を荒立てやうとはいはね
え、お前のところで毎晩く、きつねか何か出來
るんだらう」

と突込んだのは、このきつねといふのも勝負事
の一種なのださうで、それを弟子の方は巧く逃げ
て、

「それは飛んだお門違ひ、嘶家の家で狐の出來ま
すのは、私共ではございせん。橋場の良助の家
でございせん。世間へは内緒にして居りますが、
良助の家へ行けば、いつでも出來てゐない事はあ
りません」

「本當か、そいつは有がてえ、いゝ事を教へてく
れたな。さうとは知らねえから、騒がして濟まな
かつた。それぢやアこれから、その家へ行つて見

てな事をいふ。これが皆前座連の利得になつたも
ので、つまりホマチであります。それを内弟子た
ちが、寄席をはねて歸つてから、師匠の家の二階
で分配するのですが、夜更けにチャラ／＼と錢勘
定、四隣に響くその音を聞いて、ニヤリと凄く笑
つたのが、この土地のゴロツキで、てつきり内會
と見當をつけ、翌朝因縁をつけに行きました。つ
まり、

「お前のところでは、世間へ内しよで、御禁制の
勝負事をしてゐるだらう。さういふ事をするなら
するやうに、此邊を繩張の乃公たちへ、ワタリを
つけて貰ひ度え」

といふ強請に行つた譯であります。物堅い可樂
は、以ての外と立腹しましたが、氣の利いた弟子
が代つて挨拶に出まして、ビヨコビヨコお辭儀で
額を叩き、
「エツへ、、、、代り合ひまして……」

やう」

とゴロツキは教はつた通り、良助の家へ來て見
ると、表の雨戸がピタリ閉まつてゐます。世間へ
は内緒といひ、晝間からの戸締り……、いよ／＼
やつてゐるに相違ない。メめた／＼と奴さん喜ぶ
まいことか。

「オイ、ちよいとあけてくんな。乃公ア心配の者
ぢやアねえ。中橋の可樂のところから聞いて來た
んだ」

小聲で訪れると良助が、
「へエ／＼、これはどうも、只今／＼」

と塗りかけの狐や繪の具を、急いで傍らの押入
れへ隠し、やうやくの事で雨戸をあける、これか
ら滑稽な問答が始まります。

可樂と良齋 (三)

ヌツと土間へ入つたゴロツキが、四邊を見廻し

ましたが何しろ九尺二間の裏長屋、鼻がつかえさうな狭い家です。怪訝な顔をしながら聲を潜めて「實は中橋の師匠の家で聞いて来たのだが、お前の家できつねが出来るさうぢやねえか」

「エツ、誰がそんな事を申しました。あれ程口止めをして置いたのに、如何にお喋舌が家業の落語家とは云ひながら、秘密のことを迂か／＼話されては困つちまふなア。さう何もかも御承知なら、今更隠し立てをしたつて仕様がありません。包まずに申上げますが、實は出来ますのでございます」

「エツ、本當かえ」
「へエ、面目もございませませんが、噺家だけでは食へませんから……」

「ウム／＼さうだらうとも、無理はねえ／＼」
「然し親方、どうか世間へは御内聞に」
「いゝてえ事よ、心配しなさんな。そんな野暮な事はしねえ。さうかえ、マア本當でよかつた。こ

こ迄やつて来た甲斐があるといふもの、それで何かえ、今日も出来てるかえ」

「へエ／＼、出来て居りますよ」

と此問答、一つ間違つたのがどこまでも間違つて行き、ゴロツキの方では、勝負事のきつねと思ひ込んでゐますが、良助のいふのは今戸焼の狐なのです。さうとは知らないから、

「今日も出来るとは有がてえ、それで何かえ。顔は揃つてるかえ」

と尋ねるのを、

「こりやアどうも恐れ入りました。貴方はなかなか急所をお聞きになりますね。初手の中は、この顔がなか／＼揃はないものでして、それには私も困りましたが、習ふよりは馴れるとやら、お蔭様で此頃は、大分顔が揃ふやうになりました、金箔でも銀箔でも、何でもやれる程になりました」

「エ、ツ、金張りに銀張り、どうもこれは驚いた

な。そんなのが出来るのか、どうだらう良助さん濟まないが一把でも二把でもいゝから、心配して貰へまいか」

といつたのは、カスリを欲しいといふ請求なので、一把二把とは鳥日の事ですが、良助の方は勘違ひをし、

「折角ですが一把だの二把だのと、そんな半端ではお断り申します。せめて一百とか二百とか、まとまつて居りませんか、お受合ひは出来ません」

と答へたのは、無論狐の彩色の注文と思つての返事だつたのですが、ゴロちゃんの方は目を丸くし、

「ギエツ、一百だの二百だのと、そんなに吹かけてもいゝのかえ。何だか話がうま過ぎて氣味が悪いな。然し、見かけたところ狭い家だが、全體どこに出来てゐるんだえ」

と不審がるのを、

「へエ何出来てますのは、この戸棚の中です」

「ア、押入の中に、忍びの梯子段でもあつて、隣の二階へでも行けやうてのか」

「何の、そんな事は、ございません」

「マア何でもいゝや、ちよいと乃公に見せてくんねえか、壊しやアしねえから」

「當り前ですよ、毀されてたまるものですか。唯今出してごらんに入れます」

と押入をあけ、へエこれだと出したのが、即ち今戸焼、今ぬりかけのお狐さまです。相手は二度びつくり、

「ヤイ／＼莫迦にするな。何でえこりやア乃公がきつねといつたのは、こんな焼物の玩具ぢやアねえ。乃公の言ふのはコツの糞だ」

「ア、こつのさいなら、お向ふのおかみさんでございませす」

これがこの「今戸の狐」といふ落語のサゲにな

つて居ります。このサゲは甚だ手際もよろしからず、少々こぢりつけでも廻りますが、それまでの運びは、滑稽も上乘なもので、その上前にも申しました通り、その頃の落語家の生活を、充分に描寫してあるところ、文献的價値のある落語だと思ひます。蓋し、良助自身が、自分の體驗へ、多少の脚色を加へまして、この話にまとめたのであらうと思はれますのは、この良助といふ人が、多分に創作の才を持合せて居りましたからで、而も、そんな才分はありながら、文を綴つてものを書く事と、人にそれを話して聞かせる事とは、又、別の技巧が備はるものと見え、良助は結局、落語家としては成功しませんでした。そこで天保の末年に剃髮して軍書讀に宗旨を變へ、名もそれらしく改めましたのが、即ち乾坤坊良齋であります。然し講釋師になつても不辯の爲め、高座はあまり振ひませんでした。前述の如く創作の才があつた

ので、盛んに世話講談の種をこしらえ、自分も演れば他人にも供給し、これが今日迄傳へられてゐる物も少なくありません。全くこの人は、臺本作家としての功勞者でありました。而して良齋は萬延元年八月十三日九十二歳の高齡を保つて歿し、淺草阿部川町天台宗延命院へ葬り、法號は乾坤坊良齋更勝居士と申します。尙、初代可樂は良齋よりすつと前に天保四年三月八日五十八歳を以て歿し、今戸慶運寺々中潮江院へ葬り、法號は三笑亭安譽可樂居士、「人ごみをのがれて見ればはなし塚」これがその辭世でありました。

南鶴と南窓

講談の勃興につれ、講釋師も多勢出て來ました中に、神田邊羅坊壽觀(カンダベラボウスカシ)といふ、大さう長い名前の先生が現れまして、その門流が二派に分れ、甲は上二字を取つて神田と

名乗り、乙は次の二字目と三字目とを姓として田邊と稱した。これが神田派と田邊派の起りであつて、神田派の始祖は前述の伯龍、田邊派の祖人は南鶴である。と斯ういふ言ひ傳へになつて居りますが、残念千萬にもこの邊羅坊壽觀といふ人の事も、初代南鶴の事も幕府御家人田宮某(一説には小高某とあり)とのみで、判然として居りません。よく分つて居りますのは二代目の南鶴からで諸説を綜合しますと、二代目田邊南鶴は、尾州藩の浪人で服部を姓とし、思ふ所あつて軍談師になりましたが、以前が武士ではあり、天下の御記録讀といふところから腰差を一腰さして居りましたところ、ある晩麴町の俣亭をはねて、神田の我家へ歸らうと、淋しいが近道だから半藏門を入り左に折れ、代官町を通つてお物見下まで参りますと二人の折助が向ふから参りまして、深夜ではあり他に人通りもないので悪心を起し、南鶴を捕へて

剽盜をしやうとした。神免流心得の南鶴少しも騒がず、叱り飛ばしたが二人とも、何を言やがる。それやつちまへと飛かゝつて來た。南鶴忽ち兩名の、利腕とつて逆にねぢ上げ、突放して置いて脇差の柄に手がかゝるが早いか、抜く手も見せず電光石火、右と左へ水もたまらず斬つて棄てました脇差の血を拭つて鞘に納めた南鶴が、すぐとその足でお月番の北町奉行所へ訴へて出た。この時の奉行は有名な遠山左衛門尉であつたと傳へられて居りますが、南鶴は顛末を陳述した上、

「元來半藏門をぬけて代官町から竹橋へかゝるこの道は、雉子橋へ出るにせよ、乃至一つ橋、神田橋、常盤橋、いづれを通つて町へ参るにも一番の近道でござります。それを淋しくして置く爲めに斯様な間違も起ります。私だからよろしいが、普通の町人でありませうなら、金品を奪はれました上、次第によらば一命にも及ぶ事と存ぜられま

す。適當の場所へ、見張りの番所をお設け下さりませうならば、向後諸人の助けに相成り、一同の仕合と存じます。此段何卒お願申上度いし」と申添へました。いふ事に筋が立つて而も辯舌滔々として居ります。もつとも辯が悪くては講釋は出来ない。奉行もこれを聞取つて實に尤もの次第とあつて、南鶴は只今で申す正當防衛で無罪放免、二人の悪者は斬られ損といふ事になり、それのみならず南鶴はおほめのお言葉頂き、上首尾で歸りましたが、これから間もなくお物見下の咽喉首ともいふべきところへ、見張りの番所が出来ましたのは、全く南鶴の陳述によるところといふので、人呼んで、これを南鶴番所と申しました。これは有名な事實であります。その二代目南鶴の門人から、素晴らしい先生が出た、これが初代の南窓であります。この人は安房國平郡南無谷の名主、柴山權左衛門の伴で次郎三郎といひ、南鶴の

門人になつて號を正流齋と稱し、古事軍談何事も明るくいといふ自信のあるところから、南の窓は明るいものだからとて、扱こそ南窓とは名のつたのであります。一説に南窓は南鶴の兄で、例の太平記場で始終快辯を揮つてゐたと申しますが、兄といふのは何かの間違ひであります。又、親孝行で官から賞美せられた正流齋南玉は、この南窓の弟だといふ説もあります。さうかと思ふと、南鶴は始め南窓の門人であつたが、南窓が母の病氣で郷里へ歸り、全快を見届けて又出府する迄、何ヶ月かの長い間、代講を務めて客を落さず、却つて入りをふやしたのみか、その間師匠南窓の讀かけを辯じ、而も引事の餘談のみで、少しも先へ進めずつなぎ通した、その力量に驚いて、南窓が反對に南鶴へ師事するやうになり、これを田邊派の祖人に仰いだ。といふことも、講談師仲間と言傳へられて居ります。矢張りこれも誤傳でありませ

う。この南窓の記憶力の強かつた事は非常なもので、ある時日本橋佃吉の葬式に帳附をたのまれ、四五人の書記に交つて受附ましたが、南窓は一人も帳面へつけず、四百人程の町名氏名を暗記して人を驚かせた事があつたと申します。萬事この傳で、どんな本でも一度讀むと忘れる事がなかつた爲め、高座でも臺本を持たず、田邊派は無本といふ流派になつたのださうで、その讀み方にも改良を加へ、興味をつけ、いつも、

「眞の講釋師は天下廣しといへども乃公一人、あとの講釋師は豆藏みたいたいのだか、マアその中で少し物の分つてゐるのは、東玉ぐらゐなものだらうし」と大言を吐いてゐたといふ事、その讀物は義士傳を最も得意とし、現今行はれてゐる銘々傳は、大てい南窓の稿本によりまゝするところから、門人南玉が泉岳寺の義士の墓側へ其旨を記して建碑し

たのが、今以て残つて居ります。この初代南窓は弘化三年四月十五日七十五歳を以て歿し、郷里房州南無谷なる成就山妙福寺に葬りました。

宗叔と古喜

大工の和助棟梁が立川焉馬になり、櫛屋の又さんが三笑亭可樂、その外いろ／＼な家業から、落語へ轉向した好事家のある中に、お醫者様も交つて居りました。その一人に石井宗叔といふ人があります。この人は中橋に住んだお醫者さんですが、戲號を水魚魯石といひ、狂歌や狂句も巧く、能辯で頓才に富んでゐましたから、落語を自作して披講いたしました。それも今までのやうに、短かい小噺ではありません。一席にまとまつた長い話をこしらえて、此人が初めてやり始めた、即ち長話の元祖であります。恰度もうその頃は、短かいのであきたらず、次第に長い物を好むやうになつて

来た時代でありますから、宗叔の得意とした長談は寛政の初年から大に行はれ、又、座敷仕方咄をも趣向してこれ亦評判よく、常に招かれては方々の屋敷方へ出入し、一流の祖と仰がるゝに至つたのであります。この宗叔は享和三年四月八日歿、深川雲光院に葬りましたが、二代目の石井宗叔も矢張りお醫者様の出で、通牛舎文馬と號し、後に初代の弟子となり、その歿後、二代目を相續しましたが、この人は又、長い話を一層長くして、さてこのおあととは明晩といふ例を造りました。即ち續き話、人情話の元祖であります。かうなると自然そのお話の材料を提供する者が入用になつて来ました。前に述べた乾坤坊良齋などはその有力な一人でありましたが、その外、落語の興隆につれこれを實演しない者でも、争つて落語を作るやうになり、山東京傳、式亭三馬、十返舎一九など、皆落語を作りました。その位だから、長い話も作

つたに極つてゐます。中にも長話の作者と知られた人に、有名な振鷲亭が居ります。この人は天明から寛政に亘つての戯作者で、猪狩貞居といふのが本名、通稱を與兵衛と申し、初めは濱町に住み後に本船町の家主になりました。「ろくろ首（小西屋政談の原本）」「自惚鏡」「客州一の鳥居」「玉の蟬」「春夏秋冬」「陰陽妹背山」「俊徳丸復讐」「猫股屋敷」等の外、数十部の著述があり、畫も鳥居清長に學んで、別號を金龍山人といひ、多藝多能の作家でありました。いつの代に於ても、一つの藝術が盛んになると、それを扶ける人材が、かやうに現れるものと思はれます。さうかと思ふと、この趣味の爲めに、家産を傾ける人なんぞもあつた。紫檀樓古木の如きがそれでありました。この人は藤島といふ苗字もあり、淺草の藏前通りに伊勢屋といふ、羅宇竹の間屋を營んでゐましたが風流人で狂歌が巧く、紫檀樓古木とはその方の戯

號であります。家業を奉公人任せにして、そんな事にはかりうき身をやつし、落語が流行つて來ると自分も立川金馬の門人になつて寄席へ出ました。立川金馬といふのは本所松井町の人で通稱が日吉善藏矢張り焉馬の門人で、後に二代目むらくになりしました。その金馬の弟子分となり、同じく紫檀樓古木の名で出演、狂歌咄といふ看板を出し落語の題を求めて即席に作り、そのサゲへ狂歌を即吟でつけやうといふ趣向、それだけの才がなくては出來ない藝ですから、大に受けさうなものが、當時の寄席のお客様にはちと趣味が高尙すぎて、よく分らなかつたのかも知れません。一向に評判になりません。とうとう落語を止めて剃髪し號も古喜と改めました。モウその頃には藏前の店も巧く行かないで遂に潰れ、人手に渡して通息する始末、天保三年十月八日六十六で歿し、深川龜住町玄信寺に葬り、紫檀樓迎譽淨雲居士と申し

ます。「六道の辻駕に身はのりの道、念佛申して極樂へ行く」といふのが其辭世でありましたが、この人が風流の爲め家産を傾け、晩年を落魄した末路は、一篇の落語となつて今も高座にくり返されて居ります。何しろ以前が羅宇問屋でありましたから、身を落して管かえ屋になり、羅宇屋きせえると呼び歩く身となりましたが、好きな風流は貧苦の中にも忘れません。ある時夕立にあつて、「双六の日本橋から雨にあひ、ぬける程ふる轄町の角」と詠んだりしました。又ある寒い夕方、呼止められたのは醫師の家で、その妻君が煙管のすげ替を命じたのですが、古喜のヨボくした薄汚ない姿を見ると、御新造は眉をよせて、なぜあんな汚ならしいお爺さんと呼んだのだえと下女を咎めましたのを、耳にした古喜が怒りもせず矢立の筆を端紙へ走らせ「牛若の御子孫なるか御新造の我をむさしと咎め給ふは」と詠みましたところ、

此妻君も同好の趣味があり「辨慶と見しはひが目かすげ替の才槌もあり鋸もあり」と返歌をよみました。古喜もその即詠に感じ、又返しましたのが「辨慶にあらねど腕の萬力は、きせるの首をぬくばかりなり、紫檀樓」これを見た御新造びつくりし、さては豫て噂に聞く、古喜宗匠の成れの果かと氣の毒がつて羽織を興へやうとしますと、古喜は首をふつて辭退をしながら「イエ／＼それは頂かずとも、これこの通り、はおりやきてえる（らをやませえる）」といふサゲ、趣のふかい上品な落語であります。

湯島の燕晋

文化四年二月のこと、北町奉行小田切土佐守へ對し、寺社地寄場稼業總代として、山本仁太夫、車善七の兩名より、本郷湯島の伊東燕晋を相手取り、お訴へに及びました。その理由はと申します

と、伊東燕晋は講談伊東派の祖人で、湯島天神境内の自宅をば寄席にいたし、多數の聽客を集めましたので、それまで寺社地寄場稼業のものは、仁太夫善七等の支配に屬すべき慣例になつて居りました故、燕晋も自宅とはいへ、湯島天神の寺社地境内で寄場を營む以上、その仲間へ入るべきものだといふ訴訟であります。ところが伊東燕晋は、頗る謹嚴な人物で、學問があり文筆に秀で、著した書物もあり、一家の風ある見識を備へておましたから、以ての外とこれに従ひません。答書を出して抗辯に及んだ。これが爲め前後七回も、双方を奉行所へ呼出して突合せ吟味を行ひましたが、結局仁太夫方の申條立たず、七月二十七日一件落着、燕晋に對して、以後は寄場稼業を公然許可する事となり、仁太夫善七等の支配下に屬すべき運命を免れましたのは、強い自信を以て頑張り通した結果であります。その時に燕晋から奉行へ願

ひ出でましたには、

「軍書講談を演述する我々は、下賤の者でありませうとも、申述ぶるところは、恐れながら三河後風土記の内、上様御苦勞を遊ばされ、天下泰平の基をお開きになります事がらにござりますれば、一般聽衆と同席にて、これを講じますのは、憚り多き次第と存じまするにつき、一段と高座を設け、その上にて申述べたう存じます」

といふ趣意を以て、高さ三尺一間四面の高座の圖面を添へて願ひ出で、これ亦聞き届けになりました。これが爲めそれ迄は、講釋の寄席も作りつきの高座は無く、置間といふものを用ひ、休みの内は隅へ片付けて置いて、使ふ時だけ隨意の場所へ引張り出して來るといふ風、中には涼み臺で代用するものもありましたが、この時から高座常設を許された次第、即ち高座の始めであります。もつとも當時は、年番與力藤田六郎右衛門の注意で

「高座といふは耳立つ故、見臺とのみ稱ふべし」といふ達しであつたさうで、何れにせよ、講談の資格を落さなかつた點、伊東燕晋は講談界に取つて忘れてならぬ功勞者と申すべく、この仲間で湯島の燕晋と稱へるのはこの人のことでもあります。講釋も諸家の騷動や世話物などは讀まず、徳川御代記、後風土記、曾我物語、川中島軍記、源平盛衰記、及び三國誌の外は講じなかつたと申します。そしてどんな時でも、羽織袴を着用し、講釋を讀み終ると、席を下つて慇懃に挨拶をするといふ風、至つて謹嚴な態度だから、聽客も行儀を崩せません。皆な靜座して謹聽をした。マア本來はそれが當り前でせうが、講釋場も終ひには段々物がぞろつべいになつて、長々と寝ころびながら聽く客の爲めに、木枕の用意までいたし、鼾聲があるよと注意したりする始末、いゝ心持にくつすり眠らせるやうでなくては、講釋師も一人前とは

と、伊東燕晋は講談伊東派の祖人で、湯島天神境内の自宅をば寄席にいたし、多數の聽客を集めましたので、それまで寺社地寄場稼業のものは、仁太夫善七等の支配に屬すべき慣例になつて居りました故、燕晋も自宅とはいへ、湯島天神の寺社地境内で寄場を營む以上、その仲間へ入るべきものだといふ訴訟であります。ところが伊東燕晋は、頗る謹嚴な人物で、學問があり文筆に秀で、著した書物もあり、一家の風ある見識を備へておましたから、以ての外とこれに従ひません。答書を出して抗辯に及んだ。これが爲め前後七回も、双方を奉行所へ呼出して突合せ吟味を行ひましたが、結局仁太夫方の申條立たず、七月二十七日一件落着、燕晋に對して、以後は寄場稼業を公然許可する事となり、仁太夫善七等の支配下に屬すべき運命を免れましたのは、強い自信を以て頑張り通した結果であります。その時に燕晋から奉行へ願

いはれない。なんて事になりましたのは、イヤ早
言語道断であります。この燕晋が、文化三年と五
年の兩度に亘つて、將軍徳川家齊公の御前で講演
をつとめました。これは公方様墨田川御成の節、
弘福寺の御膳所に於て講演したのですが、これが
御縁になつて、後には御本丸へ上るやうになつた
家齊將軍講談も落語もお好きだつたと見えます。
この時同道いたしましたのが、門人の伊東燕凌と
いつて、これ亦當時の大家であります。この時に
燕晋は、味方ヶ原の軍記を讀まうとしたところ、
將軍家からお傍の者へ御沙汰があつて、どうかそ
れはやめて貰ひ度いといふことになつた。何故か
と申すに、

「味方ヶ原の戦争は、いふ迄もなく東照神君徳川
家康公が中心、どうも大切な御先祖の記録を讀む
ことになる、それを伺ふには、將軍家始め本格
の装束をつけなければならぬ。まことに窮屈だ
り」と。

○二代目燕凌 初代燕凌の門人にて凌雨といひ、生家

が貧しかりし爲め、青年の頃は日傭取など労働せ
しも、講釋師になりて以來、人物風采の立派なる
ことと、讀口に品位ありし爲め、聽客自然に尊敬
し己れも十徳など着して威嚴を作り、諸侯方へ出
入、収入も多く、堂々たる大家となり、出行に必
ず駕籠を用ひ、講釋場の木戸へ「燕凌先生御出席」
と記すなど、權式を添ふるに努め、木戸も普通よ
り高く取り、從つて生活も豪華に、本妻の外、三
人も外妾あり、本宅など二十人ぐらしなりしとあ
り、妾の一人萬女といへるは、以前堀家の祐筆な
りし由にて、算筆國學和歌に長じ、燕凌の讀物を
も、助力創作せりといふ。而して天保十一年、七
代目圓十郎が、歌舞伎十八番の「勸進帳」を完成
するに當り、本元とせる諸曲の安宅にもなき、富
經と辨慶との山伏回答を講談によつて補ふべく、
燕凌、南窓等、當時の大家を招ぎ、口演を聞きた
るが、就中燕凌の齣切れよき口調に感じ、舞臺へ
上演に附しても、問答の條は、燕凌其儘を眞似た
りとぞ。燕凌は安政二年七月五十五を以て歿し、

から、見合せて貰ひ度い」といふ譯だつたさうで、上つ方になると萬事嚴

格なものであります。それではといふので、燕晋
と燕凌が、兩人交替で「川中島」を讀みました。
これが悉くお氣に入りまして、爾來兩名が月一回
づゝ御本丸へ上る事になりましたのは光榮のこと
この燕凌は文政十二年三月、燕晋は天保十一年十
月十日、行年八十を以て歿し、本所猿江慈眼寺に
葬りましたが、この燕晋が一間三尺御免の高座に
上り、多勢の聽客を集めて講演をして居る圖があ
つて、三代目伯山の許に秘藏してあつたを見た事
があります。

○笹井燕尉 湯島の燕晋の親族にて、通稱彌左衛門、
同じく謹厚の人物にて、三河後風土記、徳川御代
記等を講じ、燕晋よりも前に、寛政三年十一月十
九日、家齊將軍の松川筋へ御成の節、同じ向島弘
福寺に於て、味方ヶ原軍記を言上せしが、この燕
尉は人品よく上手の開えをとり諸侯方へ出入せ

深川淨心寺地中圓珠院に葬りしが、會葬者七百名
に餘り、頗る盛儀なりしと傳ふ。

むらく、正藏

焉馬の中興した落語藝術を、可樂が立派に職業
化しまして、續々その道の大家が現れました事は
前にも述べた通りであります。右に就て幸田露伴
博士は、

「可樂は近時笑話者流の祖となれるもの、その門
に、朝寝坊夢樂、喜久亭壽樂、三遊亭圓生、都屋
都樂、三笑亭可上、および林屋正藏等あり。皆そ
の技を以て鳴れり。夢樂は長物語人情話を興し、
圓生は芝居掛り鳴物入の話を創め、其の系にかの
圓朝を出し、都樂は寫し繪を以て世を悦ばしめ、
可上は百まなこを以て人を笑はしめたり。而して
正藏は、戲謔俳諧の談に交ふるに、幽鬼冤魂の話
を以てし、所謂怪談の祖となりたり。(中略)そ

れ徳川氏の世、笑話を以て開ゆるもの、前に安樂庵あり、五郎兵衛あり、後に雲鼓、振露亭、慈悲成、焉馬ありと雖も、其の話の機鋒銳利にして、解頤の妙あるものは、實に安永天明の間に當つて世に出でしところの、片々たる小冊載するところのものに屬し、正藏等皆却て之に及ぶ能はず。然れども、今の笑話者流の口演するところの談、牛ほめ、粗忽家、女人かづら、しの字嫌、芝居好等俗衆のこれを聽きて、開口拍手して大笑するものは、實に多く正藏著はすところの書に出で、文政天保より傳へて今に猶混びざるなり、よつて思ふ正藏の作るころの笑話、其の眞價未だ必らずしも高からずと雖も、邦人の嗜好に投ずる甚だ深きものあるにあらずんば、永存することは是の如くなる能はざるを(下)略云々。

と正藏の「笑話五種」に題されて居りますのを見ましても、可樂の大きな存在だつたことが分り

ますが、この文中に擧げられた人々の中、夢樂即ち假名で書くむらくは、俗稱里見新兵衛と申し、麻布一口坂に生れ、幼名を勝藏といひ、麴町の伊勢屋といふ、質屋の丁稚になりましたが、淨瑠璃が好きで、豊竹宮戸太夫の門に入り、戸志太夫と稱したりしてゐる中、享和三年可樂の門へ入り、流俗亭玖蝶から、又三笑亭夢樂と改め、自作の落語を披講致しましたところ、この人は人情に通ひ風俗をうつすのに妙を得ておましたので大に行はれましたが、文化六年、夢樂を改めて夢羅久にしました。これが師匠の可樂にとつて、面白くない感じを抱く事になつた次第、さうでせう。可樂の弟子で夢樂、師弟の縁はこの樂といふ一字によつて表現されてゐるのに、その樂の字を外字にして、藝名から追放しちまふといふのは、乃公の弟子になつてゐるのが不服不意なんだらう。そんなに氣に入らない師匠なら、どこへでも行つてくれ。

といふ申つ腹だつたのではないかと思はれます。そんな事で甚だ氣まづくなり、そこで三笑亭も返上して、朝寝坊と改めた次第、夢といふ文字には成程朝寝といふ言葉が相應してゐませう。この藝名は何代も續いて今日に至つて居りますが、どうも昨今のやうな時局下になりますと、如何にのんきな落語家にせよ、たとへ藝名だけでも、朝寝坊はあまりにも不眞面目の謗りを免れません。それは扱おきむらくは其年の六月、柳橋大のし富八樓上に於て、初めて落語の會を開き、極めて盛會だつたとあり、其後文化九年三月、あらためて焉馬の門人となり、笑語樓夢羅久と改め、この時から、長物語人情話を興隆させたといふ次第、又、林屋正藏もこの幸田博士の序にある如く、今に至るもその作話が、落語家の踏襲してゐるところとなり、藝名も累代綿々として今日に及んでゐるところ、又一方の看板であります。林屋といふ號

(後世に至り林家となる)は、初代が本所林町に住んで居りましたからで、文化三年より樂我と名乗つて可樂の前座を勤め、のち可龍、笑三、正三等と改名更に正藏になつたのであります。一時林町から村松町へ引越し、又長谷川町へ轉宅したところ、家主が、
「お前さんは何御商賣だね」
「へ、へ、へ、私は寄席へ出ます」
「ホウ、寄席へ出て何をしなさる」
「落咄で、へ、へ、へ、林家正藏といふもの、どうぞ御ひみきに……」
「ホ、ウ、それは不思議だ。この家はその昔、鹿野武左衛門の住んだ家ですよ」
「エツ、そりやア奇遇ですなア」
大に感じた正藏が、その縁によつて一時二代目鹿野武左衛門と改名、その披露をした事もあり、別に俳名を林屋林泉と申し、怪談斬一派の祖とな

り、傍ら戯作の筆をとりましたが、天保十三年六月五日、六十三を以て歿し、寺は可樂と同じ今戸の潮江院でありました。而して有名な「こんにやく問答」は三代目正藏の作で、この人は以前「善」といふ禪宗の坊さんだつたといふ事、それなればこそ、あの奇抜な禪問答の趣向も考へられたのでありませう。尙支那の笑府から題材を得、回向の功德を滑稽の中に拵へやうとした名作の「野晒」も、この三世正藏の作であると申します。

○喜久亭壽樂 俗稱を龜屋屋次郎といひ、神田佐久間町に住し、可樂の門に入つて壽石と稱し、後、壽樂と改名、兩國橋西詰に定席を構へ、他所を勤めざりしと。

○三笑亭都樂 小石川傳通院前に住し、以前は上繪師なりしが、龜屋龜徳と號し、同好者と、落嘶や茶番狂言をなす中、亭和元年春、上野山下にオランダエキマン鏡の興行をなすものあり、龜徳は其技術師高橋玄養を訪ねて業を習ひしが、天性の器用は忽ち術を會得し、元來が上繪師ゆゑ、歸宅の後

三遊亭圓生

さて可樂の門人に、東亭鬼丸といふ人がありました。初めの名を三笑亭八ツ子といひましたが、この鬼丸は落語の名人であつたといふ事が、式亭三馬の「落語會話」にも出て居ります。そして鬼丸の門人に多子といふものがあり、この人は馬喰町附木店に住み、俳名を圓里といひましたが、その後、可樂の直門に轉じて、東生亭世樂と改め、其後自立して、山遊亭猿松と名乗りました。どうも山に遊ぶ猿松とは面白い名のやうでゐながら、字面があまり感心いたしません、自分でもそれに氣がついたと見え、寛政九年四月、同音ではあるが文字を改め、即ち、三遊亭圓生となりました。この人は芝居咄一流の名人で、身振こわ色芝居がかり鳴物入りの元祖であります。近頃でこそ、芝居嘶は珍らしくなりましたが、明治時代迄は、大

自ら其畫を描きて試みしところ、思ひの儘に出來たるより、尙、種々工夫を加へ、彩色法も發明、精巧なるものに仕上げし上、自ら口上をつけ、唄、囃子等を加へ、怪談物等を、面白く見せしより、見物は驚嘆して不思議がり、中には魔法使かと迄評判するものありしが、斯くて諸方に招かれ、大に利を得たるより遂に三笑亭の門に入りて都樂と名乗り、亭和三年三月、初めて半込神樂坂の寄席春日井へ出演、それより諸所の寄席を打廻り、都住、都龍、都山等數多の門人も出來、ますく流し、文政年中瀬戸物町へ移轉し、傍ら座禪豆を嚮ぎ、弘化四年隱居して龜屋徳右衛門と改め、嘉永五年十二月二十七日、七十三を以て歿し、淺草法恩寺々中光照院へ葬る。本邦幻燈寫眞の元祖なり。

○夢羅久の落語會 文化六年六月柳橋大のし富八樓に於て開催、この時の摺物蟹狩の繪は、勝川春英、歌川豊國、蹄齋北馬、拙亭翠、泉目吉の五大家が合作、京傳、京山、六樹園、三馬、焉馬等の詩歌文章をのせ、豪華のものなりしと。

ていどこかの席で、芝居正本嘶といふ看板を見かけたものであります。何しろ、歌舞伎芝居といふものは、江戸人にとつて最大の娯樂だつたのですから、その舞臺を偲ばせる芝居嘶のやり方が、大衆の好みに投じたのも當然でありまして、素話より手数のかゝる代りには、面白がられ喜ばれたに相違ありません。而も最初は、通例のやうに、普通の高座で、話をしてゐる中に、その話の進行に従つて、キツカケもろとも後幕を、切つて落せば灯入などの背景、もしくは黒幕に鏡臺といつたやうな、芝居好きをゾク／＼させるやうな、芝居舞臺の縮刷版が高座の後ろへ現はれて、本行の鳴物が入り、演者は俳優の聲色で、芝居がりの臺詞を述べ、受け渡しやら、立廻りの身振をすゑとこれへツケが入つたり、そつくり芝居と同じになる。唯違つてゐるのは、演者が一人で多勢を兼ねるといふだけの事で、念入りに引ぬいて、衣裳ま

で見せる仕草もあり、結局終りは落語のサゲになる事もあり、先づ今頃はこれぎり、流手やかに打出すのですから、女子供が見ても面白がる譯であります。思へばうまいことを考へたもので、圓生がこれを始めて以来、引つゞいてこれに倣ふものが、近世まであとを絶たなかつたのも道理であります。この圓生は、斯様に芝居話を創案したばかりでなく、もつと文獻的に、後世を利した仕事をして居ります。それは「東都噺者師弟系圖」を編纂したことで、これには當時、中興以來の隆昌につれ、無數に輩出した夥しい落語家の全部を、悉く丹念に調査して、のこらず藝名を書並べ、師匠と弟子の關係や系統を、一目瞭然と配列した、實に貴重な圖表なのであります。ものがものだけにこの圖表は、可なり長い巻物でしたが、好事家はこれを表装して額に仕立て、現に本郷の若竹亭といふ、東京でも屈指の大きな寄席に、掲げられ

てありましたが、震災で烏有に歸しましたので、あとはまだどこかにあれと同じものが残つて居りませうや否や、何とも惜しい事をいたしました。但しこの圖表を元にして、その後の分を書き添へたものを、六代目文治の實弟、桂文之助といふ人が、綿密に筆書してこれが現に、落語研究會の主干たる、今村信雄氏の手許に保存され、又、これ等の記録へ、大阪落語家のそれを併せたものが、これは活字本となつて、「落語系圖」と題し、昭和四年七月二十五日、大阪市東區廣小路町三十九月亭春松氏事、植村秀一郎氏の手から、發行されて居りますことは、御案内の方もあらうと存じます。ところで今申した初代圓生著の、「東都噺者師弟系圖」とは前に述べた初代林屋正藏が、洒落た文句で序文を書いて居ります。曰く、

「師匠の恩は、爺が芝がる山より高く、教ふる道は、姥が物洗ふ川より深し。流れ寄る桃の天

々たる若き頃より魁見する冬至梅の、葉なしの道に入りしも寛政のむかし〜にて、物語りする人に生れし故、圓生とは名號しが、今は古狸の骨頂となりて、芝居がりの幕あきに、カチカチ山をその儘うつし、御宿はどこじやの雀にはチョツ〜の拍子幕を氣取り、此處はこの○(オモイイレ)で△(ゴザ)りますると門人へ傳へる度に、友達の師弟の道を失はん事を歎じて、三遊亭大きにお世話の系圖を引き、三絃取て彈唄ひ、ど〜どいつは誰の弟子、彼は是と書つゞりし、反古を其儘櫻木に、彫みて春の配りもの、其のはしがきをと頼まれました、林屋正藏、おどけまじりに絶るになん〜云々。

即ち桃太郎、かち〜山、舌切雀など、日本昔噺を取入れた面白い口上であります。關根先生の「講談落語今昔譚」には、この噺者系圖に現れた師弟關係、又、代々の系圖を殆んど全部抄録し

てあります。本編にもそれを寫すべきであります。が、紙數も考へ、又煩雜を慮り、重要な部分だけに止め、それよりも主要人物の傳記や逸話に力を注ぎました次第、悪しからず御了承を願ひます。而してこの初代圓生は、三遊派の祖人でありまして、門下から圓橋、圓馬、圓喬、しん生、龍生、馬生、圓藏等を始め、多數の上手を出し天保九年三月二十一日、七十一で歿し、淺草金龍寺に葬りましたが、二代目圓生になつた圓藏の門人圓太郎こそ、實に近世の巨匠、三遊亭圓朝の父でありました。

講談三名譽

古い事は簡單に……といふつもりではありませんが、あれもこれもと慾張りますため、つい江戸期のお話が長くなりましたが、今しばらく御辛抱を願ひます。その頃、講釋界で、三名譽と稱せら

れましたのが、伊東燕凌、松林亭伯圓、及び石川一夢の三大家でありました。この燕凌は二代目で伯圓は初代、共に前項名人くらべの中で、御紹介に及びましたが、一夢は又大さうな名人、ある時京橋大根河岸の都川といふ庵で、二代目馬琴が讀切を催しましたが、當時講談界の大家が悉く集まつた中で、最後に残り残りましたのが、この三名譽の中の、一夢と、伯圓、及び初代正流齋南玉の三人「サア誰が眞打をしてくれるね」

「眞打は助けてくれ」

「そんな横着はいかんよ。誰彼といふより一つ、くち引きで上り順をきめやうぢやアないか」

「それがよからう」

とくちを拵へ、引きましたところ、一番先きが伯圓、次が一夢、最後の眞打は南玉がつとめる事になりました。この南玉は、前の南鶴と南窓の項でも申しました通り、初代南窓の弟ともいひ、又

二代目南窓の門人とも傳へますが、京橋尾張町の

いろは長屋に住み、非常な親孝行で、その事が公儀へ聞へ、御褒美を頂きました。これが世上の評判になりました、南玉といふ銘を打つた清酒まで賣出された位、ます／＼高名になりましたのは、無二膏や萬能膏のきより、親孝行は何につけても……まことに孝は百行の基であります。この南玉は後に南玉齋と改め、六十何歳かで歿しましたが、常に法體をして人品もよく、公儀のお坊主といつたやうな風采で、伊達や、太平記が得意の讀物であつたさうで、この時の讀切にも、

「それでは三人とも、親子の別れを讀み分けやうぢやアないか」

「それもよからう」

となりまして、この事を聴衆にもふれましたから、一同手を打つて大喜び、樂屋に居合せた他の出演者も、これは聴き物といづれも耳をすませ、

満場水を打つたやうであります。その中に先づ、最初に出ました伯圓が、眞田三代記の内、佐野の天明山を讀みました。これは石田三成が家康を、向ふへ廻して兵を擧げ、いよ／＼關ヶ原に於て天下分け目の戦ひになる。それに先立ち眞田昌幸は我子信幸、幸村の兩名と、三つ鼎になつて去就の相談、信幸は東軍に従はんとし、幸村はあくまでも故太閤の恩義を思ひ、西軍に味方を主張いたします。結局父昌幸は、幸村と共に西軍へ赴く事となり、信幸は東へ還るといふ、父子兄弟骨肉の別れ、これが永久の訣別になるやも知れぬ武門の習ひ、規模も大きければ意味も深刻な六かしい讀み場であります。なれども讀み手は名譽の伯圓、大喝采の中に一席を終りますと、次に上つた一夢が佐倉義民傳の内、木内宗吾の親子の別れ、これはモウ一夢の佐倉か、佐倉の一夢かと云はれた程、極めつき、折紙つき、得意中の得意であります。

而も宗吾の子別れは、誰がやつても泣かせるところ況んやこれを天下一品の一夢がやつたのですから、さながら實景を目前に見る如く、涙を絞らぬものとはない位、これ亦割るゝ如き拍手を浴びて降壇します。最後に上つたのが南玉齋で、これは楠公父子櫻井驛の訣別でありました。即ち同じ親子別れでも、眞田、宗吾、楠公と、矢張り時代世話、時代と配合の順を考へたあたり、そんなところにも當事者の用意が窺はれますが、忠臣は孝子の門に出づとかや、親孝行で表彰された程の南玉が至誠盡忠の楠公傳を讀みますのは、まことに適材適所と申すべく、風采のいゝ南玉齋が、柄にもはまつた讀物ではあり、建武の昔正成が、青葉の里の櫻井に、小楠公正行に對し、肌守りを形見に與へ、後事を託して生別の心の中を思ひては空に血を吐くほとゝぎす、泣かすには居られませぬ。まして太平記が十八番の南玉齋、至誠切々と

して真に迫りまして、聴衆一同悲涙にくれ、すゝり泣きの聲さへ聞へる始末、以上三席立続けに泣かされて皆な胸が一杯になり、斷腸の思ひをいたしました。これを當日の打止めとして散會した時には、一同ホツと溜息をもらし、拍手喝采暫くは、鳴りも止まぬ程であつたと申します。いづれも一齊に、ア、面白かつた。結構だつたと感歎しながら、ぞろ／＼歸つて行つたその後で、席主の松五郎がオイ／＼と泣いて居る。樂屋の者が不思議がつて、

「松さんモウ講釋は済んだのに、いつまで泣いてゐるんだ」

と聞いたところ、

「ナニニさうぢやアねえ、三先生があんまりお客を泣かしちやつたものだから、これ見ねえ、座布團も疊も、涙でビショ／＼にぬれちやつた。これぢやア早速、あとの家業に差つかえるよ」

井北梅。(以上)の連名を列記しありき。

○高名五幅對 嘉永三年版の一枚摺には、軍談の部に南玉、伯山、潮花、北梅、伯圓の五名を擧げ、記録の部に、南鷺、一口、燕凌、馬琴、貞山の五人を列ねありき。

○軍談一本槍 安政五年夏出版の番附にて幕の内のみを抄記すれば、

東の方。大關——大阪軍記(鑄井北梅)關脇——佐倉義民傳(伊東燕凌)小結——義士銘々傳(正流齋南玉)前頭——伊達評定(伊東花清)四國仇討(伊東陵潮)白木屋(石川一口)八犬傳(翠集舎千山)川中島(松林齋琴鶴)楠三代記(一立齋文車)切られ與三郎(正流齋太麟)

西の方。大關——天一坊(神田伯山)關脇——會我物語(伊東潮花)小結——源平盛衰記(伊東燕國)前頭——伊賀水月(一龍齋貞山)田宮坊太郎(東林亭東玉)越後傳吉(旭堂南麟)太閤記(伊東燕勢)天草軍記(森川馬谷)佐野源左衛門(東月齋琴窓)黒田騒動(竹林舎麥山)

といつた。マサカさうでもありませんが、この讀切の一件は、前に述べた東玉の文覺荒行水でんかんのことや、一夢の佐倉のお百姓さん一件とともに、二幅對とも申すべき、有名な逸事として同業者間に言傳へられてゐるのでありますが、一夢のお百姓さん一件とはどんな事か。これは又もや講談的の脚色を加へまして、次の項に申述べます。

○軍談師高名一本槍 天保度のもと思しき番附にてこれには、神田伯山、伊藤潮花、石川一口、伊東花清、竹林舎麥山、田邊南龍、梅龍軒貞林、松林齋琴鶴、伊東燕凌、東月齋琴窓、松林亭伯圓、松林亭太琉、醒醉舎吾岳、成川鐵山、豊田錦江、人情亭錦城、一陽軒如水、一圓齋誠翁、梅林舎南鷺、一龍齋貞山、正流齋南玉、桃林亭東玉、東集齋琴調、神田伯龍、旭堂南麟、伊東凌舎、東林亭東園、東林亭太玉、東流齋馬琴、伊東燕勢、伊東凌海、伊東凌節、一貫齋天山、一立齋文車、正流齋玉洲、鑄井芹洲、東魁齋琴梅、伊東陵潮、伊東燕國、鑄

龍)三國誌(梅林舎南鷺)世話人として如水、誠翁、差添として凌舎、鐵山、勸進元には、神佛穴さがし(石川齋萬丸)の名を掲げありき。

石川一夢 (一)

此度は初代石川一夢といふ、講談の名人のお噂を一席申上げます。この一夢といふ先生は、安政元年五月二十一日。

「持つて來た勘定だけの年たちて、うはばで遊ぶ夢の世の中」

「夢一つ、破れて蝶の行衛かな」

と以上二首の辭世を残し、五十一歳で亡くなりました。悟りの開けた人物だつたことがこの辭世によつて窺はれますが、初代伯圓や伊東燕凌と共に、當時の三名人と稱せられ、講釋の方では端物といふ、即ち世話講談が巧く、とりわけて「佐倉義民傳」と來た日には、古今獨歩得意中の得意で

ありましたから、

「一夢がどこそで義民傳を讀んであるぜ」

となると、如何なる時でも必ず入りがあつたと申します。所謂極めつき折紙つき、その人に限られた至藝だつたと思はれます。その頃ほひ、東兩國の北詰に、講談を専門の寄席がありましてこれは橋番の五郎兵衛といふ人が、經營してゐたところから、人呼んで五郎兵衛の席と申しました。その講釋場へ石川一夢がかゝりまして、得意の「義民傳」を讀んでゐると、面白いので毎日大入り、その中に、そろ／＼この續き物も終りに近づき、いよ／＼宗吾一族が茨木臺でお處刑といふ條にかかりました。満場の聴衆、水を打つたやうになつて聽いてゐると、一夢は釋臺を叩いて調子に乗り、「その時數萬の見物人、矢來の外にて押あひ、へしあひ……」

云々と辯じました。ところが多勢の聴衆の中に、

佐倉在から出て來たお百姓が、四五人連れで聞いて居りまして、思はず苦い顔をいたしました。然し多勢の中だから、一夢は心づきませぬ。その儘に講演を續け、

「さてこのお後は明日の後座に申し上げませう」といつもの通り、喝采の裡にその日は終演となりましたが、かの四五人連れは出ても行かずに後へ残つて居りまして、一夢が丁寧に一禮し高座を下りようとするとその傍へ近づいて参り、

「先生ちよつくら待つて下せえ」
「ハイ、何か御用で……」

「ハア、私共は下總の者で、今度江戸へ出て参り馬喰町に宿を取つて居りますが、先生の宗吾様の御講釋を伺つて、如何にも感服致しましたので、毎日聞きに参つて居ります」

「それは／＼、御最良まことに有がたい事でございます」

「就きましては、どうも餘計な差出口でござえますが、先生聞いて下せませうか」

「ハア、何なりとも伺ひませう」

「イヤ外でもありません。今更私共が申上ぐる迄もねえ事ですが、宗吾様は佐倉領二百二十九ヶ村、何萬何千人の總名代になつて、御自分ばかりか妻子眷族の命を投出し、一同の苦しみを救つて下すつた大恩人でござえます。その神様とも佛様とも思ふ大恩人の宗吾様御一族が見るも酷たらしいお處刑におなりなるところを、誰がのん氣らしく見物なんぞ出來ますべえかね。心ある者ならば、皆な我家へ引こもつて表をしめお題目を唱へたり、お念佛を申したりして御一族の御冥福をお祈り申してゐたに違ひねえと思ひます。とてもその場へ参つてお處刑を見るなんて事は、人情として出來ますめえ」

「ウーム、成程……」

「それを矢來の外に數萬の見物、押合ひへし合ひと申されましたは、先生にも似合はねえ事ではござえますめえか。然しそこは講釋のことで、文の形容といふ迄ならば、せめてそれを見物人と言はずに、宗吾様へお名残りの別れを惜まうとお見送りの人々ともお直しになつてはどんなものでござうなア」

言はれました時に石川一夢、

「イヤこれはどうも恐れ入りました。大きに心づきませんで汗顔の至りでございます。仰せ一々御道理の次第、ようこそ御注意下さいました。以來はお教へ通りに直して辯ずる事といたしませう」
恭しく禮を述べました上、兎も角もその一行を、柳橋の萬八といふ有名な料亭へ案内いたし、一夢が御馳走をいたしました。

「こんな事をして貰つては濟みません」とお百姓たちは恐縮しましたが、國へ歸つてこ

の事を、名主様や五人組に話したので、
「偉え先生があるものだ。さういふ人には是非佐倉へ来て、宗吾様の講釋を聽かせて貰ひ度えものだのう」

といふ事になりました。そこで今度は五人組の衆が附添つて江戸へ出府、あらためて一夢の宅を訪ね、先頃の禮を述べた上、佐倉への來演を頼みましたので、一夢も快よく承諾いたし、日取を定めて佐倉へ乗込み、二百二十九ヶ村の人々へ、毎日組を分けては講演をいたしました。有がたい宗吾様のお話でありますから、一同感涙を流して謹聽、木戸錢は一切無料としたのですが志の包み金も大層な額に上り、一夢はその半分を佐倉の宗吾靈堂へ奉納、いゝ心持になつて江戸へ歸りましたが、各村の有志から贈られましたピラばかりでも馬の背に積み切れない程あつたと申すこと、但しこれは後のお話であります、この佐倉のお百

姓達を柳橋の萬八へ、招待しましたその晩のこと
一夢は客人を送り出して、自分も銘酩した儘、醉顔を兩國の川風に吹かれながら、本所二葉町の我家へ歸らうと、横網の川つぶちを、ブラブラ参りましたのが、當今の時間で夜の十時頃ほひ、モウ人通りも絶へて淋しうございます。今一夢が御藏橋を渡り、長々と續いた筋堀へ沿つて、夜道を段々参りまする四五間先きに、暗中ながら佇んでゐる人影が見えました。而もそれは二人らしい。どうやら若い男と女のやうだから、そこは苦勞人の石川一夢、
「ハ、ア、密會か、夜鷹か、それにはお誂へ向きの場所だらう」
心中に苦笑ひをいたし、邪魔をするのも野暮だらうと、堀際へ身體を寄せるやうにいたし、足音を忍ばせて通り抜けようとしたその途端、男も女も今まで泣いてゐたらしい涙聲で、

「サア、いつ迄くり返しても同じこと、所詮生きては添はれぬ身の上、お前も覺悟をしておくれ」
「覺悟は疾うにして居ます。未來は必ず夫婦ですよ」

「念を押される迄もない、それではお濱」
「南無阿彌陀佛……」

唱名もろとも身を躍らせ、石垣の上から大川へあはや兩手をつないで飛込まうといたしました。申す迄もなく情死であります。イヤ驚いた石川一夢一時に酔もさめてしまひ、最う斯うなつては粹なんぞを利かせてゐる場合でない。それと見るより履物をぬぎすて、足袋跣足の儘でそれへ飛出し今一瞬の差で河岸を離れようとする男女の、帶際を兩手で確かと掴んでから、

「莫迦野郎……」

と精一杯の聲を出しました。これが一夢の物馴れたところで、さすがに始終高座から、斯ういふ

場合の講釋を演つてゐるだけに、心得が違ひます若しこんな時にアワを食つて、遠くから聲でもかけた日には、却つて先方を早く飛込ませてしまひます。水へ入つてからでは助けにくい、飛込まな中抱き止めるのが第一だが、それには聲をかけてはいけません。いきなり引捕へておいて、それから警告の聲をかけるべきものださうで、これも生ぬるい、同情的の言葉をかけては駄目だと申します。次第によれば横つ面の一つも引ばたき先方がムツとして反感を起すやうな激しい大喝を浴びせて脅がすに限るさうで、何しろ貴重な命を我から棄てて縮めようといふ程、精神に異状を來してゐる時なのですから、普通のことでは氣がつかせません。ひどく脅かされるので初めて反省もし、所謂つきかかつた死神も離れるといふ道理でありませう。アナヤと身をもがく男女を、力に任せてズル／＼ズル、往來の眞中迄引戻した一夢が、

左右へ引据ゑてホツと一息、

「何てえ真似をするんだ不量見な。大切に使へば一生保つ壽命を、粗末にするとは何たる罰當りださまア見やがれ」

と又叱つた。こんな文句は年中高座で賣物にしてゐるんだから、骨も折らずにスラ／＼と出ますその聲音に心づいて顔を上げた若い男が、

「アツ、貴方は石川一夢先生、ア、ツ、面目ないツ……」

といふとバタ／＼バタ、逃げ出さうとするのを又引止めました。

「何だ。どこの人かと思つたら、お前は五岳さんの伴、芳次郎さんではないか」

と一夢も意外に思ひましたのは、同じ講釋師で笹川五岳、この人が又、至つての藝達者で、太閤記全部を無本で演じたといふ程記憶が強く、一晩中までも打通しに立讀をして、疲れを見せなかつた

見える。ア、いやだ／＼。一夢なんぞがどうなるものか、もしも彼奴に看板が上げられるやうになつたら、乃公ア豆腐の角へ頭を打つけて死んで見せらア」

とまで憎まれ口をきいて居りましたが、案に相違して一夢はすん／＼昇進、たうとう今日の位置を占めるに至りましたに反し、五岳の方は相變らず中座讀み、眞打の資格までに達してゐませんか、今度は地位が反對になりました。と言つたところで約束通り、豆腐の角へ頭を打つける事も出来ず、面白くないので笹川五岳、江戸を見限つて大阪へ行つちまつた。この芳次郎といふ若者はその五岳の伴で、これは江戸へ残つて仲町の、古着屋へ奉公をして居りましたが、一夢は以前の仲間

の伴だからよく知つて居ります。それ故大いに驚きまして、

と申す位、その代り根性もひねくれて居りましてまだ一夢が修行中の小僧時代、五岳の方がぐつと先輩だつたから、

「廢しねえ／＼。お前のやうな不器用な辯口で講釋師なんぞにならうてえのが量見ちげえだ。やめちまへ／＼」

高座の横から顔を出して大聲に叱りつけ、多勢の聴衆のゐる前で、赤面させた事が何遍あるか分りません。その度毎に一夢の無念さは如何ばかり然し對手は先輩だから言葉返す事は出来ない。散々苛められるのをちつと堪へ通しました。

石川一夢 (二)

然るところ、その辛抱が、報ひられて一夢は次第に上達、聴衆にも認められるやうになつて來たが、五岳はこれが不快でたまらず、

「チエツ、今の客には藝を聞き分ける耳が無えと

るんだ。モウ一足乃公が遅からうものなら、可憐い／＼若いものを、二人玉なしにするところだつた。知らない人でも見のがしに出来ないこと況してや知合の仲だ、いづれよく／＼の仔細もあるに定つてゐるが、往來で話も聞かれないから一先づ乃公の宅まで一緒に來なさいよ。サア、姐さんも泣いてゐないで、芳さんと一緒に私の宅へおいで決して悪いやうにはしないから」

と一夢が、懇に男女を宥めました。斯うなれば幾分か興奮も落つきますから、モウ男女とも水へ飛込まうといふ心持はありません。極り悪さうに首をうなだれ惰々として一夢のあとへついて参りませ。漸くに二葉町の、我家へ歸りました一夢が奥の一間へ男女へ通しまして、

「芳さんや、一體どうすれば死なずに濟むのだえ」
結論を先きに聞きましたのは、この邊が矢張り苦勞人でありませう。芳次郎はモチ／＼いたしま

して、

「先生、譯をお話しなくては分りませんが、御承知の通り私は、親父が上方へ参りました後も當地へ残り、淺草仲町の富田屋さんといふ、古着屋へ奉公をして居ります」

「ウム、それは知つてゐるよ」

「富田屋さんは店も大きく、私の外に番頭さんも手代小僧も多勢居りますが、その同じ富田屋さんの奥へ、仲働きに來てゐましたのが、こゝにゐるお濱……さんといふ人で……」

「ア、この姐さんは、お濱さんといふのか」

「左様でございます。至つて内氣なおとなしい女で、私はこのお濱さんが、初めて奉公に來た時、から、何となく心を惹かれてゐたのでございますが、それが縁といふものか、思へば思はるゝで後になつて話し合つて見ますと、お濱さんも矢つ張り最初から、私が好きだつたと申しました」

「オイ芳さん。ふさげちやアいけないよ。身を投げようといふ所を助けられて來た者が、よる夜中おのるけは驚いたな」

「イエこれは本當の話なので、氣があれば目も口程に物を言ひとやら、お互に慕はしく思つて居ります中、私が風邪を引いて熱が上り、ドツと寢込んだ事がありました。その時にお濱ちゃんも夜も寢ないで附切りの看病、一晚中頭を冷たい水で、冷し通してくれました。外の朋輩は白河夜舟、アお濱どん濟まない、嘸ねむからうに飛んだお世話になりましたと言つたら、アラいゝんですよ朋輩は相見互です。とりわけてお前さんの看病をするなら、私は睡くも何ともありません。私はいつそ嬉しい位ですと……」

「オイ、いゝ加減にしないかえ」

「その一心が通じて翌る朝までには、熱もぐつと下れば風邪もケロ〜と治つちまひました。ア

なく、ついお店のお金を使ひ込んぢまつたのが、たまりたまつて、とう〜百兩……」

「えッ、それは又えらい穴をあけたものだな」

とこれには一夢も呆れました。頭をかいいた芳次郎が、

「ア有がたい、私はお蔭で助かつた、お濱どん。この親切は忘れないよと禮を申しましたら、何ですぞねえ他人行儀な、私こそ忘れませんわと私の手をギューツと握つて……」

「仕様がねえなア、呆れた男だ」

「とう〜そんな譯で、何が何して、何だもんですから、二人はどんな事があらうとも決して別れまい離れまい。末は必ず夫婦にならうねと、堅い約束をしたのですけれども、お濱さんは不仕合せな身の上で、幼さい時に両親に死別れ、他人の手で育てられたんですが、その養ひ親が強慾の怠け者で、のべつにお店へ來てはお濱さんを出し、小遣錢を貸せと強請るんです。水商賣ちやアあるまいし、堅氣の家へ奉公してゐる仲働きが、何でそんなに一々貢げる力がありませう、その度毎に私が見るに見兼ねて一兩二兩用立て上げましたが、私だつて奉公人の身で、そんなお金の有らう筈も

「イエそれといふのも一番しまひに、お濱ちゃん親父といふ人に掛合はれ、どうにも手元が苦しから、お濱にお店から暇を取らせ、勤め奉公に出し度いと思ふが、それも可哀想だと思つたら、まとまつて五十兩貸して貰ひ度いとせがまれて、苦し紛れにその金を融通したので、前方からの分と合せ百兩金といふ大きな使込みになつちまつたのでございます。その中に何とか穴埋めをしようものと、今まではどうやら胡魔化してゐたのですが、もういけません。明日になればお店で總勘定の棚卸しをしますので、今まで隠してゐた使ひ込みも、一遍に現れてしまひます。私はお暇になる

だけでは済みますまい。次第によれば突出されてお仕置も受けなくてはならず。そんな事になりましては、お濱さんと添ふ望みも絶え、この世に樂しみはありません。なまじ生き恥をさらさうより御主人様への申譯に、死なうと覺悟をきめましてお濱ちゃんにもその事を話しましたところ、お濱ちゃんがこれは皆私から起つたこと、私ゆゑにお前さんを、一人殺すことは出来ませぬ。互ひに不運だつた今の世の中にお去らばをして未來とやらで、楽しく一緒になりませうと、心中の相談がまとまつたのでございます。そこを人もあらうに先生に見つけられ、こんな愧かしいことはございせん」

と芳次郎が打しをれれば、お濱は袂を美しい顔に押當て、潜々と泣くばかりであります、幾度も打うなづいた石川一夢が、

「ア、さうか分つた、大方そんなことだらう

「フーム、そりやア又何故だね」

「先生、私は何もかも、皆父親から聞いて居ります、外の者なら兎も角も、私は先生の御修行時代から意地の悪い事をし通して、先生に辛く當つた笹川五岳の倅でございます。親父が上方へ迷つて行つたのも、先生へ濟まないと思ふきまりの悪さから、江戸に居た、まれなくなつた爲めでございます。謂はゞ先生には敵の倅が、先生に助けられましたは、あ、あんまり悪うございます」

唇をかんで芳次郎、今更自分の身に報うて來た親の因果を、慚愧後悔して居ります様子。元より一夢としても芳次郎の顔を見た時から、その親の五岳に對する不快な感情を、思ひ出さずに居られよう筈もなかつたのであります、今芳次郎に斯う言はれました時に、ハツと胸中の弱點をつかれた心地がいたし暫らくはちつと考へて居りました、

と思つたが、さりとて如何に若い者とはいへ、突きつめて無分別な考へを起したものだ。死んで行く途前たちは、好いた同志が手を取り合ひ、三途の川に死出の山も、仲むつまじく越えて行き一つ蓮に托生の、未來は夫婦とそれでよからうが主人の迷惑、親たちの歎き、世間のことを考へないのか。百兩や二百兩のはした金で命を捨てようとは何といふ淺はかだえ。と云つてその百兩が無ければ、死にでもせずば引込みもつくまいが、よし、仕方がない、乃公が今夜この場へ通り合せたのも因縁だらうし、殊に知合の仲であつて見ればこれも掛り合だ、何とか始末をつけてやらうからあまり心配をしなさんな」

慰めました時に芳次郎が、

「先生、その思召は有がたう存じますが、どうも私として先生へ、この御面倒を背負はせましては、どうにも心が濟みません」

「芳次郎さん。それなればこそ私は尙のこと、お前さんに盡して上げなくてはならない。成程私はお前さんのお父さんに、辛抱の出来ぬ程、ずゐ分ひどい目にも遭はされて、血の涙を流した事もあつたが、それを世間で知つてゐるだけに、お前さんの不仕合せを、ア、いゝ氣味だ、さまを見ろと私が見殺しにする事が出来ないんだよ。君子振つたことをいふやうだが、仇を報ゆるに恩を以てせよとやら、又考へて見れば、私が五岳さんに苛められ、今に見ろつと奮發したればこそ、どうやら今の境涯になれたのだから五岳さんは却つて私の恩人とも云へよう。その恩人の倅さんへ、今こそ一夢の恩返し、どうか心配しず、に受けておくれ」と申しましたのはさすがに人の頭に立つて、第一流と云はれる人物の考へ、また違つたものであります。芳次郎は益々痛み入つて頭も上りません然しもう夜も更けた事だからと一夢は若い男女を

一間へ寝かせ、夜あけを待つて出向いて來ましたのは、相生町の伊勢屋萬右衛門といふ、これは一夢を最辰にする大きな質屋の主人さんで、平生心やすくして居りますから、一夢はこれへ参りまして、

「伊勢屋の旦那、早朝から突然に、無理なお願ひをいたすやうでございしますが、若い男に若い女、人間二人の命の助かること、どうかこの私に百兩御用立下さいませぬか」

と事情を話して頼み込みました。

石川一夢 (三)

委細を聞いた萬右衛門が、

「成程なア、二百二十九ヶ村、何萬何千人を助けるため、一身一家一族を投出したといふ、天下の義民宗吾様の傳を、讀物にしなされるだけあつて、先生の義心つくづく感服しました。外ならぬお前

産だから私は知らないが、先生は形のない品物で何千兩何萬兩といふ價值のあるものを持つてゐな

さるではないか」

「エ、形のない品物で何千兩……」

「さうですよ、お前さんが高座で賣物の講釋は、先生でなくてはといふ折紙つきのものばかり、これが皆何千兩の品物ぢやアないか、とりわけて佐倉義民傳は天下一品、どうですえ、あの讀物を私が質物として預からうではありませんか」

「へえー、講釋を質に取るのですか」

「どうだえ、前代未聞で、面白いちやア無いか、いづれあの講釋にも、種本とか臺本とかが有るのだらう、それを抵當にして、百兩御用立いたしま

すよ」

言はれてホツとした一夢が心づいて見ると、昨夜から心配のあまり、まだ衣類も解かず横にもならないので、佐倉の種本は昨日の儘、まだ懐ろへ

さんのこと、如何にも御用立しませうが、平生の懇意は懇意、最辰は最辰でこれは別物だ。私も何分何厘といふ、細かい十呂盤をはじく質屋が渡世であつて見れば、何にも抵當なしで、兎に角百兩といふ大枚を、お貸し申すことはどうかと思ふ。そこが即ち商賣冥利だ、先生どうだらう何か抵當を預けては下さらんか」

言はれて一夢が當惑いたしましたして、

「旦那、出来ない相談を仰しやられては困りますねえ、タカの知れた講釋師、家中の家財道具を有つたけ昇いで來たつて、とても百兩の抵當には足りません、そりやア到底駄目でございます」

と申しますと萬右衛門が、

「先生、何を言ひなさる。私は何も、先生に朝夕の不自由をさせて、夜具布團や鍋釜を預からうといふのではありませんよ。形の有る品物では、百兩に足りるか足りないか、そんな事は他人様の財

入つて居りました。そこでこの臺本を伊勢屋へ預ける事になり、引替に百兩借受けましたが、正しく伊勢屋の主人の申した通り前代未聞、講釋といふ無形のもの、質に置いたといふのは、後にも先にもこの一夢ばかりであります。それもどんな本かと申せば、半紙一帖、つまり唯た二十枚を二つ折りにして綴じたもので、上下の表紙を除きますと、中味は只の十八枚、それへ講釋の要所々々を記入してあります。所謂點取の種本ですから、他人が見たのでは、何が書いてあるのやら要領は分りません。表紙には「宗吾神靈美談」傍へ「石川一夢」としてあるばかり、これで大枚百兩借りたんですから大へんなもの。その頃の百兩は、當今の千圓以上かも知れません。一夢が伊勢萬の知遇を感謝して、歸らうとすると萬右衛門が、

「ところで先生、お断り申すまでもないが、これを抵當として預かつてゐる間は先生も佐倉義民傳

は讀みなさるまいね」

念を押されましたから、

「勿論でございます。私も不肖ながら石川一夢、決してそのやうな不徳はいたしませんから、御安心を願ひます」

堅く誓ひまして二葉町へ歸る。芳次郎お濱はどうなる事かと、青くなつて心配して居ります所へ、一夢が戻つて参りまして、

「サア二人とも、金は出来たから安心しな、萬事は私が話をつけてやる」

と申しまして、これから一夢が仲町の富田屋へ参つて主人に逢ひ、一伍一什を話して芳次郎の取なしをいたしました。使ひ込みの百兩を辨償した上、あらためて一夢が身元を引受けての詫び言ですからこれは圓滿に解決します。そこで、

「又もや間違ひが出来るといけないから」といふので、これを機會に芳次郎とお濱を夫婦

にして、二階借りながら世帯を持たせ、芳次郎は

富田屋の店へ通ひ番頭、忠實に店務を勵む事とな

り思ひ合つた男女が晴れて添はれましたのも一夢

のお蔭と、これは天へも上る喜びだつたに違ひあ

りません。一夢もまことにいゝ心持、ところがそ

の後始末に氣をとられ、迂つかりしてゐた一夢が

いつもの通り、五郎兵衛の席の高座へ上つてから

ヒヨイと氣がつかましたのは、

(サア大變、モウ今日からは昨日の續きと演る事

が出来ない。佐倉は質に入れちまつた、これは困

つた)

と思つたが仕方がない。據らなく、

「エ、伺ひ續きの佐倉義民傳、これよりは佛光寺

光然の逆の祈りから、怪異のお話に相成りますが

怪談と申せば同じこの下總の木下川にありました

のが、有名な累のお話、元來この累と申します婦

人は……」

と頂きますが、毎々の御引立まことに有がたい

仕合せに存じます、就きましては前後二席の中、

前段は時鳥伊達の聞書、後段はぐつと趣を替へ、

天明白浪傳を長講に……」

と言ひかけると定連が納まりません。

「先生々々ちよつと待つておくれ」

「ハア、何でございます」

「何でございますちやアねえよ。前席は何でも構

はねえが、後席は佐倉にして貰ひてえな。久し振

りで先生が此席へかゝつたんだもの、せめて一席

は先生の十八番、天下一品といふ佐倉を聞き度え

ちやアねえか、これは定連一同が楽しみにしてゐ

たんだ。是非とも佐倉義民傳をやつて下さいよ」

一人が發言すると八方から、

「さうだ、宗吾様をたのむ」

「義民傳々々」

「佐倉々々」

と巧みに脇道へ入つて、祐天上人累解脱の物語に轉向してしまつた。ひどい事になればなるものだが、これが又一夢の得意とするところゆゑ、聴衆も喜んでゐる中に、恰度月末になつて五郎兵衛の席も千秋樂となりました。

石川一夢 (四)

然るところその翌月は、一夢の持席が日本橋四日市の翁亭といふ、これは翁稻荷と申すお稻荷様の傍にありました講釋場で、場所柄でありますから、魚河岸の連中が皆この席の定連になつて居りました。大看板の石川一夢が、久々で此席へ出るといふので、初日から一杯の入りであります。二人三人の前講が濟んでいよいよ眞打の一夢が出演、待ち構へてゐた一同が一度に拍手を以て迎へました。一夢は慇懃に禮をいたし、

「扱本日より久々にて、御當席へお目通りをさせ

「エエ成田線は乗替へ」

「省線と間違へちやアいけねえ」

ワイ／＼といふ騒ぎになり、口々に義民傳を所望いたしました。サア石川一夢が困つたの困らないの、高座の上で眞つ赤になつちまひ、脇の下から冷汗を流しながら、

「エ、どうも、折角でございますが、仔細あつて義民傳は、唯今は讀む譯に参りません。まことに恐れ入りますが、どうぞこの次までお預けを願ひ度う存じます」

断つたが定連は承知しない。

「先生々々、何もそんなに、お高く止らなくともい／＼ちやアねえか」

「意地の悪いことを言ふなよ」

「何を讀むんだつて同じ骨折ちやアねえか、皆が好むものを演つてくれよ」

又ワア／＼と騒ぎ出した。絶體絶命になりました

た一夢が、

「これはどうも困りましたな、決して、お高く止まるのでも、意地の悪い事を申すのでも、勿體をつけるものでもございませぬが、斯うなつては仕方ありません。くらやみの恥を明るみへ出して白状しなくてはお分りにもなりません。實はあの讀物は、これ／＼の次第で、相生町の伊勢屋さんといふ所へ、質に入れましたのでございます。その御主人と堅く誓つた言葉もあり、私も石川一夢、一旦質に入りました以上は、それを受出しません事には、一言もお話をいたすことが出来ないのでございます、どうぞ悪しからず、御勘辨を願ひます」

頭をかきながら事情を話した、すると一同が、

「何、講釋を質に入れた……」

「ハイ、抵當として、その種本をお預けしてございます」

「魚河岸ばかりちやアねえ、江戸つ子全體の恥だ先祖の助六に申譯がねえや」

「乃公たちでそれを請出さうちやねえか」

「當り前だ、乃公なんざア斯うなりやア乃公一人でもその位は出す氣でゐた、角の地面を叩き賣つてもい／＼」

「オイお前、地面なんか有るのか」

「ウームその……箱庭があらア」

「巫山戯ちアいけねえ」

大へんな騒ぎになりました、これから各自で志を出し合ふと、何しろ氣前のいゝ連中の上、富貴な土地だし、多勢だから忽ち二百何兩と集まりました。一夢も、

「ア、これ程迄に講談を好んで下さるか」

と感激いたし、直ぐに使を走らせて伊勢萬へ、百兩並にその利子を持つて臺本を取寄せ、立派に講演することが出来ましたが、情は人の爲めなら

「そんなら一つ請出して演つて貰はうちやアねえか、全體いくらで預けたんだえ」

「ハイ、一夢は決して嘘も掛引も致しません。相生町の伊勢萬さんで、お調べ下さればお分りになります、一百兩借用しました」

「ゲエーツ、質の代は百兩かえ」

とさすがにこれには定連も驚きましたが、そこは威勢のいゝ魚河岸の連中です。

「べら棒めえ、乃公たちが斯うして多勢揃つて、佐倉を演れと好みの注文を出して置きながら、百兩に驚いて手が出せず他の讀物で我慢をしたと言はれちやア、他の土地の者に聞かれたつて外聞が悪いや」

一人が口を切ると早速他の者も同意いたし、

「さうだとも／＼、四日市の翁亭の定連の顔に拘はらア」

「魚河岸一統の名折れだぜ」

ずとやら、義心から發して男女二人の命を助ける爲めの入質も、斯様な結果になつて直ぐと質請が出来た上、残り百兩が自分の祝儀になつた。それのみならず、

「種本を百兩といふ莫大な金高で質に取るとは、全體どれ程面白い講釋なんだらう」

と評判が評判を生んで我も我もとこれを聞きに殺到いたし、翁亭は毎日々々非常な大入り、今月で申す素晴らしい宣傳になりました。石川一夢の名聲はますます高く相成りましたが、一方大阪に於て笹川五岳は、江戸から参りました我子芳次郎の書信により、一夢が舊怨を忘れて親切を盡してくれた次第を承知いたし、「ア、申譯もねえ。あんなに苛めぬいた一夢さんに、俸の命を助けられるとは何たる皮肉だ、心の寛い一夢さんに引かへアア乃公はつくづく浅ましい根性だつた」と悔恨の涙にくれ、両手を合せて遙かに關東の方を伏拜み

細々と謝罪と感謝の書状を一夢へ送つたと申すこと。その後は双方圓滿に親交を結んだこと申す迄もありません。まことに藝術は人格の反映と申すべく、この心がけがあればこそ、石川一夢が斯様な名譽を博したものでありませう。題して種本一百兩、講談界古名人のお物語であります。

名人しん生 (一)

初代馬生の門人で鈴々舎馬風といふ、これはあまり大家でも名人でも大看板でも無い中くらいの落語家が、ある席で「九州吹戻し」といふ、一席物をやつて居りました。近頃はあまり演る者もありませんが、これは喜之助といふ男が肥後の熊本から江戸へ歸る途中、大難風に出逢ひ、玄海洋から薩摩の櫻島へ、百二十里吹戻される話であります。然し何の藝でも同じですが、演者が巧くないと引立ちません。これを樂屋で聞いて居りました

のが、初代の古今亭しん生であります。しん生はどこから出たかと申しますと、前に述べました初代の三遊亭圓生に、多勢弟子もあつた中で、圓太と圓藏の二人が、二代目圓生たるべき候補者だつたところ、その二代目は圓藏がつぐ事になりましたので、面白からず思つた圓太は、とうとう師匠のところを飛び出し、旅から旅へ流浪の人となりました。末、七八年を経て弘化四年の秋、江戸へ歸つて來まして四谷の忍原亭へ、古今亭新生といふ名で看板をあげ、その後眞生と文字を改め、更にしん生と書くやうになつた。これが即ち初代の古今亭しん生であります。この人俗稱を清吉と申し小玉屋權左衛門といふ商家に、丁稚奉公をしておりましたが、天性大の落語好きで、圓生の門へ入りました次第、そのしん生は二代目圓生の候補に擬せられてゐた位ですから、勿論話は巧かつたところへ、七年間の旅修行で、苦勞もした代りには鍛鍊

も出来みがきが掛つて一層上達、モウこの時代には落語も以前のやうな小咄でなく、話の風も一變し一席の長いものにまとまつた落語となつてゐましたが、同時に續き物の人情話も歓迎され、眞打は必らずこの續き話をするものと極つてゐた有様ところ、がしん生はその人情漸に妙を得てゐたのですから、忽ち名聲隆々として上り、押しも押されぬ大看板とはなつたのであります。そのしん生が馬風の九州吹戻しを聞き、ちつと考へて居りましたが、やがて下りて來た馬風に向つて、「何と馬風さん、あの話を私に譲つてくれないかね。如何にも面白くよく出來た話だが、失禮ながら馬風さん、お前さんには向かないと思ふ。私にゆづつて演らせて呉れれば、もつと物にする事も出來やうと思ふが……」

と交渉した。馬風は相手が大先輩のしん生だから、一も二もなく承諾して、

「大體私には、荷の勝ち過ぎてゐることもよく分つて居りましたが、師匠がやつて下されば結構でございます」

「さうかえ、では譲つて貰はふが、代はいくら上げやうねえ」

「イエいくらにも何にも、そんな御心配には及びません」

「イヤ、さうでない。兎に角これを家業の種にするのだから、無代では私の氣が濟まない。兎に角氣は心だから、輕少だが納めて下さい」

と金千匹差出しました。唯今では千匹などといつても通用しませんが、百匹が一分即ち二十五錢ですから千匹は二圓五十錢、もつとも今日でも、華族さまなど格式いかめしき舊家では、恭々しく紙包にして相變らず、金一千匹などと、立派な文字も鹿爪らしく、奉書水引立派型にして出すところもあるさうです。粗々かしい奴は千圓下すつた

のかとびつくり仰天、大喜びであけて見ると五十錢サツ五枚でがつかりしたりする事もあると聞きましたが、何は兎もあれその頃の二兩二分ですから相當の額だつたに違ひありません。

「折角ですから、頂いて置ませう」

と馬風も喜んでこれを納めました。かうして完全に取引が済んで見れば、しん生は其晩から、自分の物として口演してもいゝのですが、そこが昔の藝人輕卒なことはいたしません。これから今日でいふ演出の工夫にとりかゝり苦心慘愴、寄席を休んでわざ／＼下總の銚子へ出かけました、今でも汽車で四時間かゝり、往復すれば一日仕事、況んや昔のことですから、船で行つても容易ではありません。しん生は銚子へつくと、海岸の漁村へ泊り、犬吠岬の巖頭に立つては、毎日々々海を眺めて居りました。

○九州吹戻し 柳橋の裏河岸にきたり喜之助といふ男

放蕩の揚句、借金の爲め江戸を逃出し、流れ／＼で肥後の熊本、江戸屋といへる旅籠の主人に助けられ、元來器用もとので、料理の手傳ひ、歌三味の指南、座敷に出て取巻もなせし爲め、相當の貰ひもあり、足掛四年百兩程の蓄財を得たるにぞ、江戸なつかしさに歸心矢の如く、暇を取りて出立せしも、途中にて道に迷ひ、漸く江戸行きの便船へ乗せて貰ひしが、大難風に出あひ、櫻島へ吹きつけらる。即ち喜之助は主人の注意を聞かず、歸りを急ぎすぎし爲め、百二十里吹戻されしといふ筋なるが、此男の浮沈を始め、出立前夜嬉しさの餘りの空想獨白、沿岸の風光説明等、達辯を要するむづかしき話なり。

名人しん生 (二)

御案内の如く銚子の犬吠岬は有名の絶勝でありまして、奇石怪巖海中に起伏蟠踞し、一望萬里の太平洋から寄せては返す激浪怒濤、山より高き大波の、崩るゝ如く襲つて来るやつが、斷崖絶壁

に打つかつて、狂瀾忽ち碎け散れば、巖に激する水煙り、雪か霰か白玉の、飛沫躍動する壯觀偉觀到底筆舌の名状し盡せるものではなく、大燈臺が常に航海の船舶へ、警告と便宜を與へつゝ、その安穩を害つてゐる程の場所でもありますから、物凄くも亦恐ろしき光景は、其實際に臨んだものでなければ、想像しても分りません。さればこそしん生は、わざ／＼此處を選んで實見に出かけ、毎日巖頭に立つては、轟き渡る風浪の音に、雄大の氣分を養ひつゝ、千態萬狀窮りなき、女浪男浪が變化の様を、仔細に觀察してはその形容を、あれこれかと研究して居りました。そして漁夫に就ては暴風雨のときの實況を尋ねたり、難船難破の經驗談を聞いたりました。何でこんな事をしたかと申しますと、即ちしん生はこれによつて、九州吹戻しの主人公たるきたり喜之助が、熊本を立つての後、薩摩の櫻島まで、百里の海上を吹戻され

るといふ、此物語の山になる肝腎な條の、演出に使ふ爲めだつたのでありました。文筆の士も大抵いは、机の上の想像で、創作するのが通例でありますのに、卑近の舌耕を業とするしん生が、こんな苦心を積んで表現に資したといふ藝術的努力はまことに學ぶべく尊敬すべき精神だと存じます。たゞ見れば何の苦もなき水鳥の、足にひまなき我が思ひかなとやら、凡そ一事一業を成就したものの裏面には、大なり小なり、必ずや人知れぬ苦勞の伴はぬものはありませぬ。しん生は馬風に對し必らず私が物にするからと約束した言責を重んじこれ程の苦勞をして、研鑽に研鑽を積み、推敲に推敲を重ねて、完全に自家薬籠中の物とした九州吹戻しを、江戸へ歸つて披露口演しましたところさらぬだに名人のしん生が、特に魂を入れての藝術、これが受けなからう筈もありません。期せずして高評湧くが如く、しん生の九州吹戻しは、忽

ちに極め附きのものになり、「明晩九州吹戻し」といふビラを辻々へ張出し、これを撒きビラと申しますが、この廣告をするに必らず大入満員になること極つてゐたと申します。藝もこゝ迄行き度いもので、即ち苦心と努力は立派に報ゐられた次第後の名人円朝も、

「しん生の九州吹戻しは眞似も出来ない」

といつて、自分もやらす、弟子にもやらせなかつたと聞いて居ります。總體にこのしん生は、人情漸の巧かつた人で、この吹戻しや「お富與三郎」

「小猿七之助」のやうな、艶つぼくて波瀾に富む世俗の話を得意とし、一時はその名聲江戸の落語界を風靡して、八丁荒しのしん生ときへ言はれた程でありました。その演出に就て工風をこらした熱心は、吹戻しの場合と同様、何んでも同じこと

で、小猿七之助の話には、七之助の父七五郎が無論出ます。この七五郎は網打ちですから、しん生

は網打ちの事も、一通り覚えてゐなくては、この話が出来ないとあつて、當時有名な網打ちとして知られました柳橋の上州屋慶次といふ人について親しくいろ／＼と教へを受けて高座へかけましたところ、一人の老人が樂屋へたづねて来て、「さすがに師匠、心得たものだね。然し、網を打つところはあれでいゝが、上げるところが違つてゐるよ。四ひる半の網は、手ぐる時に腕へかけて丸めるものではない。あれは網の先を順々に疊んで上げなくてはいけません。又、楫子が、船を押しながら後方の手で松明をかざしてゐるところ、あれは四方がモヤで暗い爲め、松明をつけるのだから網打ちの目の先きへ出しては仕事が出来ない。網打ちの頭の方でかざしてゐるのですよ」と親切に教へてくれましたので、しん生はその通りに演じましたところ、大に好評を博したといひます。何しろ多勢の聴衆の中にはどんな専門家

が聞いて居るのか分らないのですから、迂つかりしたことは話せません。不斷の研究が大切といふことになりませぬ。しん生はその用意に萬全を盡したと同時に、演出の上にも、細かい注意や工風をこらしたさうで、例へばおとみ與三郎を話して、與三郎が鳥破りにかゝる時などは、その五六日前からわざと鬚を剃らずに伸ばして置き、着附も薄鼠色のものを用ひて、如何にも破獄者らしい氣分を出したり、又夜中のことを話す時は、左右の燭臺へ立てた蠟燭の芯を切らずに薄暗くして話し、いよ／＼夜が明けるといふ時に初めて芯を切つて高座を明るくするといふやうな具合、大袈裟に申せば、話の中へ舞臺照明を應用するやうな技巧を弄して、一段の趣を添へたと申すこと、この人俳名を壽耕といつて風雅の道も心得、初めは淺草、後に本所番場、薬研堀等に住んでゐましたが、安政三年十二月二十六日歿し、本所番場本久寺に葬

り法名古今院眞生日清信士、行年時に四十八でありました。

初代の南龍 (二)

下總佐原在森戸村に、作右衛門といふ農夫がありまして伴を作内と申し、これが小児の時から大分變つて居りました。どう變つてゐたかと申すと神童でも天才兒でもなく、どちらかと言へば常識を缺いてゐるやうな鹽梅、ハナを垂らして遊んでゐる時分から、

「乃公は今に天下の豪傑になるんだ」

といつて威張つてゐた。その様子があまり伶俐者とは思はれませんが、村内の人々はみんなこの子を莫迦にいたし、

「ありやア作内ぢやアねえ百内だ」

といつて、誰も本名を呼ばずに綽名の百内の方が通りがよいやうになりました。然し本人は平氣

なもので、

「ナニこいつ等におれの心持が分るものか、今に天下の豪傑になつてから驚くなよ」

と心中に笑つてゐましたが、草ぶかい此土地にちつとしてゐては、天下の豪傑になれさうもないと考へたか、十八九の時にボンヤリと村を出まして江戸へ行つた。他にたよる所もありませんから恰度この森戸村を領分にしてゐる三千石の旗本、瀬名源五郎のところへ折助奉公に入りました。瀬名氏の邸は麴町の番町であります。何しろ將來は天下の豪傑にならうといふ、大望があるから勤めもおろそかにはしません。よく働くので作内と可愛がられた。すると此家中に、萩田佐内といふ侍がありました、

「作内く」

「へ何です」

「御苦勞だがちよつと行つて来てくれ」

「ハアどこへ参ります」

「この小袖を持つて伊勢屋へな」

「アレ萩田さん又質を置くのか」

「叱、これ大きな聲をするな」

「いくら入用だね」

「ぜひとも一兩なくては困るんだ」

「ハアようがす。頼んで見ますべえ」

風呂敷包を抱えて麴町二丁目の伊勢屋といふ質屋へ参りましたが、先方では品物を見まして苦い顔をいたし、

「どうも折角ですが、これでは一兩とてもつけられませんか。精々三分といふ所で」

「イヤそれは困る、何でも一兩借りて来うと言ひつかつただ」

「だつてそれだけの値打が無いものを、仕方がないぢやアございせんか」

「いゝではねえか、知らねえ顔ではなし、萩田さ

んもお前がとこの常花主だ。一分ぐれえの違ひなら無理でも都合して下せえよ」

「ところがさうは参りませんので」

然し乃公だつて小児の使ではなし、斷られたからといつてハアさうかとは歸れねえ、使をたのまれた甲斐がねえといふものだ、待つてくんなよ」

何をするかと見てゐると、作内懐ろから鼻紙を出しまして、幾分風流の方もたしなんでゐたものと見え、サラ／＼と書いたのが、

「この質をおぎ田からは、流さ内、伊勢や熊野の神にちかいて」

といふ狂歌でありました。これを伊勢屋の主人が見まして、

「ハ、これは面白い。よろしうございます。それではこの狂歌に對して、一兩御用立いたしませう」

と貸してくれました。作内美ン事使命を果し、

大得意で歸つて來た。こんな風ですからまことに評判もよろしく、自分も節儉を旨として働きましたから、數年の間に七十兩も蓄財が出来ました。今なら郵便局へでも持つて行くところでせうが、その頃の事だから預けるところが無い。御用人様なら間違ひもなからうと考へて、中村惣右衛門といふ用人に預けて置いたところ、その中にこの惣右衛門がボツクリ病死、調べて見ると内證も苦しかつたものか、とても遺族には七十兩返濟の見込みが立たないといふ事になりました。イヤどうも作内が、永らくの辛抱も水の泡になつて、がつかりしたこと一通りでありません。然しそこが變り者の事だから、ぢーつと瘦我慢をして平氣な風を装ひ、お通夜の晩にも棺の前で懇ろにお經を誦み回向をいたし、

「時は今、神なし月の事なれば、佛のために斯くはなすなり」

と自作の狂歌を高らかに唱へながら、例の七十兩の預かり金通帳ですか證文ですか、兎に角惣右衛門から後日のためとして、作内に與へて置きました書附を、すた／＼に引さいて、棺の中へ投げ入れまして、その儘部屋へ引取りましたものの、心の中は残念で悲しくてなりません、ところがこの事が主人の瀬名源五郎の耳に入りまして、

「下郎ながらまことに天晴れの精神、左様な人物を仲間にして置くは惜しいもの」

とあつて、日ならず士分に取立てられました。イヤどうも、作内の喜び一方ならず、禍ひ轉じて福となるのはこの事、思ひもよらぬ身の出世に、手の舞ひ足のふむところも知らぬ位、いよく目的の天下の豪傑になりかゝつて來たぞと喜びました。

初代の南龍 (二)

これから苗字も例の萩田さんから一字を貰つて萩沼と名乗り、萩沼作内といふ一人前の武士になつたから、ます／＼勵みがつきまして文武兩道を學び、中にも劍術は、幸流の鈴木三郎右衛門を師として精を出し、間もなく免許皆傳をも得ましたので、作内の鼻は高くなるばかり、

「サアもう天下の豪傑になるのは目の前だぞ。これより日本六十餘州を遍歴して、三百諸侯の指南番を片つ端から打敗かし、武名を宇内に轟かせて拍子がよければ大名にでもなれるだらう」

と大へんな理想を抱いちまつた。そこで主人からも暇をとり、中仙道から木曾路へかけ武者修業の第一歩をふみ出したところは、勇ましくも亦物々しき意氣組でありましたが、折から秋の風冷たく、碓氷峠へかゝつたのが、折あしくも夜道になりました。勿論人つ子一人通るものもなく、そこへ作内がやつて來たので、こりやアいゝ餌物が配

給になつたものだと思ふと喜んだ一群の狼が、遠吠物凄く牙を鳴らして、作内目がけて襲ひかゝりました。イヤ作内が驚いたの何の、膽を潰して仰天したがイヤ／＼こんな事では天下の豪傑とは言はれない、何のタカの知れたる狼ども、唯一刀に斬するぞと、一刀の柄に手はかけたものの、相手は狼だ、劍術では勝手がちがひます。後から飛びかゝつた一頭の爲めに、左の股へ噛みつかれ、アツと叫んだ作内が、苦し紛れの死にも狂ひで、拳を固めて狼の頭をはり飛ばしたところ、この狼よつぽど腹がすいてゐたか、榮養不良であつたのか、脆くも唯の一撃で、引くり返つちまひました。これを見ると他の狼達も、恐れを抱いたものか皆な退散した。作内はホツと一息月影も、傾く山路をやうやうに、股の痛傷を包みつゝ、びつこを引いて峠を越しましたが、豪傑修行の第一緒戦に、狼に咬みつかれたなんぞは幸先がよくありません。

けれども作内はまだ負け負しみが強く、「ナニ、相手が悪かつたんだ。狼はいけない。あいつは苦手だよ、何の、人間が相手なら、荒木又右衛門が来やうが、宮本武藏が現れやうが、おくれを取るやうな拙者ではない」

と天狗心は依然として變りません。これから日を経て攝州の尼ヶ崎へ参りましたが、此土地には梶川十太夫といふ、老人ながら稀代の名人と呼ばれる槍の先生があると聞き、

（ようしそれこそ屈竟の相手だ。タカの知れたる老ひばれ一人、唯一打ちに打据へて、次第によつたら道場の、看板も引外してやらうぞ）

と試合を申込んだところ、梶川十太夫年こそとつたれ確かなもの、二間柄の長槍を、リウ〜として立て立現はれ、唯一突きに作内を突倒しました。作内はもんどり打つて道場の隅へ刎ね飛ばされ、勝負にも何にもなりません。今更面目を失つ

た作内が、這々の體で此場を退散いたし、旅籠屋へ引上げましたがつく〜考へましたのは、

（駄目だなア。こんな筈ではなかつたんだが、梶川のやうな老ばれにまで、今日のやうな見苦しい負けをとるやうでは、とても劍道では見込みがないよ、ア、いかん〜。武者修行もこれでおしまゐにしよう。然し何とも残念だが、ア、さう〜いゝことがある。乃公は生れついて辯舌が達者なのを幸ひ、これは一つ講釋師になつて、古今の英雄豪傑を舌頭に上せ、思ふ存分氣焰を吐く事にしよう）

といふ所へ氣がつき、それから江戸へ歸りまして、初代の田邊南鶴の門に入り、竹刀に代る張扇で釋臺を叩く身の上となりました。これが即ち初代の田邊南龍であります。思へばすい分奇抜な變化多き閱歷をもつた人ですが、御記録讀みの軍談師は、この人の性に合つたものと見え、

ん〜賣出して名聲を博しました。かうなると南龍ますます奇人振りを發揮し、いつも高座で、「日本に過ぎたるものが二ツあり、駿河の富士に田邊南龍」とか、

「小野の小町にヤアラがない。鱧の木登り見た事ない。氣の利いた席亭こいつも無い。田邊南龍ぬけ目がない」

などと、大言ばかり吐いておましたが、お客は却つてこれを喜んだといふこと、どつか憎めない愛嬌のあつた人と思はれます。又、どういふ縁故を辿つたものか、

「乃公は鎮西八郎爲朝三十八世の末孫だ」

と申し、爲朝は嘉應の二年四月八日に歿してゐるといふので、毎年その命日に當る四月八日にはお赤飯をふかしてお祭りを行つたと申します。兎に角、餘程の變人だつたには相違なく、安政四年

六月廿七日五十六歳を以て歿し、谷中初音町觀音寺に葬りました。その後をついだ二代目が、有名なのん〜南龍であります。これは又後に申上げる事といたします。

○旭堂南麟のこと 同じ頃二代目南鶴の門人に旭堂南麟あり、この人は本名を朝比奈安兵衛といひ、父は今川義元の臣朝比奈駿河守の末葉にして朝比奈忠四郎といふ六百俵取りの徳川家旗下なりしが、南麟の安兵衛は放蕩の末、遂に講釋師となりしも武家の氣風少しもぬけず、乃公が講釋をして聞かせるのだといふ見識にて自ら大南麟と稱し、小石川武島町に住み人呼びて武島町の南麟といふ。古戦物語を得意とし、風流の才もありしが、晩年山の手の某席に出演中、一子明麟、美貌に果せられて素行修らず、横濱にて不都合なる婦人關係より殺害せられたりとの悲報至りぬ。折柄南麟は、第二席目を讀み終りたる所なりしが、この兇變を知つて大に心を痛めしも、自若として又高座へ上り残りの後席を講じ終り、それより初めて門弟たちへ、この出來事を知らせたるにぞ、いづれもその

大膽なるに驚けりとぞ南麟はこの時筆をとりて、
「魂棚へ及び腰なる手向がな」と詠じたるが、その後十三年を経て、明治十一年八月十三日七十二歳を以て歿し、四谷寺町戒行寺へ葬り、法號を昌龍齋昇旭日遊居士といふ、辭世に曰く「我死なば風呂敷無用さし荷ひ、戒名なしに回向御無用」

扇橋と扇歌 (一)

武家の出身で講釋師になつた人は、既に何人かその例を挙げましたが、落語家になつた人も少なくなはありません。初代船遊亭扇橋の如きはその一人で、残念ながらこの本を調べて見ても本名は分りませんが、以前は奥平家の臣で赤坂に住んでゐたとしてあります。常磐津兼太夫の門人になつて若太夫と名乗り、文化六年下谷の吹ぬきといふ寄席へ出たとつてゐるところを見ると、震災前頃まで下谷廣小路の次の池の端へ出やうといふ横町にあつた吹ぬきといふ寄席はずい分古くからあつ

たものだと思はれますが、この若太夫が、落語家になつて船遊亭扇橋と名乗りました。門人も多勢出来、此人が音曲噺の元祖であります。而して門人の扇蝶が、後に改名して初代の柳橋となり、その門人から柳枝が出で、斯くて柳連といふものが出来たのでありますから、落語の柳派にとつて、扇橋といふ名は最も大切な先祖といふ事になります。それは扱おき、あるとき其扇橋のところへ、弟子になりたいといふ男がやつて来ました。應對に出た門人がちよいと見ると、風采も貧弱、目のしよぼ／＼した、一向價値のない人物なので、「サアどうも折角ですがね、うちの師匠は氣むづかし屋だから、誰の引合せもなく、だしぬけに來なすつたつて、それはとても駄目でせうよ。それに今日はお客もあつて忙がしいし、マアどうぞ悪しからずね」
體よく斷らうといはしました。するとその男が

「イエまだ他に、証も出来ませう。何でもいゝから題を出して見て下さい」

と申しました。そこで居合す門人たちが、代る／＼、可なりの難題を出しましたら、この男は何の苦もなく、片つ端からそれを解いて、而も三味線であしらひながら、唄にして歌ひまくりましたその奇才には扇橋はじめ一同ます／＼驚いて、そこで此男の入門をゆるし、高座へ出して見ると果せるかな、大受け大人氣で忽ち賣出し、大さうな評判をとりました。この人物こそ、都々一といふものを歌ひ始めた元祖で、即ち初代の都々一坊扇歌であります。由来この人の傳記は、區々に傳へられて判然しなかつたのを、文筆の傍ら（今では街歌と呼稱を改めて居られますが）都々一の作家であり研究家である、先輩平山蘆江先生が、先年土地の有志の懇請により、扇歌の郷里たる茨城縣石岡へ赴かれ、くわしく調査せられた爲め、やう

ふるえつき度いやうな美音を張上げて、
「エ、乗り出した船ぢやもの、沖のはてまでサアやりませう。ソレおもちも、とりかぢも、せん橋師匠の胸ぢやわいな」

と歌ひました。咽喉といひ、節廻しといひ、びつくりする程巧いので、そこは音曲を命としてゐる扇橋のこと、早くも、

「ウ、ムこりや大したものだ、使へるツ」と見ぬいてしまひ、

「マアいゝから此方へ上げな」

家の中から聲をかけました。本人も喜んで上つて來たので、あらためて扇橋が面會し、

「お前さんなか／＼巧いねえ」

「有がとう存じます」

「藝は何をやりなさる」

「マア一番好きなのはよしこのですね」

「よしこのばかりぢやア賣物にどうかな」

やく具體的になりましたから、それによつてお取次ぎいたしますが、この人幼名を福次郎といひ、父は常陸太田在磯部村の、岡玄作といふ醫師としてあります（他の説には、水戸藩の醫師櫻井玄達といひ、其子として水戸市下市横竹隈町に生れたが、後に磯部村へ移つたのだともあります）このお父さんもちつと變つてゐた人に見え、水戸へ出て藩醫の原南陽のお弟子になり、醫術修業中にも相當放蕩をしたさうで、俸の福次郎が七つの時に疱瘡にかゝつたところ、疱瘡に松魚は大毒だと、醫道の書物に書いてあるのを見ながら、
「本當に毒かどうか一つためして見やう」とばかり、亂暴なお父さんがあればあるもので我子に松魚を食べさせたところ、サアたまりません大苦悶を始めて、忽ち盲目になつちまつた。さすがの玄作先生もびつくりして、周章狼狽いろいろ手を盡した結果、辛うじて失明はとりとめたも

の、爾來福次郎は終生目をしよぼくさせてゐるやうな事になつたのだと申します。この親にしてこの子ありで、福次郎も父親の奇抜な氣性を受けついでたものか、大分常人とは違つてゐて、十四の時にはモウ家を飛び出し、今は日立市となりましたが助川の近所の相田村といふところで、小僧奉公をしたが、勤まりません。逃げ出して磯部へ戻り、今度は榎屋といふ酒屋へ養子にやられましたが、これ亦尻が据らないで此處を逃げ出し、あとは三味線かゝへて放浪生活、二十歳になつた頃は、居候をしてゐた叔父さんの、これもお醫者さんですが此處から一兩二分の路銀をもらひ、磐城平の湯本あたりを、歌をうたつて渡り歩いてゐたといふことであります。

扇橋と扇歌 (二)

流れ渡りの旅藝人、いゝ時はかりはありません

年中火の車で懐ろが苦しく、後に都々一坊一代の傑作として傳へられました。

「白鷺が小首をかたげて二の足ふんで、やつれ姿の水鏡」

といふ歌なども、この時分に出来たのだといふ事、生活の悩みをその儘唄にした、悲痛の叫びであつたかも知れません。しまひには商賣用の三味線迄手離してしまつて、其代用品として味噌漉の底をぶちぬき、西の内といふ紙を張り、それへ鶏卵の白味を塗つて、急ごしらえの三味線をこしらえ、この珍妙な樂器を抱えてベコ／＼やりながら栃木在太田原の木賃宿にくすぶり、往來を流してはその日／＼をつないでゐた。この哀れな姿と美音と機智に富んだ頓才とを見出した宇都宮のある商人が、同情して幾らかまとまつた金子を與へたのださうです。それを路銀にして福次郎が、豫て志す江戸へ出て参り、扱こそ同じ落語家の中で

も、音曲を専門の、扇橋のところを頼つて弟子入りを頼み込んだとかういふ経路であります。斯くて扇歌は天保九年八月から牛込の薬店亭へ出席し、聽衆から題を求めて謎を解いたり、即席都々逸や、三題のトツチリトなどを頓作して歌ひましたが、その鮮やかな當意即妙には、感ぜぬ人もなかつた位、これが浮かれ節の元祖であります。斯様な次第で、扇歌は扇橋の門人中でも、最も優れた一人となり、この人の出る寄席はその頃としては破格に高い五十六文といふ木戸を取り、且つ大入を占めたといふ事、兎に角多藝多能な人で横笛も吹いたと申します。何しろ八方から引張風の人氣でお座敷も多く、諸侯方へも召されて大した勢ひ、斯うなるとそこは凡人です。自慢の鼻を高くして、自ら都々一坊大僧正などと名乗り、可なり、傍若無人の振舞もあつたとやら、初代の柳枝が、

「水戸だけに扇歌自慢の鼻にかけ」

といふ、諷刺の川柳を詠んだ程ですから、その
邊想像もつきませんが、門人には、都橋、都山、歌
川、歌蝶、都川、歌久壽等があり、毎夜即席に作
つた都々逸その他が、かけ流しになつて傳はつて
居らぬば残念ですが、残つて居ります作歌は、前
に挙げました白鷺の他にも、

「私や奥山ひとと櫻、八重に咲く氣はさらにな
か」

「ほかの人にもかうかと思や、お前の實意が苦に
もなる」

「人も花ならさくらも花よ、實を持つ頃には誰も
來ぬ」

等があつたと、これは郷里の人々の言傳へであ
ります。郷里といつても、水戸や磯部ではなく、

第二の故郷ともいふべき石岡の事で、この石岡は

その頃府中と申しましたが、文政から天保へかけ
その府中の青木町に、酒井長左衛門といふ、大き
な醬油屋があり、その分家で旅籠屋をしてゐた酒
井長五郎が、扇歌の姉を後妻に迎へ、その縁で扇
歌は福次郎時代、この家へ養子に貰はれた事もあ
り、今以て墳墓がこの酒井家の菩提所にある程で
石岡と扇歌とは、深い關係があるのでございます
されば扇歌が人氣に任せて賣れつ子となり、ます
持前の奇才を發揮する中、毎夜高座の即席都
々逸も、時事問題にふれたり、政治を諷刺批謗し
たり、脱線もあつたものですから、これが爲めに
舌禍を蒙り、遂に江戸拂ひになつた時も、志した
ところはこの石岡でありました。もともとも江戸拂
ひといつても、大して厳しいお咎めではなかつた
らしく、府中即ち石岡に謹慎せよとあつたにも拘
はらず、常陸から上州筋を、のんびりと興行して

廻る事に就ては、何の干渉もなかつた程度だつた
さうで、その時分の扇歌は藝もいよく圓熟し、
どこで興行しても大入疑ひなしといふ極め附きだ
つたといひます。その爲め石岡で都々一坊の爲め
に、新たに定席を建てたところ、あまりの大入に
ネダがぬけ大騒ぎをした事さへあり、弘化三年に
水戸の上金町で十二間四方の小屋をかけ、弟子四
人と共に出演、弟子たちは浮世噺、扇歌は三味線
を弾いて都々一を唄ひ、そのあとで客から題を貰
つては、その題を三味線で合せながら、

「何が何とは何ぢやいな」

といつた調子に拍子を取り、これを三度くり返
してゐる中に、どんな難題でも當意即妙の答へを
唄にして歌つたといふ事、餘程頭がよかつたもの
と思はれます。こんな具合に、上州常陸兩地方の
賣れつ子になつてゐる時、圖らずも師匠扇橋にめ
ぐり會ひ、而も扇橋が落ち目になつてゐるのを知

つて、禮を盡して往年の恩に報いたといふ美談も
あり、奔放な行爲の中に、義理堅い素質も場合も
あつた人らしいとあります。扇歌は嘉永五年子の
十月二十九日府中にて歿し、墓は今以て茨城縣新
治郡石岡町字國分寺の菩提山千手院にあり、有志
によつて都々逸塚も建立せられました。

○扇橋の歿年、扇歌の師たる初代扇橋は、門下に、二
代目扇橋、扇歌、鐵扇、柳橋等を始め、梅橋改め
扇龍、扇幸、扇車、三橋、扇馬、榮橋、扇子、扇
久、扇秀、新橋、扇蝶、梅橋等を出し、文政十二
年四月十三日歿し深川淨心寺に葬る。

○牛込わら店亭 現在映畫常設牛込館の前身にて場所
も變らず。

○扇橋の生年 諸説あり一定せざれど、平山蘆江先生
の推定によれば、文化三年生れならんとあり、こ
れを眞とせば、行年は四十九歳なるが、扇歌は幼
名を子之助といひ、子年生れの由ゆえ、その前の
子の年ならば、寛政四年の出生にて、歿年は六十
一の還暦に當る筈、土地の人の言傳には、歿年五
十位にしか見えなかつたとあれば、或は寛政四年

生れならんか。

○扇歌の謎解 石岡の寄席に出し時、客の中より「都々一坊くそをくらへ」と、悪罵の出題ありしに、扇歌は即座に「夏の夕立」と解き、その心は「西(ぬし)が暗い(くらへ)ぢやないかいな」と、同じく罵詈雑言を以て應酬、あまりに解き方の鮮やかなるより、客が「寒中の雪達摩なら、とけまい」と嘲弄するや「寒が明いたら(老べたら)解けるぢやないかいな」と即答し、アツと云はせたりとあり。まことに當意即妙といふべし。

○扇歌とりう馬 扇歌まだ素人の福次郎時代、石岡にありて銭術も習ひ、按摩を業となし居たりし頃、初代土橋亭りう馬此地へ興行に來りぬ。扇歌はその宿に呼ばれて揉療治をなしつつ「私も少し三味線を弾き、藝人になりたき志望ゆえ、弟子として頂きたし」と望みしに、りう馬は言下に頭をふり「折角ながら、落語家も音曲師も、江戸つ子にあらねば見込なし、汝のやうな常陸訛りにて、音が鼻へかゝりては到底望みなからん」と謝絶したり然るにそれより十数年の後、長谷川町の貸席梅の恵に、落語家仲間の寄合ありてりう馬もそれへ參

ぜしに、上席に座を占めしは、當時人氣並ぶものなきかの扇歌なりき。りう馬は位置も扇歌より下なれば敬意を表して座につきしを、扇歌はりう馬を呼止め「おなつかしや土橋亭師よ。お見忘れも無理ならねど、拙者こそ先年、貴殿府中へ見えられし折、入門を願ひたる、あの夜の按摩にこそ。その砌田舎者にては、成功豊東なしと斷られし一言に發奮し、苦心精勵、やうやく今日素志を達するに至りしこと、全く貴殿の賜物なれ」と丁寧謝辭を述べしとぞ。りう馬は大に恐縮したるがその後扇歌は終生りう馬の世話をなし、師匠々々と尊敬せりといふ。因にこの土橋亭りう馬といふは、初め初代扇橋の弟子なりしが、司馬龍生(初代圓生の門人)の門に轉じりう太と稱し、りう馬と改め、更に土橋亭りう馬となりしものにて、この藝名の出所に就ては、筆者も不審を抱き居たるが、先年目黒駒場福多樓といへる人の投書によりて教を受けしところによれば、門前の大きな土橋によりて名を知られし角邸の若旦那が、放蕩の末落語家で更生するやうになりしとて、かく成り果てし身の上といふ。將棋の駒の龍馬に因みてりう

馬、亭號を土橋亭と名づけしものなりとありき。附記して參考に資す。りう馬は嘉永四年六月十日五十三にて歿しき。

馬琴と北梅

講談全盛の基を開きました森川馬谷、その學問の友に、備前浪人吉田常吉といふ人がありましてこれがあらためて馬谷の弟子になり(別説に常吉は馬具職——板木師ともいふ——の伴にて神田に住み、放蕩の爲め家を出で、伯母に當る深川八幡社内二軒茶屋伊勢屋に食客中、二代目馬谷の弟子になるともあり)講釋師となつて寄席へ出演、折から當時曲亭主人即ち著作堂の瀧澤馬琴翁が、例の八犬傳その他、數多の名編を出して天下を驚かしてゐた頃でありましたから、その名に擬して馬琴と名乗り、號を東流齋と定めました。これが即ち初代の馬琴で、昔の軍談番附を見ますると、ど

れにも高位を占めて大きく出て居りますところを見て、その人氣聲望が察せられますが、それ迄は講釋師も皆棒讀みでありましたを、この馬琴は演出を改め、男は男、女は女と、老幼各々その音調を換へて讀み、身振まで加へましたから、この事が講談として、格を破つたやり方かどうかは別問題といたし、大に俗受けのしたことには間違ひなく、職人などはこの方を喜んで至るところ大衆的の聴客がぐつと殖えるやうになつたのであります。何しろ辯才はすぐれてゐたし風流も心得、川柳や狂歌なども詠み、今以てよく人のいふ、「講釋師見て來たやうな嘘をつき」「講釋師扇で嘘を叩き出し」「講釋師つかえた時に三つ打ち」等は皆この馬琴が詠んだものだといふ傳へられて居ります。その自筆の覺へ書に、「貧乏神と問答のこと、いつわりのある世なりけ

り神無月、貧乏神は身をも離れず。これを貧乏神
 開きて詫言を下し曰く、朝寝して仕事ざらひで遊
 び好き、心安きに居つゞけをする。こんな奴に流
 連されては叶はず、乃ち、たま／＼はよそへも行
 けよ貧乏神、一生添はうと約束はせぬ。貧乏神め
 そ／＼泣いて、今更につれない事を言はんすな。
 斯うなるからは二世も三世も……圖々しい奴に
 は閉口云々。

などあつたさうで、こんな事を引き事に話して
 は笑はせたものらしいと、これは先代馬琴老人の
 談話で聞きましたが、馬琴はその藝風一世の嗜好
 に投じて評判高く、門人も三十餘名（一説には六
 十三人）を教へ、弘化年中水戸へ赴いた時など、
 土地の人は皆これを八犬傳の著者と間違へて客の
 山を築き中には揮毫をして貰はうと、扇面や色紙
 短冊などを持参したものとさへあつたが、著作堂と
 は人違ひと知れ、がっかりして歸つたなどといふ

笑話もありました。斯くて馬琴は大阪へ赴いて同
 地でも門弟を三十六人も取立て、阪地にも後に東
 流齋馬琴を名乗るものが出来たのは、この爲めだ
 と申します。而して晩年も同地でくらし、大阪に
 於て歿しましたが、その長女ことの聳となつた門
 人の琴調は、師の病氣を聞いて大に愕き夜を日に
 ついで同地へ急行、やうやく臨終に間に會つて死
 水を取りました。時に、馬琴はその際琴調に向つ
 て、

「二代目馬琴の名はお前にゆづつてあるし、別に
 心残りの事はないが、只モウ一度、江戸の日本橋
 を見てから目をつぶりたかつた」

と述懐したと申します。その歿年の不明なのは
 斯道の遺憾とされて居りますが、月は四月らしく
 命日は十九日、琴調は茶毘に附した遺骨を江戸へ
 持歸り、淺草新堀端良稱院へ葬り、法號を釋教道
 信士と申します。墓碑は根府川の自然石で、右三

つ巴の定紋を彫り、東流齋馬琴の墓と刻んである
 さうで「暗へ引く水のあかりや鶴の籜り」が、そ
 の辭世でありました。斯くて江戸と大阪とに、數
 多の弟子を残した馬琴の、二代目は右の琴調がつ
 き、これを琴調馬琴と稱しましたが、その他に琴
 窓（東月齋）、琴莊、琴寶、琴鶴（松林齋）、琴袋等
 が傑出し、この人々を琴門の十哲と稱したといふ
 事、多くの弟子の一番末席に、琴曲といふ門人が
 あり、これが後に放牛舎桃林となりましたが、こ
 れは後の別項で申し上げます。扱こゝに挙げました
 十哲の一人、琴莊といふ人が中途で名を改めて蘆
 洲と名乗りました。これはある最負の學者から勸
 められたもので、申す迄もなく、豊蘆原の中つ國
 といふところに因みました。實に大層な名であり
 ます。これが即ち蘆洲といふ名の初代で、この蘆
 洲は、本名小林太郎兵衛、以前は松浦家の留守居
 役だつたさうで、自分で作もいたし高座も名人、

後に北嶽、又、北叟から、鶴井北梅と改め、前にも
 も擧げました如く天保度の番附にも安政度のにも
 最高位を占めて居りますから大したものだつたに
 違ひなく、その後更に又齋號を改めて小金井北梅
 となつた。この人子福者で十五人も子供があり、
 生活も樂でないのに至つてのん氣で、或年の大晦
 日、とても正月を迎へられないとあつて方々から
 やうやく十五兩の金子を借り受け、これを懐ろに
 して歸つて來ましたが、年末だから植木屋の住居
 の近所には、植木屋の夜店が多く出てゐる中に、
 美事の梅が一鉢あつた。北海恍惚としてこれが氣
 に入り、十五兩出して買った爲め再び元の一文な
 しになつて、新年の初席に大まごつきをしたなど
 の逸話もありました。

潮花と花清

さてこの北梅などと時代を同じうして、伊東潮

花といふ先生がありました。嘉永三年の高名五幅對に、初代南窓の南玉や、初代伯山、前項の北梅及び初代伯田と相並んでこの人の名が出て居りますが、新橋二葉町で諸侯から俸禄を享けてゐた木村檢校といふ盲人の學者、これが潮花のお父さんで、その子に生れた潮花は幼少より學事にいそしみ、文筆から風流、易學、醫術、花道、茶道、さては馬術に至るまで、何一つ通ぜぬものはなく、極めて博識廣才にして多藝多能の上、態度も謹嚴な立派な人物でありました。二代目陵潮の門に入つて潮花と名のり、源平盛衰記、曾我物語、伊賀越仇討、伊達評定、さては田沼騷動などを得意とし、とりわけて天草軍記は、十八番の讀物であつたとしてあります。ある時この潮花が夜講の席で客の中に居りました二人の武家、潮花が高座へ出るのを見ながら、立つて歸らうとしましたのを、潮花はムツとしたものと見え、

「アイヤお武家、暫らくお待ち下さい」と聲をかけた。呼び止められた二人の武士は、何事かと振返る。潮花は高座から嚴然として、「失禮ながらお見受け申せば、公儀御直參の御武家と存じます。伊東潮花今晚の演題は、忝なくも東照神君、天下泰平の礎をお固めになりました御苦戦御艱難の有様を、謹んで講じます三河後風土記でござりますが、餘人は兎もあれ、お直參の御家臣が、それを聴かすにお歸りになりまするは、潮花甚だ残念に心得ます」といつた。歸らうとした武士も、この一言には立つ譯に行かない。如何にも赤面の體で又元の座へ戻つて謹聴いたしました。そこで潮花は後風土記を、特別に力を入れて長々と講じたから、面白い事も無類でありましたが、二人の武士は最後まで謹んで聴聞いたし、外の客一同の歸つたあとまで残つて居りました上、あらためて潮花に對し、

「まことに今晚は失禮をいたしました、然しお蔭を以て、神君の御事蹟を承はり、今更ながら感銘の涙にくれ申した。忝く御禮申す」と慇懃に挨拶を述べて歸つたと申すこと、何ぞ知らん、此晚潮花の演題は、前夜からの讀續き、曾我物語を演る筈でありましたのを、武士の態度が癪にさわつたので、早速の思案で後風土記に取

かえたのでありました。これも自信と見識がなければ出来ない藝で、これは有名な逸話として傳へられて居ります。潮花の易學に於ける造詣は極めて深いものだつたさうで、有名な根本通明博士なども、潮花の講義を聴いた事があるとかいひます。潮花は達者な文筆に任せて、諸家の歴史や記録を詳細に筆記し、藏書の寫本ばかりが二百冊以上もありました由、七十一歳の高齡を保つて明治十三年七月十日歿し、麻布一本松徳正寺に葬りました。この潮花の弟子に、伊東花清といふ人があ

り、これ亦博識の大家で、和漢の史乘に通じ、自分で筆録した珍書數百卷を所藏し、その上に記憶が強く、どんな事を聞かれても、決して窮しないといふのが本人の自慢でありましたところ、慶應二年の火災に類焼して、折角の藏書を皆な灰にしてしまつた。自分で丹誠をして、書き寫したものに、これは残念だつたに相違ありません。失望落膽して氣ぬけの如く、張合も勇氣も失つちまつた。ところへ瀬戸物町の伊勢本から、出演の交渉があつたのでこれへ出ましたが、横濱の席亭から花清へ對し、

「私の方の約束はどうして下さる」と嚴談を受けた。これは豫て、此月は横濱へ出ますといふ、約束をしてあつたのを、花清傷心のあまり迂つかりして失念しちまつたのであります。平常記憶力の強いといふ事を自慢してゐただけに引込みがつかまません。その上に迷惑をかけ

たといふ責任を痛感しまして、

「ア、申譯のないことをした」

と心を決し、木挽町の自宅に於て、美事割腹して相果てました。時に行年五十一歳、斯うなると講釋も命がけであります。昔氣質とは申せ、責任觀念の強いところは、感すべき至りと思ひます。

又、同じ潮花の門人に、伊東花雲といふ人があり讀物は塚原卜傳と、西遊記だけしか知らなかつたさうですが、その頃、晝席は一年間、夜席は半年間が一ト興行であつたのを、いつもこの二つで立て続け、人物もごく卜茶けた愛嬌もので、評判がよかつたと申します。尙その頃同じ伊東派に、伊東燕勢といふ大家があり、本名野澤善次郎、大森蒲田に生れ、四谷鹽町に住し、初めの名を燕齋といひ、後に、燕勢と改めました。性格質撲にしてよく故事や記録を調べ、前に申した湯島の燕晋、即ち伊東燕晋の風格に私淑し、仲間からも大人と

稱せられました。又俳句をよくして俳名を喜壽庵

といひ、明治初年に、東京市中へ御酒下されのお祝があつた時、

「春風や芝はみやこの入り口」

と詠んだといひます。

○潮花の代々 花清の弟子清齋は二代目潮花をつぎ、

世にこれを清齋潮花と呼びしが、更に初代燕尾の門人燕清が、三代目潮花を相續、これを燕清潮花と呼ぶ。

二代目蘆洲 (二)

その頃、兩國橋を東へ渡つた北側にありましたのが、橋番五郎兵衛の持つてゐた、有名な五郎兵衛の席、こゝで中賣の茶番をしてゐた小僧に、龜之助といふのがありまして、定連などは龜小僧龜小僧と呼んで居りました。この龜小僧が至つての講釋好き、茶番をしながらも熱心に聞き覚えまし

て、所謂門前の小僧習はぬ經を讀むといふ筆法、毎日まだ聴衆の來ない中に高座へ上り、印袈天姿の儘、釋臺を叩いて修羅場を讀んだ。ところが好きな位だから、よく覺へてもゐるし調子がいい、これは物になりさうだと、目をつけた席主の五郎兵衛が、

「龜や、お前中番をしてゐるより、いつそ本職の先生になつたらどうだ。誰かいい師匠に頼んでやらう」

と言つた、當人も喜んで、
「どうぞお頼み申します」

と答へましたが、その時にかゝつたのが、前に傳記の出した天下の豪傑志望を變更して講釋師になつたといふ奇人田邊南龍でありました。

(ア、この人がよからう)

といふので、席主から頼みまして、龜小僧を弟子入りさせた。最初貰つた名が龍子といひます。

龜小僧の龍子好きな講釋師になれたのだから嬉しがつて熱心に勉強、シヤガレ聲だがなか／＼巧いけれどもこの時代には、名人大家が揃つてゐて、空板を叩く前座の小僧といへども、凄い程巧いのが居りました。その中にも、貞山の弟子の一龍齋貞豐、陵潮の弟子の伊東舊瓦、南麟の弟子の旭堂麟子、この三人などは、三小僧と呼ばれた位、なまじの二つ目は叶はなかつた位、尙この三人ばかりでなく、舊瓦の弟に円琉といふのがあつて、これは後に松林三円となり、又太琉から京傳と改名しましたが、この三円は猿若町の芝居茶屋の主人で、一枚繪にも出た事があり吉原の百人斬など、人の及ばぬいゝ呼吸があつて、殊に阿部豊後守の隅田川乗切などを讀むと、勢込んで駿足を水中へ飛入れる條、水煙の立つのが見えるやう。かしくの兄殺しなどでは、酒亂のかしくが酔さめの水ほしさに臺所へ行き、偶然手にふれたのが出刃庖丁

思はずそれを逆手に取上げ、フラ／＼と殺意を生ずるところなど、眞に迫る程巧かつたとこれは三円を開いた人の話。その又弟に、清水八兵衛といふのがあつて、後に伊東東山となりました。こんなのがいくらもゐたので、小僧といへども皆な巧い。その中へ交つて、龜小僧の龍子なんぞは一向に引立ちません。ところが今申した三小僧は、十で神童二十で才子、三十過ぎれば只の人といふ譬へに洩れず、皆な中途で挫折して、立派にならず終ひでしたが、龜小僧の龍子はこの三小僧などを追越して、ぐん／＼昇進をしたといふのは、前申した小金井北梅に認められて引立を受けたからで人は何でも先輩に目をつけられるのが大切、それには矢張り勉強して實力を養ふことであります。龍子は北梅に認められて北の字を貰ひ、田邊北州と改めましたが、師匠南龍の歿後は、正式に北梅の弟子となつて小金井北州、そして北梅が、文久

人北梅も嘸喜ぶ事であらう」

と同意いたし、そこで北州が二代目小金井蘆州になりました次第、これが十九か二十歳の時だつたといひますから、前途有望であつたことがよく分ります。そこで小夜講の眞打になつた。小夜講といふのは、勿論大きい寄席ではなく端席のことで、それにも次第があつたといふのは、木戸銭の高下で階級がついてゐた。その頃一番裾が十二文、それから十六文に昇り、次が二十文、二十四文とこれが順序で、その上の二十八文取るやうになると大場へ出られる。その二十八文とる程の腕にならないと大場の席は打てなかつた。即ち、二十四文以下を小夜講と申したもので、晝席になると又格が上がる。二十八文では場末の小晝場の木戸で、三十二文になると夜晝とも大場が打てます。更に三十六文の木戸を取るやうになると大先生と敬ひます。先づこの邊が木戸の最高で、その上へ行つて

三年十二月の五日、淺草の宅で六十五歳を一期に亡くなりました時、死水をとつた寶井琴凌（先代馬琴の實父）に向つて、

「どうかこれを引立てやつておくれ」

と北州を託しました。琴凌は快くこれを受合ひ又、北梅の遺言によつて、岡田といふ本姓を改め小金井を姓とする事になり、小金井勝五郎になりましたから、先代馬琴翁も本名は小金井三太郎と稱した譯で、又北州の龜之助も小金井を本姓とする事にきまり、これが小金井龜之助となつた。その後琴凌は故人北梅の遺言を守り、北州を我子の如く愛育する中同門の琴櫻といふ者が来て、

「どうか北州に、北梅先生の前名の、蘆州をつがせてやつて下さい」

と頼んだ。琴凌も賛成して、

「ア、それは結構なことだ。それを龜につがせたら、臨終の際まで當人のことを氣にかけてゐた故

四十文取つた先生はたつた二人、即ち前に出た伊東燕凌と初代梅林舎南鶯の二人ぎりだつたと、以上いづれも先代馬琴翁から聞きました。こんな事は古老でなくては逆も分りません。

二代目蘆洲 (二)

この木戸銭が明治になつて一錢二厘と一錢五厘の二種になり、それから一錢八厘、二錢、二錢二厘などといふ時代が明治十年頃のこと、更に三錢五厘の事があり、次に四錢、五錢、七錢、八錢から十錢になつたのが大正の五年頃、それから十二錢、十五錢、二十錢、廿五錢、三十錢と鰻上りに高くなつて、昭和の初めの四十錢から、今日の六十錢、八十錢、一圓にもなつたのですから、昔のことを考へると大へんな違ひですが、扱その小夜講の眞打になつた蘆洲が、前座と二人位で勤め自分は三席讀みました。讀物はといふと前段が天

草軍記、中座は大勇焼山越と題し、これは清正が猫退治をするといふ變つた講釋、朝鮮で虎狩をした程の清正だもの、猫なんぞ退治するのは何でもありますまいが、いろ／＼化物が現れる珍らしい讀物、この猫退治は特に撒きピラをすると、溢れる程入りがあつたといひますから、その時分は客も茶氣があつたのだと思はれます。後席は武田上杉川中島合戦、三つとも師匠南龍ゆづりの修羅場も

のばかりでしたから、

「これではあまり變化がなからう」

といつて、琴凌が寛永御前試合や、伊賀越を教へましたが、元來伊賀越は、貞山派の讀物となつて居り、寛永十一年十一月七日、伊賀上野鍵屋が辻に於て、渡邊數馬(二十六歳) 荒木又右衛門(三十八歳) 數馬の家來川合武右衛門(三十一歳) 荒木の家來森孫右衛門(三十六歳)の一行四人が、河合又五郎(二十四) 櫻井甚左衛門(四十一) 櫻

井半兵衛(二十七) 家來溝口八右衛門外若黨四人

合計八人を對手にして復讐に及び、又五郎、甚左衛門、外一人だけが死亡、討つた方も數馬は大小十三ヶ所負傷、荒木も一ヶ所薄手孫右衛門は三日目に死亡といふ、事實はこれだけのものなので、大剛の荒木がたつた三人斬つたでは引立ちませんから、三人を倍にして六人とし、更にこれを自乗して六々三十六人とふやし、旗本方から又五郎へ護衛につけた劍客多勢の行列を向ふへ廻して、又右衛門が、剛勇をふるふといふ事に、脚色したのは初代の貞山、これが爲め大さうな講談になつて、

「一に富士、二に鷹の羽の打ちがひ、三に上野で花ぞ咲かせる」

などと、曾我や、義士傳と相並び、三大仇討の一つとはされたのでありますが、これを琴凌から教はつた蘆洲が、だん／＼手に入つて巧くなり、

いよ／＼仇討になると、

「明晩は伊賀の上野、荒木の五十八人斬りをお聞に入れる」

と觸れたものです。聽衆は驚いて、

「大さう又ふえたものだねえ」

と不審がると、蘆洲濟ましたもので、

「ナ、他の講釋師は腕が未熟だから、三十六人しか斬れないが、誰が何といつても乃公は五十八人斬つて見せる」

と言つた。まるで自分が斬るやうな口吻、餘程の變り者だつたには相違なく、こんな具合にいつも大言壯語を弄し、憎まれ口もきいたが皆それにサゲがついてゐて愛嬌があつたさうで、蘆洲が初めて晝席の眞打を初めたのが神田富松町の富松亭讀物は修羅場の間へ御前試合をはさみ、十月十一月十二月と三ヶ月を獨演で打つだけ、ズツと入りをとりましたが、十二月は年末のこと、こゝで客

を落してはと「三國妖狐傳」を昇ぎ出した。これは舊師の南龍が得意でやつたゆづり物で、蘆洲も

ピラを撒いてこれを讀めば大入受合といふ極めつき、聖天町の待乳亭でこれを演つた時には、坊さんや富士講、御嶽講などの連中が押よせ、あまりの大入で二階が落ちたといふ椿事さへあつた位、富松亭で年末の二十一日から三日間眼目の祈りをやりました。安倍の泰親が金毛九尾白面の狐を退散さす爲め、祈りを上げるといふ肝腎のところ、す。南龍がこれを讀む時は、水を浴びて身體を清め、白の行衣に鉢巻腹帯といふ、業々しいでたちでしたが、蘆洲は水こそあびないが、祈りの條へかゝると衣類の肌をぬぎ、晒布の褌袴一枚になる。つまりこれを行衣に見せた趣向、師走だといふのに玉の汗をかいたものだとあり、こんな風ですから年の瀬でも満員の入りがあつたといふ事、これも馬琴翁の物語であります、私事に關して

もこの人はいろ／＼奇行があり、講談界大紛争の時は中心人物となつて活躍した。それは又後の項で申上げることといたじませう。

柳橋と柳枝 (一)

當今でこそ、所屬の會派を異にするだけで、落語家は柳連も三遊連も一緒になりましたが、明治から大正初年(嚴密に言へば大正六年に寄席演藝會社が出来るまで)に亘る永い間、三遊と柳とはつきり別々になつて居りました。その昔話柳連の元祖になりましたのは前にもちよつと述べました如く、初代扇橋の弟子の初代柳橋であります。この初代柳橋は亭號を麗々亭柳橋と申し、芝金杉の人で、俳名は龜好と號しました。扇橋の弟子になつて初めの名を橋蝶といひ、一時師の許を退いて柳好と稱したこともありましたが、性來柳を好んだからだとの事、その後また師の許へ歸つて

柳橋と名のり、人情噺の創始者となりましたが、この柳橋が即ち柳連の開祖であります。門下に柳馬、柳朝、柳枝、柳里、柳佐、柳舍、柳太、柳治、柳花等數多の弟子があり、天保十一年四月二十一日歿、青山持法寺に葬るとのみ、傳記の細かいことは分りません。この人の門人に初代の柳枝が生まれて、亭號を春風亭と申しました。春の風に柳の枝、まことに優美な藝名であります。兩國米澤町に住み、幼名を龜吉といひ、十六の時から柳橋の弟子になつて前席を勤め、次第に巧くなるに従つて、人情噺のやり方にも、新機軸を出しましたのは、恰度講釋の馬琴が今までの棒讀を改めて、男女の聲調を使ひ分けたのと同様、柳枝もそれ迄の筋だけ運ぶ素噺を、大人は大人、小兒は小兒、聲音を分けて身振も入れて演じましたが、情態眞に迫つて妙を極め、例の九州吹戻しや、縮屋新助の三代吉殺しなど、最も得意に話したとの事、

非常に酒の好きだつた人で、醒めれば飲み、醒めれば飲み、片時も酒の氣が離れなかつたが、泥のやうに酔つて舌もつれ、歩行くことさえ出来ないうやうになりながらも、それで一度び高座へ上れば別人のやうにハツキリして、少しも正氣の時と違はなかつたといひます。本來師名をついで、二代目柳橋ともなるべき位置なのですが、春風亭柳枝といふ名の方が、自分の好みに合つてゐるからとて、終生これを名乗つてその初代になりました次第、明治三年七月十七日歿、殘念にもその行年が分りませんが、寺は麻布今井町妙緣寺に葬り(初代燕枝の日記には淺草田甫藏龍寺とあり)法號を酒遊院日酒柳枝居士と申します。戒名にまで酒といふ字が、御叮寧に二つ迄入つてゐるところ、餘程大酒家であつたものと思はれますか、この柳枝の弟子に、榮枝と傳枝がありました。勿論その他にも多勢のたのですが先づこの二人が弟子頭で、

その中の傳枝は後に初代談州樓燕枝となり、この人のことは後に述べます。兄弟子の榮枝が春風亭柳朝から更に師匠の名を相續して二代目柳枝、落語系圖を見ると「おとわ丹七」得意としてあります。本名はちよつと分りませんが、商人の出で茅場町に住み、俳號を簗守庵と呼ぶ江戸派の俳人でありました。されば二代目柳枝となるに及んで、これに因みて俳號を二柳と稱しましたが、従つて何事にも心得があり、その常識が邪魔をして高座には艶が乏しく陰氣だつたさうですが、その代り一座の眞打らしき風格は立派にあつたさうで、この柳枝につきましては、いろ／＼面白い逸話があります。その昔はよくこの、悪摺といふものが行はれたもので、今なら新聞や雑誌に漫畫で人の似顔を描き、悪口をいつたりするやうなもの、昔はそんな機關がないから、わざ／＼獨立の印刷物にして刊行した。これを悪摺と稱へましたが、ある

年の暮に、この悪摺で見立番附が出ました中に、この二代目柳枝も悪口をいはれた一人で「鶴の眞似をする鳥」と書いてありました。弟子たちが、「オイ／＼こんなものが出たぜ」「アツ、うちの師匠の事も出てゐらア」「誰がこんな事を書いたのか」「引張合つて見てゐるところへ、外出中の柳枝が歸宅しましたので、弟子達は慌て、隠しましたが間に合ひません。

「何だ／＼、何を見てゐたのだ」

「イエ何その、つまらないもので」

「マアい／＼からお見せ」

と申します。仕方がないからそれへ出すと、その悪摺を手に取り上げて、苦笑ひしながら見てゐた二柳が、

「ちよいと誰か、柁の紙をどつさり買つておゐてそれから朱墨を濃くすつておくれ」

と言ひつけました。何をするのかと思つたが、弟子たちは命ぜられる儘。柁の紙を買つて来て、朱墨の用意をいたしますと、柳枝は筆をとつて、朱墨で赤い丸を書き、その傍へ筆蹟美はしく、

「鶴に眞似の出来ぬ鳥の切日の出」

といふ句を認め「相變らず御最眞願ひ上ます」と添書して、これを客先へすつと配りました。悪摺の文句を知つてゐた客たちは、アツとばかりに柳枝の頓才に感服し、これが人氣の基になりまして翌年の初席は、頗る大入を取つたといふ。これも逸話の一つであります。まだ／＼おあとに大へんなのが控へて居ります。

柳橋と柳枝 (二)

小石川音羽一丁目江戸川橋の袂に、目白亭といふ寄席がありました。明治の末年に江戸川亭と改名、昭和の初め頃迄残り、講談會館などと名を替

へ、間もなく轉業しましたが、江戸時代から在つたのですから由緒の古い席として知られてゐました。その目白亭へ看板をあげましたのが三代目柳橋、これは初め、初代瀧川鯉かんの弟子で鯉之助から鯉橋と改め、又桃流となり、嘉永五年三代目をついで麗々亭柳橋となつた。當時若手の眞打であります。本名齋藤文吉と申し、この人の事は後にも申し上げますが、この柳橋が眞打でスケに前申した先輩の二代目柳枝を頼みました。ところが柳橋は年は若し、様子の好い男で、今賣出しの人氣者と來てゐる。従つて相當に艶つばい噂もありました中に、吉原某樓の遊女にふかくも馴染み、夢中になつて通つてゐる最中、双方とも大變な熱度で、仲間でも誰知らぬ者の無い程評判が立ちました。その位ですから柳橋は毎夜々々、寄席の打出しを待ちかねて、勿論圓タクもメータクもない昔のこと、三枚の早駕を飛ばしては、御苦勞様に

も北へ急がせてゐたのですが、場所も遠い江戸川の目白亭から、吉原まで行くのは容易ではありません。然し眞打だから最後の高座を勤めなくてはならないが、それからでは彼方へ着くのがますます遅くなる。さりとて看板の責任も大切、ア、どうしやう困つたな、心は二つ身は一つ、一刻も早く花魁のところへ、儘になるなら飛んでも行きたい、いつそ羽根が欲しい、翼が欲しいと俊寛の芝居へ出て來る千鳥みたいな心持になつて、ヤキモキしてゐるところへ入つて來たのが、即ちスケの二代目柳枝でありました。柳橋は渡りに船と救はれたやうな心地で、

「柳枝師匠濟みません。今夜は少し用ありで、さゝを早く歸りたいんですが、どうせう私を早く上げて下さる譯には行きませうまいか」

と拜まぬばかりに頼みました。柳枝は早くもそれと察したから笑みをふくみまして、

「ア、いゝとも、お前さんさえ承知なら、私が代りにトリ（真打のこと）を勤めて上げやう。中入前へでも上つて、早く行きなされるがいゝ」

と手軽く承諾しましたから柳橋は大喜び、

「師匠有がとうございます。御親切忘れません」

と現金なもので急に元氣づきました。柳枝は内心おかしくてたまりません。

（奴さん、吉原へ行くので氣が急いでゐるのだな、若い者だから無理はないが、一旦喜ばせて置いてあとで苛めて困るところを見てやらう）

といふ考へ、柳橋はそんな事とも知らず、イン／＼と中入前の高座へ上り、

「まことにお客様相済みません。本来は私が、一番しまゐり上るべきでございますが、少々野暮用の都合で、順を違へさせていただきます。その代り今晚は、おあとで柳枝師匠が充分に、御機嫌を伺ふこととなつて居りますゆえ、どうぞ御時刻ま

では御ゆつくりとお遊びを……」

とこれから本文へ入つて一席を了り、

（ヤレ有がたい、これで役目も済んだ。今夜は早くあいつの顔が見られるぞ）

と心嬉しく高座を下り、挨拶もそこ／＼に出かけやうとする時柳枝が、

「オツと待つた柳橋さん、今樂屋へ席主が来てね今晚は初日の御祝儀として、樂屋へメンダイを入れます。本當は昨晚差上げるべでしたが、蕎麥屋が休んだので今晚になりました。どうぞ皆さんで召上つて下さいといふ口上、他ならぬ縁喜物だから、これはどうしても真打の役として先づお前さんが一口でも、食べて行かなくちやアいけないよ」

と引止めました。メンダイといふのは蕎麥の事、メンダイをノセるといふと、蕎麥を食べるといふ符牒になります。又、長い事もメンダイと申し、

と中賣からの合圖だ。そこで柳枝が拍手に迎へられて高座へ上りました。

柳橋と柳枝 (三)

寄席のお中入といふもの、出演者にとつては有つても無くても同じですが、お客と席主にはこれがなくては困ります。寺門靜軒の江戸繁昌記には寄席のことを誌した中に、

「コレヲ一齣トシ、コノ時ヲ名ヅケテ中入ト曰フコ、ニ於テカ、便ヲ忍ベル者ハ厠ニユキ、烟ヲ吸フ者ハ火ヲ呼ビ、渴ケル者ハ茶ヲ令シ、飢フル者ハ菓ヲ命ズ」云々。

とやかましい文章で書いてありますが、ちよつと息をついて用をたしたり、煙草を吸つたりお茶をのみお菓子をつまむ。寄席ではその茶や菓子を賣るのが、副收入の一つになつてゐるので、中入がなくては營業になりませんが、賣るだけ賣

「今夜はメンダイにたのむよ」

といふと、今晚の高座は長くやつてくれといふ事になります。これに反して短かいことはアシと申します。浪花潟矩かき芦の節の間も、などいふところからその符牒が出来たのでせう、さりとは優雅なことで、そのメンダイが今に来るから、縁喜物ゆえ真打が一口でもたべなくてはいけないと、先輩の柳枝に言はれて見れば、それでもと出て行く譯には参りません。柳橋は弱るまいことか、ベツを搔かぬばかりになつて、此上は早くそのお蕎麥が来ればいゝと、押立て尻をして待つてゐましたが、席の方では打出しの時刻を見はからつて持込むやうに注文したのだからなか／＼誂へは持つて来ません。その中に、

「へエお待遠さま」

といふ聲が聞へたから、ア、蕎麥かと思つたらさうぢやアない。中入がモウよろしうございます

つてしまつて、もう買ふ人もないと分ると、中賣の者から樂屋へ向つて、「お待遠さま」と聲をかけるのであります。そこでテレンコテン／＼とシヤギリを入れ、上りました柳枝がまくらの小喃から本文へ入り、話は段々進行してゆきますが問題の蕎麥はまだ来ません。柳橋は氣が氣でなく、

「何だえ、これぢやア早く上げて貰つたつて何にもならない、冗談ぢやア無いや」

と大ボヤキ、そこへやうやく、お待兼ねの蕎麥がくり込んで来たので、柳橋は箸をとる間ももどかしく、大急ぎでスル／＼と、ほんの一口すゝり込むと、

「サアもうこれでいよ」

と立上りました。そこへ柳枝も下りて来ましたつまり時刻が来てモウ打出しになつちましたのであります。柳橋が、

「アリヤツ、もうそんな時刻になつたのか」

と泣かぬばかり、柳枝はニヤ／＼笑つて居ります。實のところ、蕎麥をわざとこんなに遅く持込ませましたのも、柳枝の調伏だったのであります。柳橋はモウ、逃げ出すやうに樂屋を出で、駕籠を飛ばして吉原へ急がせましたが、心はモウ先方へ飛んでゐます。

(ア、どうしてこんなに遅かつたのよと、定めし怨みを言はれるだらうな。何と言譯をしたものか今夜のいきさつを話したつて、嘘よく、そんなことを言つて、どこかよそへ廻つたんでせう。にくらしい、か何かいつつねられるかな、ウフ、どうもやり切れぬえ)

いゝ氣なもので、駕籠に揺られながら、口舌の稽古をして居りました折も折、その柳橋の乗りました駕籠が、恰度小石川の水戸邸前へ差かゝたその途端、突然百雷の落つるか如き、物凄い響きが轟いたかと思ふ間もなく、ドシューとばかりに揺

り上げられ、大地激しく震動して、駕夫も足をさられ、スツテンコロリと打倒れる。はづみに乗つてゐた柳橋も、駕籠からモロに放り出されたが船へでも乗つてゐるかの如く、起上ることも歩く事も出来ない。これぞ安政三年十月二日夜の大地震で、すぐ目の前の水戸様御邸内では、有名な藤田東湖先生始め、多くの震死者を出したその同時でありました。實にこの安政の大地震は、大正十二年のそれよりも、被害の程度が激烈だつたといふ位、柳橋は思ひもかけず、この激震に出つくわして、生きた心地もしませんでした。四邊は忽ち黑暗々としてその中で建物の倒るゝ音崩るゝ音間もなく猛火は八方に起つて、阿鼻叫喚の巷となつた江戸全市は、筆紙に盡せぬ大混乱、吉原の遊里も地震と火事とで全滅したのであります。人畜の死傷數を知らず、柳橋のお馴染もあはれや御多聞に洩れず悲惨な最期を遂げたことが分りました

が、もしこの晩柳橋が、豫定の如く目白亭の中入前を済ましてすぐに同所へくり込んでゐたとしたら、充分この時刻には先方へついてゐた筈でありますから、さうなつたら確かに、安穩ではゐられなかつたに相違ありません。勿論倒壊した妓樓の中で、目も當てられぬ往生振りを見せた事だらうと考へ及んだ時に柳橋は、總身を粟立て戦慄いたしました。この九死一生の大危難を、無事に助かつたも全く二代目柳枝が、蕎麥の計略で引止めてくれたからこそ、命拾ひが出来たのだといふ事を思ひ當ると柳橋は、我を忘れて目白亭の方へ向ひ両手を合せずにはゐられませんでした。翌日は早々に柳枝のところへ飛んで行き、

「師匠、お障りはありませんでしたか」

「オウ柳橋さん、有がとう／＼、貴方もお怪我がなくて何よりだつた」

と互ひに無事を祝した上、柳橋は昨夜の感激を

告げて再生の恩を謝し、

「これから先きの私の命は、全く貴方から頂いたやうなもので、この御恩は忘れませんよ」

と申しましたが、爾來柳橋は神棚に柳枝の名を貼り、朝夕禮拜したと傳へられます。俳號を簗守庵二柳と申したこの柳枝が、この安政大地震のときに詠みましたのが、

「早冬になるや柱の割るゝ音」

今一つは、

「埋火や、かきならしては獨り言」

まことに焼跡に彷徨する罹災者の群が見えるやうであります。

むらく異變 (二)

さて又この二柳について、今一つどえらいお話がありますのは、柳枝をひるきにした客の中に、津の國屋藤兵衛といふ、有福な商人がありました

らくでありました。

(オヤ／＼大さう氣張つたものだが、どういふ譯だらう)

と不審に思つてゐると、やがてそのむらくが挨拶に來まして、

「折入つて貴方にお願ひがあります。どうぞ聞き届けて頂きたい」

といひますから柳枝も、

「改まつて一體何事でせうか」
聞き返しましたところ、

「されば他でもありませんが、大通と評判の津藤大盡、當時相當の藝人で、あの方に最眞を受けなものは無いといふ位、それなのに私は、運わるく一度も大盡に呼ばれた事がありません。まことに外聞も悪く、残念でなりません。貴方は津藤さんには大の懇意、ぜひ一度でいゝから私を呼んで下さるやう、どうぞお取持ちを願ひたい」

これは幕末から明治の初年にかけて、通客の聞へを取り、一ト口に津藤と呼ばれたお大盡で、一代を紀文型の豪奢に送り、晩年も亦紀文の末路と同様甚だ氣の毒な窮狀で終つた人でありましたが、その最後まで友情を忘れず、親切に交際したのは、歌舞伎の名作者河竹黙阿彌だけで、この津藤は黙阿彌と關係が淺くない爲め、黙阿彌傳には津藤のことが詳しく記されて居りますから、どなたもよく御承知と思はれますが、その津藤の全盛時代には毎日のやうに、いろ／＼の諸藝人が出入りをして居りました中で、柳枝は殊に津藤のお氣に入りであつたらしく、何か有るとは必らず柳枝が津藤の家へ呼ばれ、催しの餘興を勤めて居りました。するとある日のこと柳枝のところへ、酒樽の賜り物が届きました。物價の安い昔にしても、酒樽一丁の賜り物は莫大なこと、一體誰がくれたのだらうと思ふと、この賜り主は、仲間の三代目朝寝坊む

といふ依頼でありました。成程言はれて見れば

津藤大盡は大正の藝人を出入りさせてゐるのにこのむらくだけは一度も呼んだ事がない。當人のいふのもつともだと思つたから、

「よろしうございます。私からよくお大盡へお話をして置ませう」

受合つてむらくを歸し、その後津藤に逢ひました時、

「貴方はどうしてむらくを呼んでやらないのですか」

と聞くと、

「イヤ別に、どうといふ事はないが、私は何だかあの人の藝を好かないから、ついそれが爲めにね」といふ津藤の返事、

「それでは私が困りますから、一度でよろしうございます故、呼んでやつて下さる」

と柳枝からのみました。

「それ程お前がいふのなら呼んでやつてもよろしいが、その代りたつた一度だよ」

と大盡も皮肉です。柳枝の顔を立てたど一回むらくを呼びました。ところが、一度では濟まなかつたといふのは、稻荷様の餘興に呼ばれたむらくが、當日は莫大な品物をお供物として贈り、一生懸命に座敷をつとめた上、翌日はわざ／＼昨日の禮に、津藤のところへ出かけまして、將を射んと欲せば先づ馬を射よといふ筆法なんでせう。夫を動かすのは妻君の方だからといふので、津藤の内儀へ深く取入り、

「私も藝人冥利、一度はこちら様へ伺つてお座敷を勤めたいものだ、かねて念願して居りましたが、その一心が届いて昨日はお招きを頂き、これで私も面目が立ちましてございます。有がとう存じました」

と、天へも上る喜びを示しました。妻君はさす

が女氣の、一時にむらくへ同情いたし、

「何だか私、可哀想になりましたよ。どうかこの後も、あの人をちよい／＼呼んで上げて下さいよ」

と良人へ勧め、妻女ばかりでく家中一同から頼みました。餘程運動したものに相違ありません。多勢に無勢で、津藤もとう／＼陥落してしまひ、それからは大のむらく最眞になり、柳枝の方は、庇を貸して主屋を取られた形になりました。この思ひ切つた運動でも分ります通り、このむらくといふ人は、なか／＼の霸氣に富んだ野心家であつたと見え、後年には大へんな事件を惹起しました。元來このむらくは、本名を榊原謙三郎といつて、出は旗本の武士でありました。兩刀をたばさむ身が放蕩から墮落して、好きな道の落語家を志し、二代目可樂の養子になつて、三代目翁家さん馬を名乗り、それから更に三代目むらくとなつたのです。が、何しろ育ちが育ちだけに、背かぬ氣の不敵

な魂があり、兎に角三代目むらくになる程ゆえ、藝も眞打だけの力量はあつたものに違ひありません。

むらく異變 (二)

その他に、この津藤へ取入つたやうな筆法で、外交的世才にも長じてゐたせうから、それやこれやで、看板を背負ふ位置にも上つたでありませうが、その後、丸屋宗兵衛といふ町家の婿になり、それも間もなく離縁となつて、又も落語界へ戻り今度は四代目三笑亭可樂になりました。而もこの時が恰度幕末で、天下の風雪頗る險惡な折柄、三百年の太平打續いた徳川家も、形勢甚だ怪しくなつて來ましたので、そこは落語家になつても以前は武家の榊原謙三郎、持つて生れた氣象から、ちつとしてゐられなくなりました。それも勤王の方面に、盡力したのならば結構でしたが、勿論日本

人として、順逆の道理を辨へぬ筈はなくとも、人間の感情どうしても、永らくの徳川家のことが頭にありますから、官軍といふよりも、薩長の兵士が錦裂を肩に、威張り返つてゐる事に反感が起つて、どうにもたまらなくなつたのでありませう。彰義隊などは別の行動をとり、謙三郎一個の力で薩長の奴等をどえらい目に逢はせ、天下を驚かせやうといふ陰謀を企てたのだから穩かでありません。それがどういふ計畫であつたのか、詳かに傳はつては居りませんが、浪士の面々と結托し、地雷火を伏せて江戸中を火にするやうな仕掛を企んだとも申します。同じ幕臣でも、勝先生山岡先生のやうに、どうかして江戸を兵火の難から救ひ度いと、苦心奔走したえらい人もあつたのに、如何に薩長軍がしやくにさわつたからとて、江戸市を火にするやうな危険な計畫を企てる奴もないものでございます。人間の出來不出來、腹の大小、

智慧の深淺、この邊でよく分ると申すもので、幸ひにもこの陰謀が事前に發覺、謙三郎は身邊が危ふくなつたので、急いで地方へ逃げ出しました。それも四代目可樂の名で興業しては、すぐに捕まつてしまふから、五りん梅枝の計らひで、瀧川鯉かんといふ看板で地方廻りをした。田舎へ行けば本名より、大きな看板を詐稱して廻る。インチキも多いのが通例でありますのに、心がらとは言ひながら、四代目可樂ともあらうものが、ぐつと下の名の、鯉かんで興行して歩くとは、これも世を忍ぶ身の爲めで據るありません。これには今申した五りんの梅枝が、可樂に平素世話になつた恩返しとして、いろ／＼蔭になつて心配したのであります。ついでながら五りんのことを、ちよつと説明いたしますが、これは藝人と寄席との中間に立つて、その斡旋をする世話人の事であります。藝人は一體に自信が強いもの、といふと體裁はいゝ

が、實は自惚れがつよい天狗揃ひ慢心揃ひですから、大ていは自分を實質以上高く評價して居ります。寄席の方は、一般の客の人氣や好みをよく知つてゐますから、評判のいゝものをかけたがる。そこに藝人の方と、寄席の方との間に、意見の開きが十分あるのです。それを双方直接につき合せた日には衝突は免れません。どんな喧嘩になるか分らない。そこを間に五りんといふものがあつて、双方へうまい事を言つて、腹を立たせぬやうに圓満に話をまとめ、妥協をさせて興行の出来るやうに圖らふ、それにはなか／＼、頭も掛引もあり相當苦勞もしたものであります。その代りその興行の期間中、毎日、客一人についていくらといふ收入を貰ひます。それが大體に於て、五厘といふ原価になつてゐたから扱こそ五りんといふ名稱が出来たのであります。席数が多ければ、五厘だつて莫迦には出来ません。その上藝人の方

からは特別の心附もあり、収益は多かつたものであります。が當今は番頭若しくは事務員制度になつて、五りんといふ職業はなくなつたと聞いて居ります。扱その梅枝といふ五りんの世話で、地方廻りをしてゐた可樂が、その儘潛行を續けてゐたら或はどうだつたか知れませんが、大膽にも江戸へ舞戻つて、花川戸の某家へ隠れてゐたところ、ある夜附近に火事がありました。例によつて野次馬がドン／＼かけて行く、恰度日のくね方で、日中は外出もせず潛伏してゐた可樂が大い大丈夫だらうと戶外へ出て、火事の方を見てゐる所へ、走つて來た岡つ引がチラとその顔を見たから堪りません。忽ち多勢の捕方が向ひ、劍劇式の立廻りがあったかどうかそこは分りませんが、榊原謙三郎遂に御用になり、吟味中獄死を遂げたのが、明治二年九月十日のこと、まことに數奇な一生でありました。寺は分りませんが、法名は廣柳院松譽壽教

居士としてあります。二代目柳枝の話から、大へんな大衆文學的事件に引移りましたが、その柳枝はこの事件より數年の後、明治七年十月十二日、五十三歳を以て歿し、本所小梅上心寺に葬り、法號を全柳院量枝居士と申します。「今さめる酒がまことか月の雨」といふのが、その辭世でありました。門人に、小枝、枝之助、桃枝、等があり、小枝は後に二代目隅田川馬石となり、桃枝は二代目柳朝となつたとしてあります。

典山と貞山 (一)

天保の八年六月十五日から、兩國の回向院に京都嵯峨の天龍寺より、御本尊釋迦牟尼如來の出現帳がありまして、善男善女の參詣で群集雜沓、これを當込んで同月二十日から前申した兩國橋南詰の長左衛門の席へ出演したのが、前申した名人の

桃林亭東玉で、

「釋迦八相記、大阪下り太琉改め東玉」

と看板を出し、木戸も大破格の四十文を取りました。これが當つて初日以來毎日客止めの大盛況をえらい評判でございます。恰度この時、初代の錦上齊典山（金上齊と書きしもあり）が今川橋の寄席染川へかゝつて居りましたが、あまり東玉の評判が高いので、それまでまだ東玉の講釋を聞いたことの無い典山が、どんなものかとある日のこと染川の席主吉兵衛をさそひ、弟子一人をつれて三人連れ、長左衛門の席へ聞きに行きましたが、成程満場立錐の餘地もない程一杯入つて居ります。典山の一行はその中へ交つて聞いて居りますと、やがて中入が濟んで、いよ／＼これから眞打の東玉が上る事になり、悠然として高座へ現れると、待ち構へた聴衆は、拍手喝采してこれを迎へました。一禮した東玉がポーンと入れた張扇、すると

典山が、

「サア出やうよ」

と同行の吉兵衛を促して立上つたから、まだ一言も聞かぬ中、どうした事かと吉兵衛は怪訝な顔をしたが、典山は先きへ立つてズン／＼出て行く吉兵衛には譯が分りませんが、弟子と一緒に歩いて行くと、席を出た典山が兩國橋を半分ばかり渡りかけた時に、ホツと溜息をついて吉兵衛を振り返り、

「東玉は名人だなア」

と歎聲を洩らしました。吉兵衛ます／＼不審に思ひまして、

「先生どうしてそれが分ります。一言も東玉の講釋を聞かないで、名人か下手か分る譯がないぢやアありませんか」

と尋ねたところ、典山が苦笑ひをして、
「それは聞かなくとも分つてゐるよ。考へていら

ん。あれだけの廣い席上に、ワンと詰つてゐる聴衆の数は、六百人からあつたらう。その多勢も、東玉が出て来てポーンと張扇を入れると、あれ程ザワ／＼ガヤ／＼してゐた聴衆が、一度に水を打つたやう、シーンとして静かになつた。これは東玉が、あの多勢の聴客の魂を、たつた一人で引擱んでゐるからだ。これは名人でなくては出来ないところ、藝を聞かなくとも、東玉の巧いのはそれで分つた」

と申しましたのには、吉兵衛も門人も感心をしたとしてありますが、名人に非れば名人の至藝は分らず、たつた一ト目で東玉の非凡を見ぬいた典山も亦、名人だつたに違ひありません。一説には貞山派の讀物たる、伊賀越仇討の講談をまとめたのはこの人だと申しますが、切れ場になるとちよいと口を曲げる癖のあつた人ださうで、この初代典山について、馬琴翁から聞いた傳説があります

いささかナンセンスながら、其儘お取次をいたしますが、元來典山は旅行を好んだ人で、典山の旅日記といへば有名なもの、ある時、志州鳥羽沖を通りますと、どうした事か乗合の船が動かなくなつた。別に難風といふでもないから、乗合の連中には氣がつかかなかつたが、船頭は扱はと青くなり油汗をたらしてやつたが動きません。電車なら停電といふこともあるが、海に浮んでゐる船の、動かなくなると思はれず、サアかうなると乗合が騒ぎ出し、どうした事かと心配する。船頭が氣の毒さうな顔をして大聲あげ、

「どうも客人これは飛んだ事になつた。滅多には無え事だが、船には時々かういふ不思議がある。乗合の中で一人、見込まれた者がゐるに違ひない氣の毒だがその見込まれた人が、海へ飛び込んでくれないことには、いつ迄経つてもこの船は動かぬえぞ。殊によつたら船ごと引くり返されてしま

ふかも分らない。さうなつては大變だから、一同の爲めだによつて、見込まれた人はあきらめて死んでおくんなさい」

といつた。こんな事は勿論何か迷信でありませうがそこは昔のこと、船頭がかう言ひ出したので乗合一同も顔と顔を見合せ、唯愕然とするばかり「いつたいその、見込まれた者はどこで分るんだ」と聞いたところ船頭も、

「何でも構はない、各自に持ち物を、海へ放り込んで見て下せえ。品物が沈んだら、その持主が見込まれた事になるんだ」

といふので、慌てた男が急いで腰の矢立をぬくとドボン、

「サア大へんだ。乃公が見込まれたのか」と青くなる。此最中だが船頭も吹出して、

「冗談ぢやアねえ、鐵物の矢立なら、見込まれなくとも沈むのは當り前、さうぢやアない、沈みさ

うもない軽い物を投げて試めすのだよ」と申しました。

典山と貞山 (二)

そこで乗合一同が、各自に懐中の鼻紙だとか、手拭だとかいふものを投込みましたが、一品も沈みません。波の間に流れて行きます。この時に典山が、

(世の中には不思議な言傳へもあるもの)

と思ひながら、自分も所持して居りました一筋の手拭を、フワリと海中へ投げましたところは如何に、その手拭が見る／＼中に、スツとまるで何かに吸はれる如く、忽ち海中深く沈んで行く様子、典山も驚きましたが、乗合も今更のやうに典山の顔を見る。船頭が、

「ヤア見込まれたのはお前さんだ。外の客人一同の爲めだから、お前さんには氣の毒だが、どうか

飛込んでおくんなさい」

とといふので、典山も大へんな事になればなるもの、人間の災難はどこにあるか分らないと思ひましたが、事ここに至つてはどうにも仕方がありません。そこで度胸を定めて「イヤ據ろございませぬ。さういふ事なら御一同の爲め、私も身を海神の生贄といたしませうが、臨終の際に一つのお願ひがあります。何と聞いては下さらぬかと折入つて相談をかけました。

「臨終の願ひとはどんなことか、定めし故郷の家族に、御遺言でもおありだらうから、それはどうぞ御遠慮なく言つて下さる」

と船頭が言へば、他の乗合も氣の毒がつて、中にはモウ涙ぐんでゐる人さえあります。典山が、「イヤ決して何も此期に及んで、家族に遺言もございせんが、實は何を隠さう、私は天下の御記録読み、即ち軍談師でござります。此世の名残

に此船中で一席の讀切をしてそれから死に度いと存じますが、如何でございませう」

と船中を見廻したところ、一同も、「如何にもごもつとも、さういふ事なら一席讀んで下さい。聽聞ませう」

と賛成しましたので、典山が携へた荷物の中から帛紗に包んだ種本や扇子を取出したが元來この人は、張扇といふものを使ひません。小形の拍子木を使ひ始めたのは、この典山が元祖でござります。これから舷を机に代え、此世の名残り身の名残り、一世代の意氣をこめまして、滔々と讀始めましたのが例の伊賀越、荒木又右衛門武勇の一席でありました。その音吐朗々として、齒切れのいゝ名調子が天にも響いて澄み渡り、水や空なる志摩の浦、ところは鳥羽の沖合に、海若風伯も聲を潜めて、耳をすますかと怪まれ、乗合一同感心たえて恍惚と聞いて居ります中に、講談はます

く佳境に進む。すると不思議や今まで磐石の如く、あとへも先きへも動かなくなつたその船が、スル／＼と進み出しました。船頭も気がついて、船を押して見ると何事もなく、ズン／＼と動きまゐります。モウ大丈夫と航海を続け、船は無事に港へ入りましたが、これが爲めに典山は、九死の中に一生を得まして、大難を免れることが出来た。これは全く典山の妙技に海神も感應したものであらうと言ひ傳へ大さうな評判となりました。嘘のやうだがこれは事實と、以上が馬琴翁から聞いた儘であります。これを種にしたらしい話が落語にもあり、船の動がなくなつたのは、船底に典山を見込んで狙つた鰐鮫がくつついてゐたからで、飛び込んだら吞まうと待つてゐたら、その中に船の上では、講釋が始まつて、舷を叩く拍子木の音が水へ響く。何思つたか鮫がびつくりして、ドン／＼海底へ逃げて来た。仲間の鮫が不審に思つて、折

角見込んだものをどうして見逃したのだ。なぜあの講釋師を吞まかつたのだと聞くと、逃げて来た鮫が、何だ、あれは講釋師か、おれはあまりトン／＼叩くから、蒲鉾屋かと思つたといふサゲがついてゐる。成程鮫に蒲鉾屋は大敵に違ひありません。この典山の弟子が、有名な初代の貞山、それ故、典山といふ名と貞山といふ名とは、代々師弟の關係になつて居るのであります。初代貞山は一龍齋と號し、人呼んで大貞山と申しました。讀物は伊達評定を得意とし、伊達政宗公が獨眼龍と稱せられて隻眼でありましたやうに、貞山も隻眼だつたので、政宗公の法號貞山院殿に因んで、貞山と號したのだといひます。伊達ばかりでなく伊賀越も勿論得意に讀み、荒木又右衛門の奉書試合例の眞劍白刃取り極意のところを、特に柳生家から好まれて演じ、その眞相に就ても同家から教へを受けましたので、光榮に感激した貞山は、眞劍

白刃取りの幻妙を、手にも取られぬ水の月になぞらえ、扱こそ「伊賀の水月」と命題したのが、この切代貞山だつたと、これは現在の貞山が申しました。大さう雷嫌ひな人だつたさうで、ある夏のこと銀座の夜講を終つて門人の貞三を連れ、中橋の自宅へ歸らうとしたところ、京橋手前から俄の雷鳴、これが段々激しくなつて、大夕立が襲來した。大貞山内心怖くて／＼たまらないのですが、弟子を連れてゐる手前、大看板の先生ともあらうものがと我慢をした。

典山と貞山 (三)

貞三の方は青くなつて、オド／＼してゐるから貞山はわざと落つき拂ひ、貞三に持たせた合羽を受取り、悠々と單衣の上から羽織りまして蛇の目の傘をさし、鉢木の謡か何かを小音にやりながら参ります中にすぐ近くへ落雷したものと見えま

して雷光もろとも激しい轟響、今までこらえてゐた貞山も、何かはたまらうワツとばかり、夢中で我家へかけ込みましたが、女房も娘も女中も皆な雷を怖がつて、蚊帳をつり線香を立て、蒲團をかぶつて桑原々々と突伏して居ります。これを見るに貞山わざと附景氣に、
「何でえ、弱蟲が揃つてゐやがる。雷なんてものは陽氣の加減で鳴るものだよ、鬼が太鼓を背負つて駆け廻る。繪そら事を眞に受けやがつて、どいつもこいつもぬくちのねえさまだ。乃公なんぞを見る、怖くとも何とも思やアしねえ」と一人でタンカを切つてゐる中に、雨もやみ雷も遠くなつて月さへ顔を出しました。やつと安心したのか女中が先づゴソ／＼と蚊帳を這ひ出し「ア、怖かつたこと、どうも怖ろしい雷様でございました。オヤ旦那様お歸り遊ばせ」と行燈をかき立てましたが、貞山の様子を見る

とブーッと吹出し、臺所へかけ込んで板の間へこ
ろけて笑つて居りますから、

「エ、いけ騒々しい、何を笑やがる。仰山な奴だ
静かにしろよ」

と貞山は叱りましたが、女中の方は笑ひが止ま
らず、

「ア、苦しい、それでも旦那さまが」

と指さしをしては又笑ひこけて居ります。女房
も娘も何事かと蚊帳を出て来まして、これも腹を
抱へましたのは、剛儀に威張つてゐた貞山が、ズ
ブ濡れになつた傘をしつかり抱え、下駄をはいた
儘座布団の上へ座つて居ります。四邊は一面水だ
らけ泥だらけ、貞山も初めて心づき、慌てて下駄
をぬぎ傘を放り出して、

「叱ーッ、貞三の歸つて来ねえ中に、早く〜片
づけてしまへ」
と言つたなどの笑話があります。一體が粗忽の

質だつたと見え、馬琴翁の話によると、義士傳の
中、中山安兵衛高田の馬場のかけつけを読み、安
兵衛が勇を振つて村上兄弟の門人たちを、片つ端
から斬倒す條で、

「棄置きがたしと此方の幕張より、立現れたる中
津川祐範、卑怯にも安兵衛の、後ろへ廻つてだし
ぬけに、横に拂つた大長刀、エイッとはかり安兵
衛の首を、中天遙かに打上げたり……」

とハヅミに乗つて口をさらしちまつた。さすが
の大貞山も、これは失敗つたと思つたが今更どう
する事も出来ません。そこで、據なく、
「どうなりますか、繼ぎは明晩」
とそこを切れ場にして打出しました。聴衆一同
どうもびつくりして、

「安兵衛が首を斬られちまつたが、あれでは叔父
の、萱野六郎左衛門の仇を一體誰が打つのだらう」
と不審がり、これが評判になつて翌晩は一層の

ところが大家だ」

入りがありました、貞山先生のんきなもので、悠
々と高座へ上り、前講も昨夜の讀みつき、お家
の藝の伊賀の水月、中入りが濟んでいよ〜後席
の銘々傳へかゝつた。

(サアこゝだ)

と一同片唾をのんで耳をすますと、貞山は落つ
いたもので、

「エ、昨夜は祐範が、安兵衛の首を中天へ打上げ
たところでお別れにいたしました、安兵衛が斬
られては仇が討てない。なか〜以て祐範如きに
討たれるやうな安兵衛ではありません。後ろに眼
がある譯ではないが、此時遅く彼時早く、ヒラリ
體をかわしたかと思ふと、横に拂つた一文字、中
天へ飛んだのは祐範の首で、その早業は目にも止
まらず、實にえらいもので……」

と胡麻化した。聴衆はアツと驚いて、
「うまくお茶を濁したが、さすがにその動じない

ところが大家だ」

と評判したと申します。この初代貞山は、安政
二年九月二日歿し、寺は淺草龍寶寺々中西光院で
あります。そしてこの初代貞山に、眞龍齋貞水と
いふ弟子があり、これが貞水の初代で、本名杉江
某といふ御家人の出でありましたが、矢の倉に住
んで居りまして、後に師名をつぎ、二代目貞山に
なりましたから、仲間では、矢の倉の貞水貞山と
呼びました。名人伯圓が口を極めて推賞したとい
ふ程巧かつた人で、黒手組助六のやうな世話講談
に眞似の出来ぬ味があつたと傳へます。明治七年
三月七日三十六の若さで歿したは惜しい事、淺草
法恩寺地中專念寺に葬り、法號は釋妙證信士と申
します。この人の弟に巴水から二代目貞水、更に
貞林から二代目典山となつた人が居り、人呼んで
鼻かけ典山、世話物が得意で簡明な讀口、引窓が
つたり烏がアの一句で夜のあけた狀を盡すといふ

具合の、氣の利いた藝風だつたと申します。

典山と貞山 (四)

さて二代目貞山の弟子に、本名を内山孝七(孝吉とも傳ふ)といふ人があり、初めは前に出ました伊東潮花の弟子となつて花林と申しましたが、「お前はとも見込がないから、今の中に何か他の業に轉じた方がよからう」

と斷られました。情ない宣告をされたものであります。孝七は志を挫かず却つて此一言に發奮し、貞山の門へ轉じて技を磨きましたので、次第にぐんぐん上達し、貞吉といふ藝名も、人に知られるやうになつた。これが貞吉といふ名の初代であります。そして師の亡くなつた後、その名を相續して三代目貞山、押しも押されぬ大看板になつた。この三代目貞山は、おでこで大頭なところから、頼朝公といふ綽名をつけられたさうです。

が、まことに綺麗な讀口で、聴衆を引しめる呼吸が巧く、伊達評定、伊賀の水月、石山軍記、黒田騒動、大久保武藏鎧或は修羅場の九州征伐など、さすがに洗煉されたもので、とりわけ、義士傳を得意とし、大石内藏助を、日本一の大忠臣と信敬しまして講談中でも、決して呼すてにいたしません。内藏様がくくと辯じ、殊に城渡しの條などを讀みますと、

「實に内藏様が……この時の御胸中……」

と、胸を押へてホロリとなり、

「到底我々に分るものでありません」

といふ呼吸など、聴衆を泣かせたものだつたと言ひます。その義士銘々傳の中でも、片岡源五右衛門の忠僕元助の傳と來た日には、十八番の讀物となつて居りました。この主人にしてこの僕あり元助などは天晴れな精神で、主人思ひの元助の赤誠が、一言一句に溢れまして、三代目貞山の此話

を聴くと、聴衆いづれも感に堪へ、泣かぬものとはなかつた位、貞山どこへ行つても元助をやれと好まれるものだから、多くの席を駈持して歩く中には、こゝで昨日何を讀んだかといふ記憶が分らなくなつてしまひ、ある時深川の廣川亭で、晝席に三日つゞけて同じ元助を讀んだ。毎日來る定連が、二日目には變な顔をしただけでしたが、三日目にはたまりかねて、

「先生、いつ聞いてもお前さんの元助は面白くて結構だが、三日つゞけて同じ物を讀むのは、何か仔細があるのですか。今年元助の、何十回忌か何かに當るのかね」

と注意をした。これは貞山も赤面して、

「イヤ實にどうも面目次第もない。實は前の日に何を讀んだのか忘れてこの始末、これから氣をつけますから、どうぞ御勘辨を願ひ度い」とあやまりました。そこでその翌日、今度はさ

すがに氣をつけて、他の物を讀んだところ、前の方に來てゐた老人が、連れの客を顧みまして、「オヤ、今日は讀物が違つた。毎日元助を讀むやうだから、お前さんに聞かせたいと思つて連れて來たのに、これは生憎でした」

とこぼしたと申します。以て如何にこの人の、元助が好かつたかが分ります。いゝ弟子が多勢ありましたので、その社中は宛も今の角道に於ける出羽の海部屋や立浪部屋の如く、實に多士濟々たるものであつたと申します。即ち貞丈、貞鏡、貞朝、貞花、貞宗、貞林、貞豊、貞國などいふ面々この貞丈は初代で、後に師名をついで四代目貞山となり、貞鏡は後の三代目貞水で、貞朝は貞吉から後年には邑井一となりました。貞花は二代目貞丈から五代目貞山になり、更に錦城齊典山となつて先年物故、その門人が今の六代目貞山であります。又貞宗は後に二代目桃川如燕になつたと斯ういふ

具合に皆一方の大將株になつた有望の面々が揃つてゐた譯で、三代目は弟子の初代貞丈に四代目貞山をゆづりまして、自分は三代目典山になるべき筈でありましたが、ちよいと御幣をかついだといふのは、前に申した初代の典山が、文字も教養もあるところから、つい講釋が餘談に亘つて、調子に乗るとすい分時の政治を批判しては、役人の悪口をいふやうな事もあつた。その政談に亘つたといふ廉でお咎めを受け、江戸拂ひになつたのであります。三代目はそれを氣にしまして、

「どうもさういふ名をついで、又何かあるといやだから」

といふところから、典山をつがずに一山となりました。一山は日本一の山、即ち富士山といふ意味ださうで、

「晴れてよし、曇りてもよし富士の山、元の姿は變らざりけり」

といふどころから、
「ナニ、典山だらうが貞山だらうが、一山だらうが同じことだ」

とこれにした次第、弟子の貞宗などは同時に一仙と改名した。これは師匠が一ヤマだから一ヤマ一センといふ洒落だつたさうで、扱一山は明治二十二年三月廿一日、五十五歳で歿しました。青山に寺があつて、法號を一山眞透居士と申します。

一立齋文車 (一)

この講談落語名人誌も、段々お話が、明治年代へ近づいて参りましたが、講談も近世になればなる程、堅い時代物より、軟かい世話物が、一般の好みに應じて發達しましたことは自然の成り行きでありませう。従つて世話物よみの名人も、追々に出て來た譯で、そのトツプを切りましたのが、初代の一立齋文車でありました。この人は本業が

豆腐屋さんです。豆腐屋だから軟かい讀物の、トツプを切つたなどは自然の洒落に出來上つて居りますが、好きから講釋師を志し、山の手廻りからこの道へ入りました。その頃、山の手といふのは、素人の天狗連といふ意味で、本職でなくともよかつたのですから、好きで講釋なり落語なりを演る者は、皆この方へ出演しました。然し本人も最初はキマリが悪かつたと見えて、女房にもその事を告げずに内しよで寄席歩きをした。女房が不審を起し、

「豆腐屋は朝が早い家業だから、夜も用が無ければ早く寝る筈なのに、毎晩業を終ふとどこかへ出て行く、夜中に遅く歸つて來る。舉動もソワソワとして落つかないが、事によつたら、夜盗でも働くのではなからうか」

と心配した。夫婦の情としてもつとも話ですたまりかねたから聞いたところ、吹出して懐るか

ら講釋の種本を出して見せ、

「實はこれ／＼だ」

と話したので、女房も安心したといふ笑ひ話があります。これが遂に本職になりましたが、元より師匠などはなく、一本立でこれになつたのだからといふので、扱こそ一立齋と號し、お豆腐のことを、和名で文ぐるまとも申すと聞き、そこで文車と名をつけました。偶然にもいゝ名を選んだもので、一立齋文車といふ文字は、裏から見ても表から見ても同じ文字であります。元の家業が豆腐屋だからといふので、人呼んで豆腐屋文車と申しましたが、硬いものは少しも讀まず、生一本の世話講談ばかりを演じましたから、忽ち人氣に投じまして、おまけにそれが頗る巧いと來てゐるので遂には押しも押されぬ大家となり、八丁荒しの名を取りましたが、この初代文車の歿年を詳かにしないのは残念であります。續いて二代目文車

になりましたのは魚屋の倅で、目に一丁字もない程、正式の學問をしなかつた人ですが、性來の講釋好きで、年中講釋場通ひをしてゐる中に、スツカリ講談の呼吸を覚え込み、とうとう十八歳の時に本職になりました。これも別段に師匠を取らず一立齋文車の二代目を名乗つた。もつとも或は、初代の縁邊でもあつたのかその點は判明して居りませんが、この二代目文車は銀座尾張町の裏通りに住み、馬琴翁の話によりますと、色の白い目のクルツとしたいきな男で、世人がまだ全部散髪にならぬ前から、頭をいが栗にしてゐたので、一くせあり氣な坊主に見えたさうで、然し拵えはどこまでも江戸向きで、結城紬の着物に同じ袴天を引かけ、羽織は決して着ず、平ぐけの少し廣い位の幅の狭い帯を二つ廻して横つちよでキチンと結び、箕入でも何でも、氣のきいた物を持つて居り、着物の下には腹掛をかけてゐて、歩く時は右の肩を

少し前へ出すやうな癖があつたといふ事、高座へ上ると腹掛の中から、小さい拍子木を出してチヨキンと軽く釋臺を叩いて辨じ始める。張扇は使ひません。萬事がこの行き方で、學問の足りないところは、總て見聞で補ひ、あらゆるものへ目を通して、世人のいふ事を耳にとめ、常住不斷、智識を廣くすることを心がけて居りました。讀物も初代同様、諸家の評定とか軍記とか、さういふ堅い物は讀まなかつたが、端物即ち世話の人情講談と來たら實に巧かつたもので、誰から種を得たものか、掛川無宿の源太などいふ珍らしいものを讀み得意にした籤原檢校などは無類で、讀口も簡潔で齒切れがよく、特別に大きな聲をするのも何でもない。普通に聽客と座談をしてゐるやうな調子で、世間話を引事のマクラに振る。その引事が千變萬化、ここからどこへ移つて行くか分らない。いつになつたら本文へ入るのだらうと思つてゐる

中に、いつの間にやら知らず／＼講談の眼目たる昨日の讀みつきへ入つてゐる具合が實に鮮やかで、これ等が眞の名人と思はれ、その引事も毎日變る。これは博識でなくては出来ないこと、これが面白くて、毎日の引事だけを樂しみにして聞きに来る者もあり、その頃はどこの席でも、聽き巧者の通客が多かつたから、

「今日こそ一つ、文車のマクラから本文へ入る、替り目のところを聞き當てやう」

といふ意氣組で、耳を立ててゐたものでした。なかくつかまらぬ。文車は相變らず四方八方の世間話から始めるのですが、これが又不思議な味があつて、つい面白いから迂つかり聞いてゐると、モウいつの間にか本題へ入つてゐるには、皆舌を卷いたものだつたとあります。

一立齋文車 (二)

その引き事も俗事ばかりで無く、時には論語孟子の章句を引き、これを詳細に講ずるところ、餘程學問のあるやうに見えたといふことで、ある時銀座の重松といふ席へ出た時、大入の聽衆を前にして、例の如く冒頭の引事に周易の事を話しました。申す迄もなく易といへば易經から卜筮の方法は元より、それに引續いて九星から家相人相方位の吉凶、何でも心得てゐないと講義は出来ません。それを文車が詳細に講じたので、聽衆いづれも感服した中に、何代目のやら有名な本國堂といふ本職の人相家が交つてゐて、閉場してからも後へ残り、

「先生失禮ながらお前さんは、餘程易の事は明るいが、どこで修業をなすつた」と聞いた。すると文車が、キマリの惡さうな顔をして、

「さう仰しやられると面目ないが、實は私は學問

をしないので何にも知りません。唯、見た事や聞いた事を熱心に氣を入れて覚えて置くばかり、それ故寄席へ出かけるにも、晝間の四つ頃（今の十時）に家を出まして、途中を急がずアラリ、町の兩側へ眼を配つて往來いたし、少しでも變つたものがあると足をとめて、見たり聞いたり、これが私の學問でございます。商人の小僧さんが、お使ひに出たのなら、道草は禁物脇目もふらず、急がなくてはいけません。講釋師は精々道草を食はなくてはいけません。易のことは、淺草藏前の大笠で覚えまして、

と答へました。この大笠と申しますとは、現在南元町署のある所の少し先きに、その頃名鳥茶屋といふ割烹店があつて、その隣の所へ毎日店を出す風變りの賣卜者、机を前にして泰然とあぐらをかき、八卦を立て易を説いてゐる有名な先生、頭上を見ると直徑四尺ばかりの大きな笠がブラ下つ

てゐるので、世間ではこれを大笠の易者と呼んでゐた。文車は淺草の席へかゝる時があると、例によつて早く家を出かけ、この大笠の前へ立つて毎日熱心にその言立を聞き、充分に易の講釋を覺へたのでありました。その事を申しましたら本國堂も舌をまいて、

「ウーム大道の立聞きとは思はれない。よく覚えなすつた」

と感心をしましたので、自分もいろ／＼と人相の事について参考になりさうなことを教へたと申します。兎に角記憶力と藝才とがなくてはこの眞似は出来ません。初代の文車は豆腐屋文車と呼ばれましたが、この二代目は世話講談の大家ゆえ名人文車、後に芝愛宕下鹽竈神社境内仙臺屋敷に住んだ故仙臺屋敷文車、講談の中で特に人を斬るところが水際立つて巧く、斬られた人のバタ／＼倒れるのが目に見えるやうだつたので切られ文車、

「それでは兎に角手見せとして一席何か讀んでやらなさい」

といつたところ、

「よろしい」

とばかり浪之助が、いつ稽古したものでやらお富與三郎を滔々と辯じました。この一席を聽いてゐる中に文車の顔色が段々眞面目になつて来て、聞き終ると膝を叩き、

「恐れ入つた。ア、實に巧いもの、これ程出来たら成程本職にならうといふ氣も起きたでせう。よろしい。これなら物に成りますから引受けました」

といつた。浪之助も大きに喜び、こゝで改めて師弟の約を結びましたが、この人が即ち一立齋文慶で終生名を變へず、文慶で通しました。大正四年三月十六日六十九で歿し筆者もよく聞きました。これがこれ亦近代の名人でありました。文車にはこの

高座で實に鮮かな程小手が利いたので、巾着切文車といくつも肩書がありました。名人文車は結構だが、如何に小手が利いたので、巾着切りなんぞは有がたい綽名ちやアありません。この文車が四日市の翁亭へかゝるとよく聴きに來る客があり、これは日本橋茅場町の石橋といふ御用達の番頭で海老根源藏といふ人がありましたが、その人の俵で浪之助といひ靈岸島の質屋の主人です。金廻りがいゝから出演者は大でい最辰になつてゐたが、そんな風だから堅氣の店は保てない。とう／＼家を潰しちまつた。その浪之助が文車を酒席へ招いで飲みながら、

「今日は折入つて相談がある、どうか私を弟子にして講釋師の修業をさせてくれ」

と言ひ出しましたので、文車は懇々とその不心得を戒しめ、意見をしたらとて本人なか／＼諦めない。そこで文車が、

文慶の前に文玉だの文吉、文晁等の弟子があり、才子多病とやら、身體が弱く、明治十四年十一月八日、四十九の若さで亡くなりましたは惜しいこと寺は築地の妙覺寺で、法號徳明信士と申し、文車のあとは文玉が相續、こそは本名春日岩吉、綽名をガチヤ文と呼ばれ、至つて粗々かしく高座も賑やかな讀口、ちよつと類の無い味をもつた人で西遊記などを得意とし、大正六年八月十一日七十歳で歿しました。

龍玉と正藏

藝が巧くともそれ程に、人氣も立たず評判にもならず、記録にも残らぬといふ、割の悪い一生を送つて、バツとせず終つてしまふなどといふ人も、例の無いことではありません。初代の蜃氣樓龍玉の如きがそれで、つまり運が悪いのでありませう。本名住田金作とのみ生年月も終りもハツキ

りして居りません。故人三外家小勝老の談話によつて、その人の藝風や逸話を聞き、片鱗を知り得たのみであります。推定によると、明治二十四五年頃世を終つた人ではないかと思ひます。一説によると、街頭から寄席へ進出した人ださうで、麴町の通りで有名な岩城榭屋の角へ、年中出張つて群集から思召の投げ銭を貰ひ、大道で口演してゐたのが、後に寄席へ出るやうになつた。だから師匠と定つた人もなかつた譯で、獨立で蜃氣樓龍玉といふ藝名を選んだ次第、あまり立派な名で位まけがしたのかも知れませんが、講釋師ではないが落語家でも、水滸傳とか、雲霧五人男、八百屋お七などの、續き物人情話ばかりをし、これが實に巧かつたといふ事、もつとも大道で叩き上げた藝人に拙いのは無い。拙くつては立止つて聞いてゐる客が皆行つちまひます。それを逃がさず引止めて、鳥目を投げさせるやうにするのには、餘

程藝がしつかりしてゐなくてはなりません。その苦勞をして來た龍玉だから確かなもので、小勝老などは大に褒めてゐました。もつとも小勝は若い時にこの人の弟子になつた事があつたのださうでその小勝の談話によつても、實に巧い人だつたがお客には人氣がなかつたといふこと、それゆえ懐は苦しくて、年中ビイ／＼してゐました。然し貧乏はしてゐても氣前はよく、誰を連れて歸つても決して口を濡らさずには歸さなかつたさうで、「マアいゝゝ、寄つて行きな。……オイ、おつかアヤ」と家へ入る。「オヤお歸んなさい」と女房も心得て、すぐに膳の支度をする。「オイおつかアヤ、今歸つたよ」と聲をかけると、アイといつてお膳の上にお銚子が乗つかる。

「さすが龍玉さんのおかみさんだ。氣が利いてゐるな」と仲間の連中は、誰もこの夫婦をほめないものはなく、間拔な女房に叱言をいふ時には、「龍玉さんとのワコを見習え」といつた位なもの、ワコといふのは女房の隠語であります。ところが豈はからんや。何も女房が氣が利いてゐる譯ぢやアない。夫婦の間に、かねて打合せが出来てゐたので、山と川との合言葉ぢやアありませんが、龍玉がオイおつかアヤと聲をかけて家へ歸つたら、蕎麥なり鮎なり、見つくるひで食事だけを出し、おつかアヤの下へ、今歸つたよがついた時は、それへ酒を添へて出すといふ寸法にきまつてゐた。されば別段にあらたまつてオイ何かさう言つて來ななどと號令しないでも、客と話をしてゐる中に、モウ臺所へは、お待遠様と岡持がくり込んで來て、

「何にもありませんが、お一つ……」

と座敷へ現れやうといふ仕掛なのですが、さうとは知らないから客は、女房の機轉に感心したものの、種を聞けば矢張り亭主がえらい事になります。その龍玉がある時、木原店の寄席をはねて、日本橋を通りかゝると、其頃はひ橋詰には多勢人力車夫が辻待をしてゐて、

「へ、旦那々々、おやすく参りませう」

と番をかけた、龍玉は振り向きもせずに行かうとすると、中には口の悪いのがゐて、

「いけねえ〜。勧めたつて無駄だ。種が悪いやお化けだ〜」

といつた。夜だけ出て働く落語家だからといふのでせう。龍玉もムツとしたが、クルリ振向いて両手を合せ、

「ア、どうぞ來世からは、人間でありながら、牛馬の眞似をせずとも世を渡れますやうに」

と唱へ事をしながら車夫を拜んだので、さすがに口の悪い連中もみんな事しつべし返しを食つてキヤフンと参つたといふ逸話もあり、又ある時、仲間

の正鶴といふ、怪談師のところへ遊びに行つたら、夏の事で、世話場の正鶴何にも出せない。然し折角の珍客ゆゑ申刺しのハゼを焼いて、素麵か何かを下物に一口出したところ、龍玉すかさず、

「さすがにお前さんは怪談師、出した馳走が気に入つたね。ハゼ恐ろしいソーメンぢやなア、てのどうだえ」

と洒落をいつたといふ逸話もあります。怪談師は毎夜幽霊を出して、ハテ恐ろしい執念ぢやなアといふのが紋切型。この正鶴は本名吉本庄三郎、後に五代目林家正藏となり、大正十二年三月六日一百歳の高齡を保つて歿しました。恐らく、講談師落語家中、長壽者としては最高の記録保持者でありませう。彼も亦名人の一人でありました。

二代目伯圓

京橋の橋上で高聲に、

「オイ今夜はどつちにしやうな」

「實は乃公も迷つてゐるのだ」

「巾着切りか。泥棒か」

「巾着切の方が面白からうぜ」

「矢張り泥棒の方がよからう」

物騒な相談があるもので、これが何だといふと京橋の橋詰には、前にも名の出た橋番松五郎のやつてゐる都川といふ寄席があり、一方は橋の南側現在角に銀行のある所の裏通りを丸太新道といつて、その頃は角に鰻屋の竹葉がありその隣にあつた清竹亭といふ講釋場、この二席が京橋を挟んで對立、その一方へ前申した巾着切文車がかゝり、一方へは泥棒伯圓と肩書つきの二代目伯圓がかゝり、どつちも巧くて面白いので、講釋好きの客が

毎夜〜どつちを聞いたものだらうと、迷つた揚句こんな相談をやつたので、知らない人が聞けば

びつくりします。巾着切文車に泥棒伯圓、相對立しての競演だから、面白さも一層で兩席とも大入り何で泥棒などといふ、穩かならぬ肩書がついたかと申しますと、時代物世話物何でもこなした中にとりわけて白浪物が得意だつたからで、その事は追々に申述べますが、この伯圓は本名若林義行、元は常陸下館石川伯着守家臣郡奉行手島助之進の四男で幼名辰彌、後に親戚の彦根藩士若林家へ養子に行き若林駒次郎と改稱、義行とは後年の改稱であります。幼少から草双紙を好み、子供を集めては講釋の眞似ばかりしてゐたので養家を勘當され、大小を投じて張扇を叩く講釋師となつたのは十六の年、最初はちよつと名人潮花の弟子になりましたが、更に二代目の所謂琴調馬琴の門に轉じて調林と名乗り、一體が霸氣満々たる精力家であ

つたから、次第に賣出して眞打になり、やがて二代目伯圓を襲名いたし、初代をも凌ぐ名人と稱せられましたのは、全く努力と技倆とによるものでありませう。讀書によつての素養と、性來の才氣とにより、殊に創作力に富んでおましたので、新に讀物を草案したり、或在來の種を補綴潤色して、七十有餘種の講談を完成しました。「天保六花撰」「安政三組盃」「遠山政談」「鼠小僧」「佃の白浪」「鬼神のお松」等はその主なるもので、「お富與三郎」も伯圓が完全なものに大成して、「國定忠治」をも補修脚色、また、際物を得意として、明治十二年に三十間堀の黒田侯邸で、白井六郎が父母の仇の判事一ノ瀬直久を刺した當時の如き、その夜すぐに同じ三十間堀の春日といふ寄席で、この復讐事件を演じた程ゆえ「立志美談」(高島嘉右衛門傳)「藤田の初雁」(藤田傳三郎の傳)「萩の露山城日記」(山城屋和助の傳)「熊

本電報録」(神風連事件)「明治天一坊」(松平慶承の詐欺事件)さては「夜嵐お絹」「高橋お傳」「横濱小僧殺し」「雪の夜話」等、明治になつてからの出來事を、いくつも講談に作りました。又その演出に就ても、新機軸を出して人氣を取つたもので、明治十年に西南事件起りますや、伯圓は直ちにこれを講談とし、尙、從來の釋臺を廢して高座にテーブルを用ひ講演するなど、伯圓はすべてこの行き方、又その講談を作るのにも周到な用意を以て臨み、ある時淺草辨天山の晝席へ出て夜席は四谷の荒木亭でありましたが、伯圓は自分の前講に中座を二席勤むる花井晴山と連れ立つて淺草から四谷へ、その頃の事だから、勿論歩いて駈持をする途中、晴山に向つて、「下町はどうでもいゝが、山の手へ掛つたら、毎日違つた道を歩いて下さいよ」と頼みました。晴山は乞はるゝ儘に、毎日々々

通る道を變へましたが、伯圓は矢立と紙を出して一々その所の名や、附近にある大名や旗本の、邸を聞いては書き止めました。(何をするのだらう)と晴山は不審に思つておましたが、後に伯圓が前にも名の出た尾張町の重松といふ寄席へかゝり初めて鼠小僧の新作を披露した時、治郎吉が山の手各所の、大名や旗本を荒して廻るところを述べるのに、所在地や道筋を、實地の通り手に取る如く辯じたので、(ア、先日中、山の手でいろ／＼調べたのは、此地理を知る爲めであつたか)と晴山始めて合點がいつたといふ逸話もある位又、芝居が好きで、講談の中にも、大分臺詞仕立を取入れたところがあり、その作品を、默阿彌翁などが脚色して、芝居にしたものも少なくありません。而してこの人の經歷中、特筆すべきは長く

も明治十九年三月一日、永田町の鍋島侯邸へ至尊御臨幸の御前講演を勤むべき旨の御恩命に接し伯圓は齋戒沐浴「楠公櫻井驛訣別」の一席を、謹んで天聽に達し奉つた一事であります。これ獨り伯圓その人の光榮のみならず、講談界無上の光榮と申すべく、かくて伯圓はその名聲晩年迄衰へず初代の桃林亭の後をついで松林東玉と改めましたが、明治三十八年二月八日、鶴見の隱宅にて永眠、淺草永住町稱念寺々中覺善寺に葬りました。行年七十四歳であります。(詳傳は講談落語今昔譚にあり)

○伯圓の門葉 伯圓は明治講談界の第一人者ともいふべき全盛を占めたる爲め門人も多く、その中猫遊軒伯知、初代伯鶴、右圓等傑出、右圓は師の歿後その跡をついで三代目伯圓となり、又別に、有名な悟道軒圓玉ありて、筆記物を専門に先師の讀物を面白く世に傳へたりき。

三遊亭圓朝 (一)

下谷は谷中の全生庵、申す迄もなく鐵舟山岡鐵太郎先生の建立開基にかゝるお寺であります。その鐵舟寺の入口に、圓朝の碑がありまして、地内には墓所もあり、近世落語界第一の巨人たる、三遊亭圓朝は、永遠にこゝに眠つて居ります。これは圓朝が生前から、山岡先生と深い御縁故がありましたので、墳墓も同寺内に定めた譯であります。而して、山岡先生は、幕末から明治へかけ、無敵強剛の大劍客として知られ、又、明治元年江戸城が官軍進攻の目標として、最大の危機に曝された時、挺身努力死線を超え、非常なる働きにより、江戸を兵火の巷から救つたのみならず、徳川家の臣節を完からしめた、維新史上の大功勞者であります事は、今更申述ぶる迄ありませんが、先生は劍道のみでなく、永年に亘る禪學の、命が

けな修養によつて、深い悟りに徹してゐた爲め、これを劍道に應用し、遂に無刀流を編み出した。劍禪一致の達人であります。従つて人格の高い事も、比類なき程でありましたから、その徳風を敬慕して、あらゆる階級の人たちが、日夜周圍に集まつて参ります中に、當時人氣者の圓朝もゐたのであります。圓朝は本名出淵次郎吉、天保十年四月江戸に生れ、祖父の代までは、前田備後守に仕へた武士でありましたが、父の長藏といふ人が、大小を捨て退身し、前に出ました二代目圓生の門人になつて、橋家圓太郎といふ落語家になりました。これが圓太郎といふ名の初代であります。俵の次郎吉もその爲め、圓生の弟子になつて小圓太と名乗り七つの時に江戸橋土手倉の席で初高座、至つて孝順な性質で、父母兄に仕へつゝ、師恩に報ひ、具さに辛酸をなめて群を抜く大看板になつた立志傳的一代記は、刊行せられた書物もあり、

圓朝全集十三巻中にも、詳細を盡してありますから、本編に於てはその洩れしを補ふ程度の、外線にのみ止めて置きますが、十七の時から圓朝の名で看板をあげ、自身で數多の人情噺を創作し、若い頃には道具を使つて芝居噺をしたが、後にはそれも弟子(圓樂改め三代目圓生)に譲つて、自分は扇一本の素噺となり、迫眞の妙技に聽衆の魂をつかむ巧さが、斯くは圓朝を斯界の第一人者たらしめたのであります。ある時その圓朝が、山岡先生のところへ伺ひますと、子爵は喜んで圓朝を迎へ、

「いゝ所へ來た。頼みがある」
 「ハア何御用でございますか」
 「一つ、話を聞かして貰ひ度う」
 「よろしうございますとも、圓朝に劍術を使へと仰せられまして困りますが、私は落語家で、話をいたすのは家業でございますから、如何にも承

知いたしました」

「然し、話には注文があるぞ」

「ハア、どんな話をいたしますか」

「桃太郎をやつて貰ひ度い」

「へエ、桃太郎……と申しますと！」

「お前は、桃太郎を知らぬのか」

「イエ、知らないことはございませんが、あの、昔々、お爺さんとお婆アさんがあつて、爺は山へ

柴刈りに、婆は川へ洗濯に、大きな桃が流れて來

て！」

「さうく、その話だ」

「へエ、あれは小兒衆のお伽話で、御大人方には

大して面白くもございません」

「ところが、それを聞きたいのだ、ぜひやつて貰

ひ度い」

「左様でございますか。……イエ、やれと御しや

れば、いたしますが……」

「どうかたのむよ」

「へエ」

と圓朝も、意外の注文だから、ちよいと面くらひましたが、お好みとあれば據るございませぬ。そこで鐵舟先生始め、居合せた方々へ、あらためて桃太郎の話を、一席辯じました。ところがちつとも面白くない。先生は苦い顔をして、

「まづいなアお前は……」

「どうも何しろ、やりつけませんので」

「それにしても、面白くないよ」

「恐れ入ります」

「恐れ入らずによく考へてごらん。私が小兒の時母親が毎夜のやうに、桃太郎の話をして下すつた實にそれが面白くてたのしくて、今以て忘れられない。素人の母が、小兒を對手に話す桃太郎、それがあんなに面白かつたのに、本職の、而も一流といはれるお前が、こんなやさしい話をして、ち

つとも面白くないとはどういふ譯だな」

「へエ」

「その譯がお前には分らないのか」

「どうも分りかねます」

「分らなければ教へて上げる。お前は話をどこで話すね」

と山岡先生が追究しました。

三遊亭圓朝 (二)

妙なことを聞かれて圓朝も怪訝な顔を致し、

「どこといつて、話ですから、口でしゃべる他は

ございませぬ。舌の働きで聲も出ますので……」

「ア、それだからいけないのだ」

「エツ、舌を使はないで何で話します」

「サアそこを考へるといふのだ」

「へエ」

「平常から私がやかましく、禪の修行を勧めてゐる

るのはそこだよ」

「禪をやれば、それが分りますか」

「分るとも、そればかりではない。世の中の事が何でも分る」

「へエー」

「天地を貫く諸法の實相原理が分る。それでなくともお前は、永年自分の藝道に苦しみ、それによつて可なり深いところまで、眞の悟りに近づいてゐるのだ。モウ」歩突破すれば、すぐと悟道の妙境にも達せられるのだから、それに就ても禪の修業をしなくてはいかん。その代り、首尾よく悟りを開いて見なさい。藝も更に一段と巧くなつて、名人とも言はれるところ迄行くぞ」

「エツ、それは本當でございませうか」

「本當だとも、決して嘘は言はん」

「そりやアどうも有がたいことで、それでは近く日をあらためてお手引きを！」

「イヤいかん、日をあらためてなどと、そんな悠長なことを言つてゐるから、いつでも時期を失するのだ。思ひ立つたが吉日といふ位、今からすぐにとりかゝりなさい。禪は急げといふことがある」

「恐れ入ります」

「洒落ではないよ。すぐと座禪を始めなさい」

「へエ然しどうも、今すぐといふのはあまり……」

「何があまりだ、何も差支はない」

「なくはございませぬ。いろ／＼用事もあり、夜分は席へも参りますから」

「何だ用事なんぞ、いづれ身邊の日常俗事だらう人生出世の本懐をつきとめやうといふ大問題とは

くらべものにならん。席などは斷りを出して休ん

ちまへ。急病になつたと思へば仕方がないではな

いか」

「エ、然し……」

「然しも何もない、サア此方へ〜」
 手を取らぬばかりに一室へ連れ込み、座り方を教へて座禪を始めさせました。圓朝も驚きました。が、先生が睨んでゐるので逃げ出すことも出来な。い。それには圓朝も一かどの人物、モウこれ迄と覺悟をきめ、座禪を続ける氣になりました。困つたのは圓朝の家の者で、いつ迄たつても歸つて来ないの、山岡邸へ迎ひに来るやら、その中に寄席へ出勤の時刻は迫る。イヤ大騒ぎをしました。が山岡先生どうしても圓朝を歸しません。圓朝も觀念して、これから幾日かの間、座り続け考へ続け結果、果して今までに經驗のなかつた澄み切つた心地を覺え、夜のあけたやうな氣分になりました。即ち悟りを得たのであります。圓朝は思はず感激の涙にくれ、
 「先生、有がたう存じます。分りました。お蔭を以て分りました。ございませす」

「オウ分つたか、それはめでたい。どう分つたな」
 「何もかもすつかり分つたやうな氣がいたしますそれは餘りに廣くて大きく深いものゆえ、とても一口には申し盡せませんが、第一に先生の仰しやつた通り、口の先だけで話をしやうとした圓朝は間違ひでございました」
 「さうか」

「先生の御母堂様が、まだ御幼少の先生へ桃太郎をなされま身たのは、どうしたらこの子によく分るだらう。面白く思ふであらう。爲めになるであらうと、その一心をこめた魂でお話をなされまされたればこそ、今日になつても忘れぬ程面白く楽しくお感じになつたのでございませう。話は口先でなく、心で話すべきものと分りました」
 「えらいツ、さすがに圓朝、よく分つた。尙この上とも工風をしないさ」
 と勧められ、圓朝も成程とます〜、勵みがつき

「一層精神の修養に心を用ひましたので、さらぬだに天稟の技能人格に一段の光彩を添ふるに至り、扱こそ今古の名人よと、稱せらるゝ巨匠とはなつたのであります。圓朝が無舌居士と號しましたのも、この悟りによりましたもので、まことに三界唯一心、心外無別法とやら、山岡先生が心の外に刀は無いといふことから、無刀流を獨創せられたのと全く同じ意味と思ひます。斯くて圓朝は一般の藝人とは全然超絶した心境と生活の中に、明治三十三年八月十一日、六十二歳を以て下谷車坂の宅に歿し、前申した如く鐵舟寺へ葬り、法名を三遊亭圓朝無舌居士と申します。辭世に曰く「耳しいて聞定めたり露の音」まことに禪味深甚の好句と思はれます。

○圓朝餘事 初代圓生に源を發せる三遊派は、圓朝出るに及び、俄に興隆の威を張るに至りぬ。さればその直門にも、數多の大家上手を出せるも當然の

結果といふべく、前記三代目圓生、初代圓馬、初代圓橋、初代圓喬(後の四代目圓生)の四名を圓朝の四天王と呼ばれ、就中、圓馬の如きは、物によりて師をも凌駕する程の巧者にて、東兩國の駒止に住みし故、世に駒止めの圓馬と呼ばれしが、以上の四人に次ぐものとしては、鼻の圓遊、先代新朝、圓巷、圓雀(後に二代目圓馬)圓玉、初代萬橋、二代目圓太郎、金朝、圓三郎(後の圓)二代目名人圓喬、初代圓左、二代目小圓朝、初代圓右(晩年二代目圓朝)圓好(後の三好)圓藏(後に初代小圓朝、改め圓樂、晩年一朝)等を主なるものとし、其他亦少なからず、而して夥しき圓朝の作品は、十三卷の圓朝全集に收められ、その中の牡丹燈籠が、本邦講談落語速記本の濫觴となりし事、圓朝の弟子を愛せし事、藝風その他、右全集及講談落語今昔譚その他に詳しければ、紙数の制限を思ひ、これを省略する事となしぬ。乞ふこれを諒とせよ。

○深夜の慘劇 前章に述べたる二代目柳枝の未だ柳朝と言ひし頃、門人に梅朝といへる若者あり。八丁堀の柳屋といへる待合茶屋の俵にて、藝も器用な

る好男子なりしより、粹が身を食ひて素行修らずその上盜癖あり、放蕩の金に窮するあまり、次第に悪事を重ねしを、土地の同心衆より注意せられし母親は大に驚き、淺ましめな倅よと、身も世もあらず歎きしが女氣の思ひつめ、家名の爲めに心を鬼にし、ある夜梅朝の久々に歸宅せしを快く迎へこの世の名残りに寢酒など飲ませ、熟睡を見ずまして慄へる手先に、刺身庖丁を以て梅朝の咽喉をめぐり突立てしが、女の非力に手元も狂ひ、肩先を深く傷けたるにぞ。梅朝はアツと叫びて剝起き妹も目をさまし、母は度々失ふて泣崩るゝなど、唯ならぬ物音に、近隣も走せ集まり、役人も出張せしが、重傷の梅朝は、苦しき息の下より、己れの犯せし罪状を自白し、自殺を企てしところを母に止められたるものにて、決して母が私を、殺したのではありませんと、これも最期の善心に復りしにや、母の罪を庇ひたる證言を遺して絶命したり。これが爲め梅朝は、自殺といふ事にて落着せしが、こゝに不思議は、その夜師匠の柳朝（即ち後の二柳）ふと目をさませしに、枕頭に梅朝が、悄然と座し居れるより、今時分何の用ぞと尋ねし

が、見聞を皆おろそかにせず、材料化する手腕に敬服せりといふ。この一事圓朝に直接關係なければ、因を以て附記するのみ。

桃川大如燕

ひとり本人のみならず、講談界全體の譽れとなるべき、御前講演の光榮は、前章に述べました伯圓よりも前に、初代如燕が拜して居ります。而も前後二回に亘り、場所は伯圓と同じく、鍋島侯のお邸でありました。當日だけは如燕も、從五位の下といふお位を假に頂いたのださうで。さうでないとも長くも天聴に達します資格がありません。けれども本人控へ所に待つてゐる中から、恐れ多さに全身がブル／＼慄え、どうしても止まりません。これは臣民としてさもあるべきところ、こんな事で勤め損じては大へんと、お係に願つて少しばかり御酒を頂き、それでやうやく、勇氣が出て

に、師匠には永らくの間、一方ならぬお世話様になりましたが、私もこの後、據なき事があり、遠方へ参ります。あとに残りました母と妹のこと、何分よろしく願ひますと言ひ、出で行かんとするより柳朝は、呼止めんとせし自分の聲に驚かされ目さむればこれ曉方の一夢なりしにぞ。不快なる夢を見るものかなと、思ひ居たるところへ梅朝の死を知らせられるにぞ。いよ／＼奇異の思ひをなせしとあり。而も不思議はこれに止まらず、日本橋木原亭の席主伊助も、同じ時刻に同じ夢を見たりの事にて、要するに梅朝の靈が、生前恩を受けし人々の許へ、禮を述べに來りしものならんとて、いづれも哀れを催せしとぞ。而して柳朝は、この折の感懐を俳句とし「曉の襟元寒き寢ざめかな」と詠ぜしが、梅朝の母親が律義の心より我子の悪事を深く憂ひ、家名の爲めこれを除かんと、同人の歸宅を待受け、何もいはずに突然刺殺したるこの慘劇は、この椿事を聞きたる圓朝が、早速取入れて自作の人情噺に應用したりき。即ち「栗田口露笛竹」の中、幸助ころしの條にして、さればこの事件を知りし仲間の誰彼は、いづれも圓朝

來たと申します。その中に時刻が來ましたので、恐る／＼設けの席へ罷り出でましたが、勿體なくもすぐ間近に、玉座のお設けが拜せられましたから、如燕餘りのことに恐縮し、間のお唐紙をしめて頂きました。襖越しに言上をしましたが、これではなくてはとて講演が出來なかつたと申します。まことにもつとも千萬の次第、當日の演題は「木村長門守勘忍袋」これで如燕が又困つたのは平生の高座では、秀吉公だの家康公だのと演つて居りますが、お場所柄を辨へず、臣下の名稱へ公といふ敬稱をつけていゝものやら悪いものやら、その判斷に苦しみました。さうかといつて別室には、慶喜公なども陪聴のお許しを賜はつて居られる事ではあり、呼びすてにするのも如何なものといろ／＼苦心いたしました結果、家康朝臣が……といふやうな具合に辯じました。成程朝臣なら差支へありますまい。然も、藝道は不思議なもの、

恐縮しながら読んで居ります中にも、次第に熱が加はつて参りまして、諸大名荒茶の湯の條などは、本人も得意のものだけに、滑稽も入つて大車輪、畏くも殊の外、天機に叶ひまして、龍興御斜めならず、御還幸の砌、側近奉仕の方々へ、有がたきお言葉が下りましたと承はります。まことに此上なき大名譽で、さりながら本人は一切夢中全身の汗は流るるばかり、襦袢を透して衣類までビツチヨリになつてゐたさうですが、これも無理ならぬこと、この如燕は本名杉浦要助、根津の宮永町の生れだと申すこと、幼年の時に眼病を煩ひまして、危く失明するばかりになつた。
(可愛い我子を生れもつかぬ盲人にしては大へん)

と兩親の心配は一通りでなく、一心に菅谷の不動尊を信仰し、その御利益でやうやく癒りましてところから、親たちはお禮心に、要助を坊さん

に、しやうといふ考へ、そこで成田へ入れて修行をさせました。(別説には、上野凌雲院の御用部屋に勤めたとあり)けれどもその中に、考へるところがあつて還俗をいたし、お山を下つて講談界へ入りましたのが、要助十八の年でありました。少年時代に佛門の修行をして、修養を積んだお蔭か、それとも性來か、至つての好人物で、切め二代目燕晋の門に入り、伊東國榮と名のりましたがその後燕國と改名、幼い時から讀經の修行で咽喉を吹切り鍛へ上げた爲めか、稟とした名調子で、講釋には持つて來いの聲量がありましたから、藝がどの位冴えて引立つたか分りません。小栗十勇士や兩越評定などを得意としてゐる中、一貫齋天山といふ、以前は横沼の菊藏といつて長脇差から講釋師になつた大へんな經歷の持主ださうですがその天山が噴嘩兇狀で三宅島へ流され、島にゐる間に自分の見聞した過去の事實をまとめたといふ

關東七人男、それから鍋島の猫騷動を潤色した佐賀の夜櫻、この二つを天山から教はり更に伊東凌西の作つた笹野名鎗傳もゆづり受け、ますく讀物をふやし、賣出すと同時に桃川燕玉と改めて桃川派を起し、更に燕林から如燕となつた。勿論如燕の名はこれが初代で人呼んで大如燕と申します黒田清隆伯や安田善次郎氏等、名流の人々に愛せられ、その關係によつて前述の如き、無上の光榮に浴したのであります。佐賀の夜櫻に興を覺へて猫の講談を幾つも作り、これを如燕の百猫傳と申しますが、この如燕も芝居好きで、夏場など芝居がりに化猫の講談をやり、失敗をした愛嬌談なども傳はつて居ります。斯くて盛名を歌はれつゝ明治三十一年二月横濱の丸竹亭に讀切へ頼まれて出演、晝席に大久保一代記を讀んだまでは無事でありましたが、夜席に「楠の泣男」を講演中、半ば頃より甚しき苦痛を感じ、中止して降壇する始

末となり、翌日やうやく歸京したものの、本所横網の自宅まで行く事も叶はず、その頃京橋木挽町一丁目に住ひし門人若燕(後の二代目如燕)の許に赴き、病臥せし儘重態に陥りましたので、家人等駆けつけ看護に手を盡しましたがその甲斐なく遂に同月二十八日の曉方に、歸らぬ旅へ赴きました。而も息を引取るまで、昏睡状態に陥りながらも、例の百猫傳やら、兩越評定など、得意の講談をうわ言に辯じてゐたとのこと、藝道熱心の程も想はれます次第、これらは眞に名人の最期と申すべく、時に行年六十七歳、谷中初音町觀音寺に葬り、法號を桃川院辯覺如燕居士と申します。その跡をつぎし二代目如燕所藏の掛軸に、「目出度さや百事すまして大晦日」とあり、又ある時、程といふ題にて「足る事を知つて上見ぬ柳かな」性來の大酒を氣づかつて節酒をすゝめられ、「身の程を知れと仰せを水にせず、汲分けてのむ養老の酒」

と詠みしなど、風流詩歌の才もあつた人でありました。

談洲樓燕枝

「圓朝は、高座のすがたが餘りしなやかで、いさゝか厭味だと思ふくらい色氣があつた。それからかなり謙遜の態度であつた。その反對に、燕枝の高座は頗る傲然としてゐた。しかし燕枝の傲然さは、しつくり板についてゐた。圓朝には、御召が柄にはまり、燕枝には無紋の黒羽二重がよく似合つた。さうして、それがそのまま、二人の藝風であるといふことも出来ると思ふ」

以上は斯道の大通たりし、故人増田龍雨氏の隨筆中から、借用いたしましたものでありますが、まことに簡にして要を得たる、適切な批評であり紹介であると思ひます。實に燕枝は、東の横綱三遊亭圓朝に對する西の大關に位し、團十郎に對す

る菊五郎（藝風はその反對でせうが）でありました。この人本名を長島傳次郎といひ、小石川表町傳通院の生れで、父は長島清助といふ酒屋さんでしたが、後には今でいふ請負師の仕事を始めましたので、傳次郎も折には父の代りに現場へ出かけ、監督をした事もあつたと申します。然し何分にも、幼少から風流を好み、文藝に親しんだ性格が、どうも家業に適しません。帳場にゐても暇があれば句案に耽つて浮んだ想を、帳面の端へかきつけるといふやうなことで、運座廻りをして夜を更かしたり、落語が好きで天狗連へ出たり、そんな事をしてゐる中に、とう／＼初代柳枝のところへ弟子入りをして、傳枝と名乗る身とはなつたのですが、天狗連で場数をふんだ丈けに進みも早く、二十五の時には眞打となつて、柳亭燕枝と稱しました。なれども何分前に述べた二代目柳枝といふ兄弟子はありませんし、當時は色物落語の席も、不振を感

めた頃でありましたから、燕枝も可なり生活に苦しんだ時代があり、田舎廻りをしたり、道具入芝居で團十郎の聲色を使つたり、種々の經驗を積んだ末、明治十八年頃には亭號を談洲樓と改め、素斬専門の大眞打となつたのであります。藝風も一本調子で武士や俠客は巧く描寫しましたが、若い娘などは得手でなく、晩年などは殊に團十郎型の濫好みになり、高尚に過ぎて色氣に乏しく、一般受けはしなかつたとの事、然しながらその爲めに、今までやゝもすれば下等卑猥の嫌ひありし落語が、一體に品がよくなつたのは、此人の功績であると言はれて居ります。要するに落語家らしからぬ常識家で、博覽強記の物知りでありましたし、文筆もあつて、有名な假名垣魯文翁に師事し、戲號をあら垣痴文と稱し、一流の狂文を作つて、同好者から珍重された外、著はしたのも少なからず、創作も圓朝の向ふを張つて、佐原の喜三郎や

梅津長門、大阪屋花鳥等の活躍する「島千鳥沖津白浪」や、御所車花五郎の出て来る「西海屋騒動」等、皆燕枝の手になつたもので、されば三題話に於て、特にその技能を發揮したことは申す迄もなく、燕枝の作に係る巧妙な三題斬が今日も幾多傳はつて居ります。殊に特筆すべきは、燕枝が權威ある劇評家であつたことで、性來の芝居好きから芝居道の事に精通し、團十郎菊五郎を始め、俳優全部に親交のあつたのみか、演劇鑑賞に確かりした定見を持つてゐた爲め、その劇評肯啓に當り、本職も一般も、會得感服する批判をされましたから當時の新聞劇評家も、その片言隻語を争つてのせたといふ事が、その頃劇通の第一人者と言はれた三木竹二氏の書いたものにも出てゐますし、最近市川九藏氏が刊行した「市川團藏」傳の中にも、名優團藏を燕枝が批評し、團藏がその忠言に基いて、前人未發の名型を工風し、大に燕枝も感服し

た逸話が出て居りました。それやこれやで根岸派の劇通と合評にも加はり、その場合はいつも頭取を勤めて、猿丸太夫、又は鹿山人等と着名、そんな關係で、森田思軒、饗庭篁村、幸田露伴、高橋太華、久保田米遷、幸堂得知、須藤南翠、關根點庵等、根岸派の文士達と交遊し、實にあらゆる方面に、知己の多かつた人でありました。斯くて燕枝は三遊の圓朝に對して、柳派の重鎮と仰がれつゝ、自分が談洲樓を名乗るに因んで、落語中興の祖人たる、烏亭焉馬の名をつがうと志しましたがその目的を達せぬ中、明治三十三年の春、痼疾の動脈瘤が次第に重り、病床に呻吟する身とはなりません。平素から交際の廣かつた人として、見舞客踵を接し臨終の前日まで、枕頭は訪客で賑はつたとあり、同年二月十一日、家族門人等に圍繞され本所南二葉町の宅で、遂に亡き人の數に入りました。時に行年六十三歳。葬儀は盛大を極めて淺草

清島町源空寺に葬り、法號を柳高院傳譽燕枝居士と申します。

○燕枝の門業 燕枝の門下には、燕花後に燕壽(三代目柳枝)小燕枝(後の燕路)燕鏡、柳梅、燕車、鶴枝、京枝、傳枝後燕柳、小燕、燕柳、燕勢(後の禽語樓小さん)錦枝、楓枝、燕多、朝枝、つばめ、春枝、燕花(後の三代目小さん)等多數あり三代目小さんの門人小三治改名して小燕枝より二代目燕枝を相續せり。

○燕枝の歿年 明治三十三年は落語界にとりて厄年なりしにや。二月十一日燕枝歿し、八月十一日圓朝逝き、十一月十四日三代目柳枝死しぬ。而も圓朝も燕枝も、月こそ違へ、同じ十一日を命日とせること、亦一奇といふべし。

○燕枝の墓所 長島家の菩提所は小石川傳通院なるも源空寺に墓所を定めしは、八丁堀朝田亭の席主等と謀り、燕枝が奔走斡旋して、同寺に俠客幡隨院長兵衛の碑を建てし緣故に因る。而して燕枝の墓には裏面に大槻如電居士選文、永井素岳氏書の小傳を刻し、表面の「談洲樓燕枝塚」の六字は「九世三升書」と落款を添へ、市川團十郎の揮毫した

るものなり。

松鯉の伯山 (一)

天一坊で土藏を建てた、初代の神田伯山には、高弟の三代目伯龍を始め、初代木偶坊伯鱗、伯馬伯角、伯壯など八十二人も弟子がりましたが、その中に伯勇といふ少年、これは本名を玉川金次郎と申し、飯田町九段中坂下の、荷車宿の俵に生れ、父が大さう講釋好きのところから、金次郎も一緒に講釋場へ同行される中に、これも趣味を覺へて大好きになり、講釋師になりたいといふので十五の時に、初代伯山のところへ弟子入りしたのでありますが、空板を叩いての修業なか／＼容易ではありません。十八になつた年の正月のこと伯山が神田今川橋の染川へかゝり、夜講を終つて家へ歸る。その頃伯山は神田お玉ヶ池に住んで居りまして、金次郎の伯勇はその供をして参ります

師匠の家まで送り込んで、それから當時は馬道に越してゐた自分の宅まで歸るのだから、電車のない昔のこと、席の遠い時などは辛い分難澁をしたものでございます。とりわけて舊の正月だから、夜の寒さは一通りでない。ビュー／＼風に肩を縮めながら、小走りにチヨコ／＼ついて行く。師匠の伯山は鮫小紋の脚絆に、白足袋雪駄ばき、いつも自慢に高座へも持つて出る、銀ごしらえの脇差をさしまして、チャラリ／＼と先へ立つて歩いておりましたが、後ろをふり返りまして、「オイ伯勇、寒いから蕎麥を食つて行かう」と申しました、空腹ではあり伯勇喜んで、「ヘイ有がとうございます」「提灯を消しな」「かしこまりました」「傍の蕎麥屋へズイと入る。」「入らつしやいまし」

「御免よ」
伯山は上る。伯勇は提灯を消して上り口へ腰を掛けてゐると、

「エ、お誂えは何にいたしませう」

「さうさな。ア、矢つ張り天ぶらがいゝや。天ぶらを一杯、それからお酒を一合頼むよ」

と申しましたが、伯山の注文はそれつきりで、あとは何にも言はないから、女中も變な顔をしませんでした、伯勇は尙驚き、

（オヤ、私のはどうしたのだらう。先生忘れたのかしら、今に氣がつくだらう）

と待つてゐる中に、

「へエお待遠さま」
と注文の通り天麩羅一つにお燗つき、伯山は平氣な顔で箸をとり上げ、悠々と食べ始めましたから、伯勇は呆れ返つたが、伯山はそれを尻目に、美味さうな湯氣の出るお蕎麥を一口吸つてはチビ

り、と熱燗を傾ける。寒さは寒し、腹のすいてゐる目の前で、これを見せつけられては堪つたものではありません。

（エ、俺のは全體どうしたんだらう）

と澁面作つて焦れてゐる中に、伯山は落つき拂つて食事を終り、

「姐さんいくらだえ、ア、さうか、こゝへ置くよ」

と懐から財布を出して鳥目を膳の上へのせ、

揚子を咬へて立上りながら、

「オイ伯勇、提灯をつけな」

と呆氣にとられてゐる伯勇を、促して戶外へ出ました。風は益々強く眞暗な晩で寒さはシン／＼と身にこたへます。

（何でえ莫迦にしてゐる。とう／＼俺には何にも喰はせなかつた。何てえ師匠だ）

と伯勇は、心中に大憤慨、口もきかすについて行くと、暫く行つてから振返つた伯山が、

「伯勇」

「何ですツ」

「一杯やつたんで乃公はスツカリ暖かになつた。彼處の蕎麥屋は店は小せえがな／＼美味く喰はせるぞ。第一酒がいゝや。もつとも蕎麥屋は、酒がよくなくては場違ひだが、しかしお前も、天麩羅はくひたくはなかつたか」

と聞きました。伯勇は腹の中で、

（ベラ棒めえ、聞く迄もない事だ。蕎麥を食つて行かうといふから、此方は御馳走になれるものと思つて、有がとうございますと言つたんだ。禮まで言はせて置きながら見せびらかし、喰ひ度くはなかつたかもないものだ）

と不平は忽ち顔の色にも出てふくれながら、
「何も私は、天麩羅なんぞは贅澤だから喰はなくともいゝが、寒いからせめて、打かけ位は食べたうございました」

と答へると、

「さうだらうとも無理はねえ、然し、打かけだのモリだのと、ケチな事を言はずに種物でも何でも食ひねえな。いゝか。寄席の歸りに蕎麥屋へでも寄つて、一杯やり度いと思つたら、ウンと骨を折つて精を出し、早く一人前の眞打になりなよ」
と伯山が申しました。

松鯉の伯山 (二)

伯勇は年も若く、すつかり怒つてゐた所だから師匠のこの一言も快くは受取れません。

（何をいやがる。大きにお世話だ）

といふ反感が胸へ込み上げ、師匠を宅へ送り込むと暇乞ひもせず、サツサと馬道の自宅へ歸りましたが、口惜しくて残念でたまりません。親は有がたいもので、寢床の中から父親が聲をかけ、
「金や今お歸りか、火もおこつてゐる。お湯も沸

いるから、御飯食べて早く寝ちまひな、寒かつたらう今夜は又別だ。しかし寝しなだから、餘り澤山食べなさんなよ」

とやさしく言はれれば言はれる程、伯勇は一層ムシヤクシヤ腹が納まりませぬ。茶を打かけてボソ／＼飯を掻つ込みながら、考へれば考へる程しやくにさわるので、

「ネエお父さん、俺はモウ、講釋師なんかやめちまひ度くなつた。成るにしてもあんな師匠の處については居られない。先生を取かへたいと思ふよ」

と言ひ出しました。父親は不審に思つて、「何だつてだしぬけに、そんな事を言ひ出すんだどうかしたのか」

と心配して尋ねるのを、

「どうもかうもあるものか、實は今夜これ／＼だ禮まで言はせて置いて蕎麥を自分一人で喰ひ、美味

向きで飯を食つてゐる伯勇には分りません。

「サア／＼早くねてしまへ」

と父親に言はれ、疲れてゐるから寢床へ入るとそこは若い者ぢきに眠つちまつた。翌朝になつて目をさますと父親が見へません。晝頃になつてから歸つて來たから、

「お父さんどこへ行つたのだ」

「どこへ行くものか。師匠の所へよ」

「ア、それでは昨夜の事で、俺の暇を取つて來てくれたのか」

と聞くと、

「莫迦野郎何を言やがる。俺は先生に禮を言つて來たんだ。親の心子知らずとやら、師匠として弟子の可愛くないものはない。自分ばかり物を食べるより、弟子にも奢つてやり度い、喜ばせ度いのは當り前だが、いやな思ひを堪へても、弟子をどうか一人前の立派な者に仕立てやりたいと思へばこ

さうに見せつけられ、俺は極まりが悪いやら、今夜のやうに腹の立つた事はない。その揚句に戶外へ出てから、喰ひ度かつたかと聞きやアがる。喰ひてえのは當り前ぢやアねえか。さうしたら、夜席の歸りに一杯やり度いと思つたら、早く眞打に出せしるだどよ。呆れ返つて物もいへねえや」

と伯勇は、ボロ／＼涙をこぼしながら興奮して居ります。これを聞くと父親が、さうか、成程お前の怒るのも無理はない。分らない師匠だなア。とでも合槌打つかと思ひきや、今まで寢て居りました父親が、ムツクリと寢床の上につき直り、神田お玉ヶ池の方角へ兩手を合せて、

（ア、有がとう存じます。數ならぬ私の倅を勵まして、立派なものにしてやらうと思へばこそ、よくそれ迄に仰しやつて下さいました。忝なうございます）

と頭を下げて心中に禮を述べたのですが、後ろ

そ、出來ない我慢をしてさういふ仕向をし勵まして下さるんだ。有がたい先生の太恩を、忘れると汝師匠の罰が當るぞ。ア、忝ないと思ふと、乃公は有がたいやら嬉しいやら、昨夜はマンヂリともしなかつた。夜のおけるのを待ちかねて、乃公はお玉が池へお禮に行つたんだ。先生は乃公の顔を見るなり、ヤアお父さんどうしたえ、倅が昨夜何か言つたかえ。ウムさうだらう／＼。若いから無理はない。モウやめる位な事はいつたらうと思つた。お前さんも一緒になつて、心持を悪くすると思つたら、わざ／＼禮に來てくれるとは、失禮ながら恐れ入つた。それでこそ私も張合があるといふもの、如何にも將來見込みのありさうな子だから、此上とも辛抱するやうに、お前さんからよくさう言つてくれると仰しやつたぞ。あんないゝ師匠はねえ。お前も有がてえと思つたら、一生懸命に修業をして、早く立派な先生にならなくてはいい

けない。今後又途中で、いやだなどと勝手にいふと、勘當しちまふぞ」

と言ひ渡しました。伯勇も言はれて見れば成程と感じ、殊に性來親孝行で、親のいふことは決して逆らはなかつた人ですから、

「どうもお父さん済みませんでした。これからは我儘を申しませんから、どうぞ勘辨しておくんなさう」

と父にもあやまり、これから一心不乱に身を入れ出しました。人間精神の入れ方で、すべてがスツカリ變るもの、伯勇も俄に進境著しく、遂に後年は數多の先輩を飛越へて、師名をつぐ大看板になりました。これぞ二代目神田伯山、即ち後の神田松鯉であります。

文治と文樂 (一)

御年配のお方は御存知ですが、昔、尻とりとい

をついで二代目桂文治になつたとしてあります。

その三代目は江戸の人で、初めは二代目可樂の門人で翁家さん遊と申しましたが、このさん遊が大阪へ参りまして、前記初代文治の長女こうを妻として同家の聲となり、その縁によつて三代目文治を襲名、それより江戸へ歸りまして、これから文治といふ名が江戸に傳はつたのであります。そして其後、養子の才賀に四代目文治を名乗らせ、自分も改名して桂文樂となりました。これが文樂の名の初代であります。三田に住つて嘉永四年九月樂翁と改め、更に同五年九月大和掾と名乗り、安政四年六月二十六日歿し、法名は笑壽亭桂文遊樂居士としてあります。さて四代目文治をついだ才賀は元徳川家直參伊賀組を勤めた武士だとしてあります。本名は分つて居りません。四代目文治から後に二代目大和掾になり、又、桂壽と改め慶應三年六月二十六日四十九で歿し、法名は童遊

ふものがありました。筆者など幼年時代遊びの繪草紙などに、その文句が繪入りで印刷され、何といふ意味も分らず、教はつた儘に覺へてゐたものですが、それは「牡丹に唐獅子、竹に虎」「虎をふまへて和藤内」「内藤様は下り藤」……といつたやうな文句で、一番終ひが「咲いた櫻になぜ駒つなぐ」といふのであつたと思ひます。その中に「下谷上野の山かつら」「かつら文治は話家で……」といふ一句がありました程、この桂文治といふ名は、由緒ある斯界の大看板になつて居ります而して落語家系圖を調べますと、桂文治の名は大坂から始まつたもので、北野大融寺檀家新町新堀町伊丹屋宗兵衛事初代桂文治としてあります。この初代文治は妻女をやすといひ、長男三太、二男文吉、長女こう、二女みねの四子があり、文化十二年十一月二十九日卒、行年四十三歳、法名桂月空昌信士となつて居りまして、二男の文吉が跡目

亭大賀桂壽信士、次に三代目文治の門人文太郎が二代目文樂から改めて五代目文治になりましたが萬延三年二月十六日二十一の若年で死んで居ります、法名は桂嶽文秀信士。ところで四代目文治の長男に由之助といふ伴がありました、七つの時から高座を勤め、舌で四つ竹を打つて喝采を博すなど、神童の名を得ましたが、この子が成人して三代目文樂になり、更に桂文治の六代目を相續、本名も桂文治と申しました。もつともこれは恰度明治初年に戸籍法が制定せられ、皆氏名を届出する事になつたのでその際藝名を其儘本名にしてしまつたものらしく、他にも同様の例はあります。筆者もこの六代目文治の晩年の高座を聴き、老練で規格正しきその藝風に感服しました。永らく落語組合の頭取を勤め、道具入り芝居漸に長じ本物の芝居も巧かつたとのこと、それもその筈、この人は踊も立廻りも本式に修業をしたのだといひます。